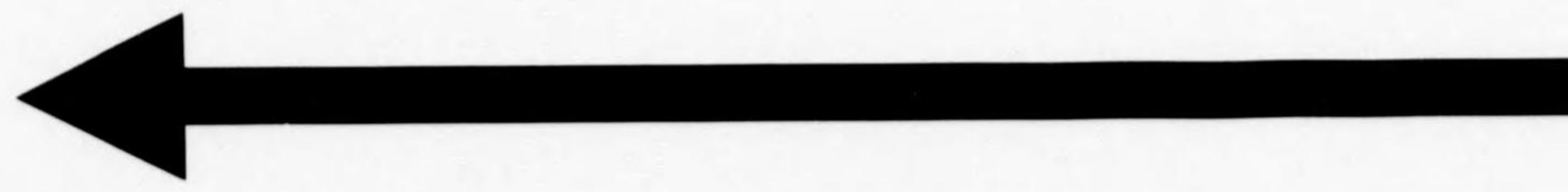


64-265
1200501278146

64
265



始





川路聖謨文書第六



64-265

川路聖謨文書 第六

目次

一浪花日記

自嘉永四年五月十二日
至同年十月朔日

○嘉永四年六月廿四日聖謨奈良奉行より大坂町奉行に轉補され翌五年九月十日更に勘定奉行に轉す即此日記は大坂町奉行轉任前後のものにして其前半は江戸留守宅に後半は奈良殘留の家族に送致せしもの、如し抑此日記は前收寧府紀事に續くものならんも夙く嘉永三年正月以降翌年五月の部分を逸して傳らず且大坂町奉行在職中の記事も亦早く失はれたり

一房總海岸巡見日記

自嘉永六年六月廿二日
至同年六月廿八日

一四三

○嘉永六年六月十八日聖謨は目付戸川安鎮葦山代官江川英龍と共に若年寄本多忠徳に従隨して房總海岸の要地巡見を命ぜられ一行は同廿二日發足して翌月十七日歸府したり

目次



一 長崎日記

自嘉永六年十月廿九日
至同七年二月廿五日

一四七

○嘉永六年七月露國使節布恬延長崎に入津し定界通商の締盟を需む依て同十八日幕府は聖謨及大目付筒井政憲を全權に任し目付荒尾成允儒者古賀増を隨員と爲し共に赴かしむ此日記は即長崎出張中の記事とす猶聖謨には魯使應接日記と題する一卷を傳ふ此日記に比較するに間々出入あり聖謨の記する所に依れば當時四種の日記を記したりと言へば或はその一種ならん共に幕末外國關係文書附録一に收められたれば参照せられるへし

一 下田日記

自安政元年十月十七日
至同二年四月廿九日

二四九

○安政元年十月露國使節布恬延下田に入津す依て同十七日幕府は聖謨并筒井政憲下田奉行伊澤政義目付松本毅實勘定吟味役村垣範正儒者古賀増に之が應接を命じ同十二月廿一日日露和親條約を締結せしむ即此日記はその任務中のものなり此日記亦幕末外國關係文書附録一に收めらる

一 京都日記

自安政二年九月七日
至同年十一月廿一日

三四三

○安政元年四月皇居炎上に依り翌二年八月九日聖謨は石河政平に代りて皇居造營掛を命ぜられ九月七日江戸を發して任に就き大坂砲臺場所見分を兼ね果して同年十一月廿一日歸府せり

一 京都日記

自安政五年正月廿一日
至同年四月二十日

三八七

○安政五年正月九日老中堀田正睦日米修好通商條約勅許奏請の爲上京を命ぜられたるに依り聖謨は目付岩瀬忠震と共に隨行を命ぜらる即同廿一日江戸を發して上京し勅許奏請に盡したるも勅許を得る能はずして同四月廿日歸府せり

浪花日記



嘉永四年

○五月十二日 おりく雨 土屋を直書かたの内状来るくらの挨拶とし
てちみ二反被賜之其書面に新右衛門を申せしことなとしるし有之候
○十三日 はれさむし 中敷二段上り也月次を講釋あり○三輪の神杉を
得たり夫にてたにさくかけをつくりたり夫を淺野へ遣すとて古跡にて

此杉は大方にあらず味酒をミワノマツ三輪のやしろの嚴イサの神杉
嚴いつとよむ威嚴の嚴のことく万葉いつ櫛のもと真淵説也村田へ遣すと
て中古のふりにて

玉匣タマヒツクミトイフハみもろの山の神杉を万世かけてみそなはせ君
かくいひやりたり

浪花日記 (嘉永四年五月)

庭訓に
猿樂田樂獅
々舞傀儡子
とありしと
覺たり

○十四日 快晴 朝例之通庭中の遠足三里半也冷氣にてひやく也五時
過六十八度也○例之通大かくら來る半日其さわき也わかこゝに來りたる
ときは十六七にていまた藝の出來さりし若もの絶技をつくす也市三郎に
いひきかせしは士は四民の上にて天下を治むるを役とす文事ならず
は武事いつれにても大かくらと素人とちかふたけの藝何にても御役にた
つこと一事なくてはならず夫なくて父の祿をとるは祿盜人也さてわれな
らへ來り六年之内に上下共に仕出したることなきは遙に大かくらうち
にはおとりけりとて大に歎息せり上かたの大神樂はみな袴着用一刀を帶
せり江戸より古風にて先屋敷内之兩いなり弁天に行かくらを奏し畢る庭
にて藝をする也左もあるへき事也獅々舞は江戸より上手也いにしへの田
樂をかねたるものに似たり

○十五日 くもり 月並之禮受ること例のことし○大和國行倒死人追々
多しみな飢人也捨子など多し迷子も有其内八才になる男子與力之方々來

り動かす外へ行は非人に衣類を剝るゝといふ也段々穿鑿したるにふしみ
の土手にて親に辨當一ツをもらひわかれたる也奉行所の表こしかけに臥
るよし也人々不便かりて食物を與へ三四日置たるに夜々狸出て食物を奪
ふよし夫は長吏へ引渡してやりたるに又壹人來りて前のことし人の教ふ
る躰もなし小兒にても窮するところより智出るなるへし其外二三才の水
死人度々あり親乞食の捨るなるへし既に子二人を吉野のかみなひ川とい
ふところの岩淵といふ所へ投こみたる女非人ありて壹人存命にて其こと
をいひ村役人共召捕來れり不届至極也され共わか先妻などはこれより甚
しきもの也わかき女など別而可恐は色欲也われ女非人を吟味していろい
ろと考みるにこれにかはらぬ親世に多し只かく荒からぬのみ

○十六日 雨朝くもり 乘馬いたす馬今度は斃るへしとおもひ居たるに
此度の別當になりよく世話をやき隔日に塩湯を遣はせひるはやしきうち
遊はせ歩行よるもかひをよくつけたるに毛つや直りて至而健になりたり

極老故とおもひ居たるにおもひの外の事也人も養生にて健なること疑へ
からすわか健なることなど全手當による也今も十四五里のみちは容易に
歩行して劍術一本位はつかう也新右衛門こゝろすへし新右衛門養生のは
なし不承候いかし

○十七日 雨冷氣甚し 興福寺之碑銘をかくに惣字數五百はかりあり朝
飯よりかゝれば必四ツ過より御用向はしまり一字かきては用人に談し一
行書ては與力の逢故にいつも書損甚し十二枚はかり書たれと未全けふは
考附て未明に起て墨をすり書かゝり四ツ時までに畢りたりいまた氣にい
らぬ也

○十八日 雨 昨日五月八日出六日限之書狀相届先以母上様被爲初候而
御機嫌克恐悦之至母上之御狀拜見○横山の初節句に被爲入候由鐘三郎
も目出度候母上所々御佛參等恐悦之御事也○市三郎に手習可申付と之御
事奉畏候晝夜私そはに附切にて文事爲致候而御狀之躰よく文事は無

おさとを詠
するされう
たなり雨
雲とらで
とほなり
げろくさ
なるかみ
まのあな
はいこと

之事と被思召可被下候乍去此ほと軍記などはすきに相成よくよみ候而人
の論などいたし申候母上之孝行と存候而學問等いたし申間敷旨長壽心
懸候様ありかたく奉存候保養專に仕候學問もみなこゝろをやすくいたし
眞のたのしみを得可申と仕候義にてくるしみ候而はいたし不申候ならへ
參いろくの事に出逢其内別而は彌吉病死其次は狂女など申サは心のい
たみ候わけに候得共少もめげ不申健に候は少々書物すきにて夫たけの心
にゆとり有之候故に可有御座候ならへ參り候二三年之所にて元來は大煩
なといたし候譯に御座候しかるに丈夫にて此節など家來末々迄之内にて
左衛門尉第一に健に御座候兩三日已前にもアンマ參り腹など別段にたし
かに相成候由申候さもと奉存候義に御座候○昨日などは御用向之外は碑
文四百字はかりなるを書夕かたより京地を參候一垂弟子と黄昏まではな
しいたし居申候おさといふ今日などは母上へ申譯あるへしめつらしく刀
のはなしなどいたし居候との事也酒は日々はのみ不申候折々也少も過酒

らしき事無之候。節句などにてても酒給候得は必手習いたし酔をさましふせり申候間。いつも中坐仕候右にて凡御察可被下候。其余の事おさと可申上候。おさと可申上とは衣類等之御返事にて珍事にあらず。

○十九日 くもり 新右衛門方之書狀別番受取日記一覽候。○盜賊御用心段々御尤也。されともいかなる事なれば被召捕不申御府内事騒敷候哉。人妖とも可申事也。可恐。○柴田病氣之由左候は、六ヶ月はかゝり可申候。○日記之内東門一件口上書相添候由御安心の御事也。○新右衛門灸事有之由至極の事也。灸事われによく覺候。上去々月頃たしかに證有之候。馬場にて馬にのり候處常より一段早し申サは躰かるゝといたし候。躰不審に付別當へ承候處一昨日灸事せしと也。灸事ならば七日は休ませ可申をいかゝと申たり。馬にてさへに如斯人も同じかるへし。○別番之人御察之通也。右に付縷々之御愼方等御尤也。さて諫言は間違にてても御用之御様子感心せり。

○廿日 雨 勝南院宮内といふ興福寺之衆徒醫をよくす家内之もの共た

のみ切也。この藥を吞まぬはわれはかり也。まさの死を救ひその難治の症を直したり。俊藏の娘も同じしかるに出入之もの之内にて宮内はかりいまた紋服を不遣よりてきのふかれを招き骨折はまさその入用はわれ出して酒をのませたり。常に酒を買てのますといふされ共氣まゝ酒の大酒也。酔て市三郎と腕おしをするに市三郎兩手にても不叶よほと。の大力也。力にほこりて腹を出してみするに相撲取のことし目かた廿七目あるといふ也。書かける布袋和尚に少も不違はらのはり出したるところへ猪口二ツ手しほさら一ツをのせて不落みなゝ大に驚たりちゝみ紋附を遣したり。○江戸の氣生ひものゝ如き男故金を多遣ふ男なればあしきもやられすよきかたひらを遣したり。木辻町の遊女を買に行けは必遊女を一人も不殘買ひてそこに酒をのみさわかするといふ男也。諸事これに准す醫はよほと上手也。みやくなとくはしきこと也。この醫ある故に安心してかける也。醫者には可憐大方也。三十目位のもの自由にもつ也。けしからぬ事也。

○廿一日 晴 少々時候直りたり○おさと又けろくも今日にて八日目也
當人も難義尤いふへからす左衛門尉もこまる也おさと不快之時は書物常
々バイ程よめる也これはおさと不快なれば御用向々外はなしありて
も時候位のこと其上は飲食のことな位のことなれば也雜談等曾あなし
○廿二日 晴 泉水に小魚夥出來たり○けふ貞助順右衛門の悴共池のは
たの芝原にて遊び居る故に小魚をほしくはもて行といひしにとりたかり
て淺きところにていろくすれととれす女共ザルにてすくひたるに一す
くひに十も廿もとれる也子共の喜び大かたならす太郎敬次郎等をかくな
して遊はせたらはいかに喜ふらむなどおもひ居たる也泉水ふかき所は大
人のへその邊までもあれとふちは漸五六寸也砂利多き所は水少の時は駒
下駄にて歩行也故に兒共にもあふなきこと更になし金魚に六七寸もある
もの多く緋こひには壹尺四五寸も二尺なるもある也家來共はみな鮎をつ
る也

○廿三日 晴 きのふは母上もおさと打臥て父上の御酒の御相手する
ものなし然ルに女共のはなしにて聞にをと、日も父上御一人なれば大に
御寂寞にて御こまりと聞たればおもひ附て日くれころより馬見所をあけ
て庭のけしき御覽かてら御酒奉りたり日くれころになりたるに馬場の溝
のふちに螢一ツみえたりあれ螢よなといひてしはし過けるにこゝかしこ
みゆる也やかてかなたこなたと飛こふさまなといとよし泉水にもほたる
出來れと二つか三つ也よりてめつらしとおもひて行てみるに馬場の溝の
ほとりに數多ことしは生したりこれは與方らか御堀の水にて魚を飼とて
一乘院宮御泉水へせきいる、春日山の水谷川の末を引たるか馬場のふち
の溝となり居る也それ故に生したるなるへしなかくによきけしき也馬
場をそこゝあるきたるに蛙所々になきていとくめつらし初々蛙の御
役宅に居るを知れりこの蛙といふは則古今集の序に花に啼うくひすと對
にいひし水にすむ蛙とある蛙也字はいかにかくやしれぬ也蠅の字なとか

くかもしらぬ也今江戸其外にて蛙といふものとはいたくことなるもの
也カジカといふものこれ也其聲凡エンマカウロキといふもの、聲或はコ
マ鳥といふものなと合たるかことくにて絶妙なるもの也江戸にても高田
水いなり脇の田のみそには居るといふ也され共上かたの蛙には遠く及は
ぬといふこと也大僧正慈圓か井手の蛙の干物となからの橋のかむな屑と
をとりかへたるといふはなしもあればいにしへよりカシカを蛙也としら
ぬ人もありしなるへし字にて何とかかしらぬ故に古今眞名序には蛙を
秋蟬にかへて書しものなるへしならの蛙こと更に聲よきか万葉にもさは
川の蛙の聲をおもふ男にきかせたしといふこときうたありしと覺たり○
父上近ころ御足大にわろく被成られたれば一合の御酒にて御歩行ならす
歸りにはわれかたにかけて歸り參らせたり○おさと母上とも今日は御起
也

○廿四日 くもり 昨朝遠足三里半余也追々足早くなりて三里半余位は

半時余に歩行する也かゝることも修行によるものなるへし四丁位かけて
は息常の如し○番非人召捕參りたるものに十五歳のわか者あり衣類其外
共よろし無宿之由いへと無覺束よりて途中の小盗にて外に子細もなき故
に見切て門前拂にする積され共以後直り可申歟とこらしめに骨のいたま
ぬ様に牢屋敷にて牢問の格にてたゝきたるに外に事なしよく、異見を
加へなとしたるうちに親御慈悲願に出たり所持之盗物は無宿盜賊より預
たるよしにて取上急度叱りに成たり親は引渡前に其方いかにこりしやこ
りて以後は慎は格別左もなくはいくたひも攻たる上にて首をとるへしと
いひたるに親なるもの進み出て御とのさまの御叱り心を改るやいかにと
ていたく叱りたり其躰子を異見する積にて前後を忘れしさま實情あらは
れてあはれ也さて急度叱り之申渡いたし繩をとき引渡やりたるにヤレ難
有、といひて泣ながら其子の肩をかい摺り引たり親は高もちに
て御代官所の村年寄也子をおもふ親のさま家來共なとみな涙を流したり

○此ほと米は又あかり口也こまりもの也市中の困窮よほとこの事也當年なと米不出來にて去年のことくならはいかならむとおもふ也幸に御くらに
いまた御米千石余ありこれにて當年の救ひはよし

校訂者曰 原本ニ五月廿五日ヨリ六月八日ノ記事ヲ欠ク按スルニ此日記ハ其任地ニ於ケル日録ヲ其都度江戸ノ留守宅ニ送り後コレヲ一冊ニ綴リタルモノニシテ今原本ニツキテ綴目其他ヲ檢スルニ欠日ノ分ハ散逸シタルモノナルガ如シ

○六月九日 大雨 御暇乞として東大寺 御靈屋春日并二月堂兩御門主
に參る○昨夜夜に入候一乘院宮へ參る前に記候通也○みや御手つから
禁裏より正月被賜候物之内之由少々御持被成たる躰のにしきの御鼻かみ
入を被賜候みや御落涙にて汝と又逢を必となしかたしなと被仰故にわれ
も涙數行下りる御受にこまりたれば不取敢

いや高きかすか山の千代の松立歸り來て仰かむとおもふ
と口よりはなしとも歌ともなく申候てさて私も七十致仕の上は必遁世し

てならへ來らむと奉存は別れなるもしはし之御事に候なと申たりきみつ
から御盃被下其御盃はもち歸りたり例の通なからわれなこりの酌してと
らせむなと御意ありて御酌玉はりていとノしめやか也市中にては専大
坂也といふ也さすれば近し又あひみんも同しなと御意ありき清幽樹の御
宴故に東大寺龍松院等々こときわかとりもち來れる儒者等は御椽にてわ
れは宮の御同間也御役なればこそかゝることも有いとノ有かたし○わ
れを宮へ御音物并御酒白銅の御薰物壺など奉りたり清幽樹に辨天あり夫
は町中之もの共參詣御免なれば折みふし也故御簾を垂られて御構なく入らせ
らるゝ也官家のこと關東の心得とはいとかはりたること也けふは春日東
大寺其外に參る歸りる兩御門跡へ出る一門にては御逢無之候大乘院にて
はいまた左衛門尉に庭をも不爲見其まゝに過し候こと殘念也汝か來りて
を穩に治り候段大幸也よりてなこりの惜まるゝによりて御酒を被下候
はいかゝとの事昨夜御意あり及御斷候處けふは御逢之上御庭のみゆる亭

に被爲召候御門主御出座にて親敷御物語昨夜汝に遣へしとおもひてし
るしたりとて五月雨にほととぎすと芙蓉の御書を御手つから給候あいろ
くとの御咄汝われをおもひ出は此書をみよなと御意あり又逢へしやい
かゝたと仰られて御咄切るゝ期なし取持として參候與力の隠居とても御
はなしはつき不申候奉行は殊々外御用多々旨中に付漸御暇給はりたり一
度も大乘院殿之御召に出候ことなきにかく仰らるゝはありかたし○市中
町人共之内困窮人共何々なり共使ひくれ候様多人數惣年寄共願出る不
及沙汰段申渡すこの類并品物持參之もの甚多しはしめは用人共心うれし
く思たるに夥なりて用多々うち利害に手かゝり候あこまるといふ故にわ
るくいふよりはよしとて穩に奇特之段爲申聞候

○十日 晴七十三度の暑也 出立には天氣都合十二分也○けふは少々お
もふ旨もあれはかこには不乘御役所之御玄關より歩行せり與力同心共先
例之通御役所御門前へ平服して暇乞いたす段々世話に相成候段詳に丁寧

にいたし候申述同心共にも相應辭遣すなら町々山城の木津迄與力共之
内別段にいたし候もの之由にて與力は若手之分不殘同心は十人はかり醫
者貳人勝南院宮内儒者槍遣ひ寶藏院之後見滿田權平等町人共迄夥來る木
津川渡船場に平服して川をわたり堤之上を行をうしろかけみゆるまで見
送たり市中之町人共は困窮を救はれ候前にしるしたる町々之もの共數百
人おもひく一二里より三里はかり送たりたり小兒を携へ老人を扶て夥敷
事也今迄なら奉行にかゝることなしといふ也其内目出度手札をしるす今
般御參府に付恐悅奉申上候且私義當亥九十三才に罷成長壽に罷在候處御
仁惠を以年々御手當被下置御蔭にて安穩に相暮し罷在候段私は勿論子孫
に至迄永々御高恩之程相辨如何計か難有仕合奉存候右爲御恩謝之御武運
御長久可奉祈候恐惶謹言なら西新屋町隅屋四郎五郎代孫四郎兵衛といふ
名札也其外御高恩を報候ため御武運御長久可奉祈といふをことをいふも
の多しそれはわか御用召之義を承り禮として物を差出ても少も貰はずよ

りて急に武運長久いのりの大石燈籠を春日へ納永世の報恩といふことになりて奥方之歸りまてに出來之積晝夜をかけてするよし其ことをいふなるへしと家來いひぬはしめて今日承たり長吏などいふものはひる休まて來れり儒者并花井隆助など同じ木津に而與力共に逢たるに涙數行下り辭をやられすかれらか方にても頭をあくるものもなし往來にて涙の下りたるは常に來る按摩平服して居るに一向わか姿をみることに不能故に家來を今御通也といへは默禮せり別當之悴は前々月父榮次にわかれ當月祖父死したりよりて來年十二月迄之養育料を與力にたのみ渡し遣したりこれも山城境まで來り例の通り笑ながら指さしなとして居たり老婆などは多くみな手を合てをかむ也かく民におもはるゝとはいかなる事にや嚴過て氣之毒なること多く其上にくらも仕殘したらけにて耻ることいとく多く大和の人氣わろしなといふはつやく受られぬ事也右之次第故披露多く給人一人にてはとても出來す供につれたる用人共供さむらひまて左右

に立並て披露したり其躰おもふへしかや助藏など永代御出入相願旨之書面差出し聞濟遣したる禮に京地まで來れり市三郎を供に召連たれば同人の供となり案内して京地など見物させたり猿樂の類に送るもの壹人もなし博奕打盜人は小躍して喜へし六年の間博奕盜賊は過半よりも減し猿樂は大にさびれたれば今日其もの共は大悅也可憐迄に弱りたるは寶藏院之後見と儒者也後見などは市三郎さへに目のはるゝはかりに泣てわかれたり儒者六里はかり送り路傍に平服して泣々わかれをいひき

○十一日 晴 きのふは旅宿へ京にて知ル人になりたる人々等多く來りて餞別なとくれたり菓子少かりしか夥出來たりならへ飛脚にて遣す右に付目錄二兩貳分はかり出たりこれも 君の惠也○今朝六半時所司代に参り紀伊守殿に懸御目いろく御物語いたす御同人不相替手堅御人也前代下野守殿にや近し紀伊殿并公用人共みな新右衛門に世話に相成候旨等被申候る宜と傳言あり畢る京之奉行へ参り夫若狹屋八兵衛方に而ひ

るしたくいたし候而四時過京地出立也三條より歩行いたし大津入口を駕籠に乗石場迄參る石原之使者出る石場之立場之二階を明拂たる所にあかりたるに程赤城か万帆とかいふ扁額ありて十三里の琵琶湖一望の中にありしはらくやすみてこゝにて家來共に暑氣拂の樂なと與へたり五苓散にてビハ葉湯ならぬもちといかゝこゝにて市三郎舟にのりて勢田へ行かむといふ俊藏あふなしとてとめたり夫を膳所之城下を出はなれて歩行せしに湖水より涼風吹來るいふへくもあらず野路にかゝりたるに比羅の高根に一片のくも起りて雷鳴せり

ひらのみね一むらくもの夕立にやとりをいそぐ野路のたひ人などいひて立場にやすみ居たるに雷頻にてひらやまは雲にて少もみえず烈風甚しみるく湖水にしらなみ夥たちておそろしきさま也こゝの立場には築山のわきに四疊半の高樓有まつあかりて湖水を見居たるに涼風氷をあふせるかことし矢はせのわたり旅人のさわくなるへしみな市三郎に

いふ御舟ならば今頃題目念佛うちませなるへしといひきけにも

武士はやはせのわたり早くともいそかは廻れせたの長橋

といふはまこと也と現に今そのけしきをみつゝおもひし也比え山おろしにて矢はせのわたしは危といにしへよりいふけに決してのるへからさること也

夕立はせたのはしにもかゝるらし比えの根高くひゝくなる神

といひしいやなるうた也夫を瀬田長橋にかゝりしに風に吹とはさるゝさま也みかみ山の上に赤きくもみえ湖水半面龍にても昇るともいふへきさま也

夕立のかゝりかゝらぬ有さまを雲書かき行しかの海面

とよみたり夫を一里はかり行たるにそのわたりは夕立ふりしとみえそこゝに水たまり有

涼さをわれになるかみ賜ふらむ夕立はるゝあとを逐ひ行

なといひき○立場にてわらにてつくりたる中字の筆をかひたり酒にてあらひ用ゆればよしと也今日も五里余歩行也○三條のケアケまで西村東藏之悴さゝや太郎兵衛來れり○夜に入本多隱岐守家來藤井玉城使者として來る隱岐守より鯉一尾鮒四尾くる、鯉は三尺余もあるへしふなは黒鯛のことし驚かさるものなし大なる鯉に付日雇頭までやりたれと洗鯉夥あまれりふなはさしみ其外になし余は本陣へ遣す今少し近くはならへ可遣にと人々いへり玉城と云人の年來知ル人也當年六十五歳と云壯健なる男也はや隱居せしか主人を左衛門尉之義に付汝使を可積旨差圖候由刀劔の事甲冑之事武士の陣頭に臨む心などをいひてはなし圖に乗て立てまねをするにいたる武篇もあり才氣もあり謀略もある老人也

○十二日 くもり 七ツ半時草津をたち出て十二里を経て坂下宿にいたる折々雨ふる冷氣甚し本陣へ着入湯之上袷單物着用也尤坂下宿はすゝかたうけの下にて蚊帳をもつらぬといふ所故にや○今日八里はかり歩行せ

り一向につかれす途中かこに乗らぬに三益あり第一は脚氣にて足のはるゝことなしすはりこみては直にはるゝ也第二に食よくこなる第三に隱徳也この意いろ／＼に通せり○すゝかにては所々にてカジカをうる也はしめたて場の茶屋のかこにいてあり市三郎みて蛙を何故かくするやといふ故にこれ例の古今の序にいふかはつ也といひしに龍介みて大に喜ひ直段を聞きに一ツ百五十也といふ段々わきりて五十文ツ、にかひたりよくみるに世に云蛙カハスといふものにいたくこと也先ツ眼するとき赤蛙に似たるもの也赤蛙よりは小也千里のみちをかゝへて生餌の蛙を多く買ふほしころすこと受合也

ふり出て聲もきよらにすゝか根の名に負るとやかはすなくらむなといひきあはれなほこにいれられて世をやすく田川にすめる友やうらやむすゝかやまにてほとゝきすを聞て夏もなほ衣手さゆるすゝか山汝か聲なくは只秋の風馬一向よはらす元氣尤よし名馬也をしむへし獨眼龍な

ることを

○十三日 晴 六時過土山宿出立いたす谷川に添ひて例の蛙なくこと夥しこの地ほとよき蛙ある地まれなるへし八月下旬のことしすゝしさいふへからすけふも八里余歩行せりしかし午後より歩行すれば汗出る也七ツ時桑名へ着せり兩御隠居様おさと市三郎一同旅宿せし海へつくり出しの本陣也久々にてうみをみてみな喜ふ也石のことくなる庫之介か先達して濱より上ケ立のいわしを買ふわれか好める松魚の取立を尋ねしにいまた濱より兩三日は來らすといふ也残念也桑名は樂翁殿の御あとなるに此節も三十兩取位のとみある躰也且めしもり至るよきか多き躰也さてく政事はかはり行もの也密に歎息せり○土山にて

かやり火のなき山さとに旅ねして水音すゝしくよすからそ聞

○十四日 くもり又晴 六半時過佐や川を領主之舟にて上り尾州領佐や宿に着晝飯給夫々熱田にて小休いたし鳴海に止宿○熱田宿は以前廿日は

かり止宿せしこと有は宿役人共其外われをよく知れり追々罷出る旅宿せし葛や傳左衛門は病死之由はや十三年を経たることはこゝろつかさりし也其頃二ツ三ツの人みな相應之若ものになりし也夫をおもへはわか老しをもしりうら嶋子か七世の孫に逢るはなしなとおもひ出ぬけふも又六里はかり歩行したり主従の顔備前徳利のことしわれを並の老人とおもひたるに日ことに六七里位飛かことくに歩行られて道中師大に驚たりくも介まで其ことをいふよしわれと松平肥前守之外はなしと云也

市三郎話也

たらちねに逢ふ日近きをかゝなへて飛かことくに足もすゝみぬ

われ此節晝辨當はやきめしに梅干也第一暑氣當之患なし其上ちやさへにあれはいくたひにも食す腹にもよし

○十五日 くもり 至るすゝし鳴海を出立して赤坂宿に着せりけふも八里余歩行せり道中師共早足に難義之由内々申出に付けふは靜に歩行したりかこに杖なきかこときもの故夜全にあげて出立しいつも十里余の歩行

にて七ツ時頃には必やとりへつく也○平松彌一左衛門いまた健也足少々
わろしといふ也悴出迎せり彌市左衛門一類丈夫其外今一人もなし藤田
亮平迄没せりわれ二十五才之節旅中にて知ル人に相成候もの存命せしは
此彌一左衛門一人也人はもろきもの也名をあけて死ぬ人ほとこの幸は世に
なき也なら墨一箱黒縮緬之羽織を彌一左衛門に遣したり

○十六日 朝雨四時より止 六時赤坂宿出立いたし新居之御關所改濟之
上暮時濱松へ止宿○けふ宿々にて魚類殊之外下直也黒鯛の大なる百文位
サバの生たるか二十四文アジ又同しなら人みな驚歎せりされ共なら抱之
惣吉か悴の類其魚を一尾も不買持參の梅干二ツにてめしを買て錢を遣ふ
ものなしとわれはさそめつらしかりて魚を可食とおもひたるに存外也こ
れにてはめしもりもかはぬなるへしきのふより所々にてうなきを出す當
年はしめて食す

○十七日 晴よほとあつし 正七ツ時濱松宿出立いたし無滯大井河を渡

夕七ツ時島田に止宿大井河にて

をちかたのしら雨見つゝ大井河こゝろすゝしくわたる夕くれ

けふ奇人の事を聞たりわれに附て勢州邊より參る四十余のフラリサン有
此フラリサンといふは雲介中の尤下等なるもの也往來のものに附從て荷
もちをする故の名なるへし其ものを家來憐みてめしをふる振たるに殊之
外難有かりたり魚一尾を興へたるに厚禮はいひしか少も不食そこを立つ
時これは旦那いたゝきたる也不魚末様とて建場之カ、にくれたり家來
怪しみて其わけを問は親之忌日にはかく精進すと答しと也雲介すらかく
の如し親の忌日の精進など閑にするは雲介には不及捨もの也○駿府高
橋祖母君之御廟所に參詣之積に候處御用 召歸府に少もよりみちはいか
ゝと存候間寶藏寺さへに拜禮せぬ位に付金二百疋拜の爲代參用人俊藏遣
し候積也○此ほとあつき日にても夜ふせるに裕着用にて無差支位に付一
同病人なし天氣の都合十二分とも何ともいふへからす天幸といふへし雨

は屢あれと夜或は曉に付道中有之候方よろし桐油用ひ候ことはつかに一時半位也大井河も出立の頃までは川留にて四日以前より明きし也今に九十四文川也此躰にては歸りまして何ぞ子細もあるましく候

○六月十八日 朝少々雨 四ツ時前を晴○金谷宿出立候あさよの中山のたうけうつのやのたうけを經アへ川をわたり駿府を過例を小よし田のヌシやにて小休いたし七時過興津に止宿○アへ川をわたりミロクといふ立場にあキナコもちを出すコレをアへ川もちの元祖とす味至るよろし百疋の茶代をとらるゝこと也よきはつ也こゝにてら西直次郎待受居候而面謁を乞御用召なから小休に落合之事故面談いたす○江尻の宿にて馬急病起る暑氣當なるへしよりにて馬醫をかけ療用せり死にいたらす○興助暑氣當りにて昨日を不出來五苓散に加味のくすり遣すよほとよし○途中にて濱上りの生魚をもち歩也興津にて聞は今晝過とれたりといふはやまくろ計也めつらしくて買て家來共にも爲給候惣躰之肉コハクしてこりゝす

る也新しきブリのこととして人々うまからぬも大笑也

○十九日 くもり 六半時興津宿出立候而七ツ時頃三嶋宿に到着いたす○富士の雪猶のこれり人々大に驚けり○今日も歩行七里内外也○馬くるしみて胴繩をかけ置たる梁を折たる位之由に付六ヶ敷かるへしとおもひたるに十四里余のみちを走りて無恙追附たり一同大に驚く昨日の病は中暑なるへしといふ也され共やせたること甚し干大根にて作りたる馬のことし尤飼もよく食す也三嶋宿にて馬醫にみせたるに箱根を越こと受合也といふ也

○廿日 くもり至る冷氣也 かたひらにてひやくとし大にこまれり本陣に着早々給に成けふ天氣都合十二分とも何ともいふへからす難有事也○今曉三嶋宿にてはやかねの音にて目さめて宿にとへは二丁はかり脇出火也と云也風下にて火のこなと庭の頻に落る一同大騒にて支度いたしたる所飯を食せねは出立出來す急に食事を出せといへはこの騒にても御膳

を被召上候哉と云位の事にて亭主麻上下にて奔走してやかて我にはひやめし家來は茶飯のひやめしを出したり其内火大にやけひろこりたれば早々に出立せり其節十五軒余類焼ありといふいまた下火にならず箱根へ向ひ二里はかり行たるに夜あけたり夫を箱根へ上りみればはや下火也けふは箱根八里の絶險をためしに例え通歩行したるに小田原へ着したるに八ツ時過也途中にてくも助なといかなる早足也やけしからぬ殿さまもあるもの也なといひしと市三郎物語りぬこれにて老ても修行により躰のつかれぬをしるへし少もつかれすいよ／＼稽古といふものゝ有をしれりこれは三年前六里はかりの道を歩行してくたひれ極りたるをかなしみて歩行の修行を甲冑にてなしたる故なるへし老人ほと修行すへき事也○昨日サツタたうけにて血を髣拭たる昏の捨ありしをみたり前へ行たるもの怪我にてもせしかとおもひたるはかりにてすみたりけふ人足のはなしを家來共の聞たるに大に驚たりきのふサツタにて博奕打共數十人集り鎗又は

江戸にてハハラといふ魚を上方にといふ也

竹やり或は刀を以及鬪争候所は我行かゝりたるに手負などをたすけて山かけに隠れわか通行畢又及鬪争おくれたる雲介のわきを抜身を以人を追なから行けしきに肝けしたると物語しと家來共申たりや、水滸傳めきなから公儀御威光にてたちまちに逃去とは難有事也○馬宮根いかにやと案して着早々聞せしにやせは甚敷けれと足ことに達者にて我よりも先に着せりといふ惜へき馬なり○いまた松魚を不食今日小田原に着やとに聞たりしに今濱より上りたるカツホ二尾大サコシーにて家來共申談して金貳朱也われも食しつ味尤よしなら人など驚歎せり

此魚のはなし父上母上等は可申上は不及申候御覽もあるへしなら人にては勝南院にふるまひたしと人々いふ

○廿一日 晴又くもり 拂曉に小田原出立して戸つかに止宿○酒匂川を渡候節よほとの水氣也れむ臺こしおそろしきけしき也され共無故わたりて次々たて場にて食事なとするうちに川上より水多く押來りて川留とな

れり是は昨夜中大雷雨なりし故なるへしこの度の旅行天氣都合のよろしきこと並々ならず鬼神輔を得たるかことしといふも可也川明をわたり或は渡りて川留雨はあれと夜のみにていまた二時の桐油を着せしものなき也

○廿二日 晴 戸つかを出立して八時頃品川宿に止宿○川崎にいたるはや出迎へもの來りて用人抱入之義など申之夫を追々出入町人等出迎いたし品川宿に参りたるに本陣の人山のことし其内可笑は被抱と願ふものなと數人集りてはかまをとりくるゝもあり團扇にてあふくもあり帯をも解くるゝ躰油断したらはふんとしまてとき可申さま也驚て着替したり少々休息して一同に逢候積之處新右衛門はしめ差急候而早く〜といふ故に紋附かたひらへの上の袴はかり着せしまゝにて逢たるにこれは〜といひしはかり只たかひに涙のみにて更にことしはなし互に無事をは祝たれと新右衛門はしめのとし老たるに驚き我もとし老たるさま日記ほととの勢と

はみえすなといひてかたる六年のはなしうれしさのあまり躍出て更に條理なし彰常の居たらむにはいかにや喜らむとおもへは涙はおさへなからもはなうちかみていと〜くるし太郎を新右衛門涙ながらに手を引てこれそ六年來もりそたてたる彰常かかたみよといひかけたるはかりにて互に涙にくれてことはなしもとより二才之時わかれし兒なれは見忘たれとチ、也とてこゝろうれしけにわかそはに居りもの給るにこれは給へしやいかにと新右衛門に問て新右衛門なれ親しめる躰祖父の如しけふは新家井上内藤大越貞松村畑山其外市川今井或は友野等又は顔見忘れ一度の文通せぬ人までもなかにはまち受に來れりよほととの混雜いふへからす其内忠四郎は居殘て順右衛門のことなど申不相替貞正なること○新右衛門は立派にかさりたるよき馬にのり來りて庭をひきみせなとしたり幸三郎は市三郎を同道して歸りたしとて新右衛門の悴乗來れる馬にのりて歸りたり來りたるものゝ内にて見違たるは新右衛門次男横山鐘三郎也凡之躰お

ことを男になしたるに似てさて人品とり廻し別段にてうちあかりたるさまわか血類之内にては隨一也幸三郎いふ養子に行四五日前より人物生れかはりたるかことくなりしといふ也靜にてことは少したのもしけ也其余いろくといふへきことあれとこと多にて記すにいとまなし家來共には立通して不眠もの多し夜五時頃佐久間象山來る九ツ前迄物語して歸る

○廿三日 快晴 昨今八十五六度の暑とおもふ也○七時出立にて五時前に御月番之御老中伊勢守殿に罷出參着之旨公用人呼出し申述るしはしありて先格之通心得登 城候様いせ守殿御差圖有之よりて御老中若年寄廻勤之上登 城したるに五半にいたらす諸役所物靜にて開かすよりて御まかない役所に行飯嶋泰助に面會之上しはし待泰助不相替深切之心附ケなとある四時過にみなく登 城ありて御勘定所御目付等へ面謁いたす村田阿波守はいさゝか衰たれと昔にかはりたることなしわか歸りたるを殊之外喜ひたるさま實意溢るゝことしされ共例之木訥也いろくはなしに

奥方様之御歸りはいかゞ御用之體にては御老母之面會も御なりかねなるへし御不快はいかに常におもふといひき親しき別段之役人は老人にては只この人壹人也この人もわれ壹人なれはいさゝか血縁のことし八十四才とはみえぬ健也かゝる人を見或はとしわかきか死しなと聞てしろめか歌のいのちたにこゝろに叶ふものならはとありしを感おもひたり御廻り之時御老中御列坐の御尋も無滞相濟御退出前廿四日登 城候様いせ守殿之御封帑渡る直に御受に參りて歸りたるに門外よりして出迎之もの山のことし凡昨日の躰也今日膳に居り候もの百人にあまる其余おしてしるへし今日四時を夜四ツ時まで數千度のジキなしたるなるへしさて母上は少々御不快のところ押被爲在十日はかりうれしさに少もねふり不給よし只々手をと리카はさぬはかりのことにて今世對面無覺束と覺悟いたし少も病あれは臨終の時取亂すましと經のみよみ居たるに 上の御めくみにて對面を得たりわか喜ひ何物かこれにしかむ今は此世におもひ置こと

なし兩三日以來は汝か歸るをおもひて常の信心の修行疎ならむと欲すしかありては佛へ對して勿躰なし其心附第一也汝も 君恩を忘るへからすなど不相替御女義中之剛正義烈の御辭也去年の御病後且御不快にて被召上ものは此ほと粥と香物少々はかり也と仰らるなるほと御やつれありてや、母上の御母君に似給ひたることくならせらるれと御心の正しく御健なるは不相替御事といとくうれしおさとはいかにこゝろ遣ひにてつかれはせずやかれかよはきと汝か御役のこと夢の間も忘るゝことなしなと御意ありきけふの躰百分の一もしるさす其余は押而知へし幾之進來る耳至而遠し雷は近年なしいなひかりはかり也といふ躰也され共大聲にていへはわかる也以前々さまにかはらす只耳遠故に別而はなしなとこと長きさまは十段もまさりたるへし○けふ新家の妻とする人になる御奉公人上りとはみえす當世風なること也盃事などしたるに酒も少々出來る躰也○野田源大夫と知る人に成粗しにて武人也實意はあるなるへし彰常に似

手傳として
來る女は
みは
材木は
丁けん
番けん

て學文なくこゝろ荒々としたる人とみゆる也三尺はかりの大刀をさし來れり○けふ太郎敬次郎のさまをみるに太郎は誰に似たるらむいろ至而白くして耳大きく凡々躰彰常に似て才ある也隨分相應にみゆる也ウバけしからぬ誇にて太郎さま位の人品なる人親類などになか／＼なし其上書物の覺至而よしなと高慢する也おンヂ、さまきくを一本頂戴仕たしとおとなしくいふ故にわれはわけをしらぬ故にオフ／＼きまゝにとられよといひしにやかて行て母上の御植置たるきくを夥ひきぬき來れり新右衛門より金魚はちの三尺四方なるを造り與へ別に泉水をも掘與たるよし金魚船はもち來りてきのふを自由にせしといふか金魚一尾もなしみなひねりころされしとみえたりわかそばに親しく附ておヂ、さまこれはなにあればなにとうるさくきく兒也新右衛門いふ書物は品に寄たらは出來るなるへし大學をよみて其字を十に七八はみしり數をうはの教によりてよくかそふるなといふ也さもあるへしこれはわか喜也敬次郎は眼中するとくいろ

黒く人品太郎におとることよほと也才はある躰なれといつれにも二番はへの躰ある也○土屋大膳来りいふ同人老母の喜び大かたならずとて例の兄弟のことかたる也夏かけ先生来るけふの躰本陣と江戸と混雜したるにテンヤワンヤにて其さま沸騰する粥のことし一々しるすにいとまなしおしけ来る小兒熱出て昨日よりとまりけふは歸りたりわれをみてかなしかる也われもかなしき也

○廿四日 晴 五時登 城いたす御目付へ罷出之書付等相達す御老中方御登 城にて直新番所前へよせになる越中殿案内に御奥へ廻り 御前へ出る大坂町奉行被仰付可入念旨之 御意伊勢守殿御とり合せ也畢御老若之御禮御側之御禮申上諸役所に參り吹聴いたし御退出を西丸の廻り御老若其外廻勤いたす歸りたるに來客二百人余にて膳にすはり酒のみて歸たるもの百六十人余といふ也其さわきおもふへし○歸り懸淺野中書に參る緩々面談この人の深切驚はかり也此老母も兒をおもふ愛を押

て母上のことを兩三日申くらすといふ也○今日はならへ狀出る大坂にも直書といふわけなるにしろすこと不能故に二階を市三郎にあけさせてそこに書狀三くだり計書たるに良齋先生被參無余義二階へ通し酒等を出すはなし一ツ二ツして被歸候書狀にしたゝめかゝる夏かけ先生被見候是も又二階へ通すはなし中に大草直胤来りて作之小刀二ツくるゝ無余義是も二階へ通す夏かけは無間も歸る直胤は少々酒のみて日くれに歸れり○待受重立候ものは土屋大膳亮大熊善太郎村井助左衛門豊田榮次郎西村珉助豊藤五十助等也それゝの挨拶いたす大熊善太郎はさても御なつかしかりきといひき涙數行下りしはしことはなし○夕かたを恩田虎次郎来り河野七太郎と相手にて酒のみ夜五時頃になりたるに都筑金三郎鈴木莊五郎同道にて來り金三郎は殊之外喜び酒のみ喜ふ躰めつらし虎次郎はめつらしき眞實家にてわか中書に申上る奥御右筆になしたる喜びを以親しくして客のとりもちなとする也夜四時までかゝる夫を書狀にしたゝめか

ゝる○日くれ頃に新右衛門妻狂女を同道にて來る此事に付而は一昨日以來新右衛門母上より仰らるゝ旨もありしかと追而と申置たるにおちへ來りて同人存寄を段々申述其深切なること驚入て大意此女専らの趣意にて狂女を引受たる以來の存意等申述常にかはりたる嚴正條理あることこゝにいたりてわれもいたし方なくおちへの存寄にまかせ一わたりの只一面會をゆるしたりおちへは歸り狂女は逗留させて歸れり

○廿五日 晴 五ツ時より出宅にて所々廻勤いたす○此ほと宅之躰うは二人にて兒二子の世話いたし其外はオカ、か家事をするかことくもみこみにて大に働く也敬次郎かうは美人の聞ありしも大笑也根本かはなしのうははいつれに哉とおもひ居るに會而こすちらしかみにて魚油三斗はかりにて單物共に煮上たることき女壹人ありこれ例のうは也大笑のかきり也

○廿六日 晴 五ツ時登 城前より所々廻勤いたす○退出る廻勤せむと

おもふに少々腹痛に付歸宅五苓散を五ふくはかり并大柴胡湯一ふくをのみてひる飯は少も給へず其内次部右衛門新右衛門など來るわれは何も不食夕かた梅干にて飯二碗を喫すしはしありてはらけしからすいたみ廁へ行たるにますく甚しく少々吐氣もありアクビ出てこゝろもち甚わろしよりて廁より出たるに忽に倒れむとする故に手水鉢の前に坐居たるに治部右衛門わか顔色菜の如しとて走來りて問ひ直に背中をもみくれたり夫より新右衛門家來共惣立にて大騒となりたるに少も病不減手足結冷にて惣身より夥しく汗出るのみ也しはらくして所々へ遣したる醫者の迎のもの來りてみな留守也といふ其次解毒丸熊膽など如夢にのみたり其最中に土屋大膳亮來る驚ていろく世話す廁へ行こと頻也手をと腰を押人々市三郎をはしめとしてなこしの大ぬさをも甚しく手を出して世話するも忝しやかて醫來りてはりをうちくすりを飲ませなとして四ツ時過に少々治りたり其後新右衛門大膳亮次部右衛門など歸りたり母上の御案事

大かたならず苦痛をみるに忍ひすとて御經のみ也これも恐入之一ツ也
○廿七日 晴 不快に付登 城不致され共幸ひに不快今朝はや、本復せり五ツ時前例之肴や彌助走りて大松魚如生をもち來りてわれに呈せり醫に聞にはや食してもよしと云也よりてひる飯にさしみ少々食せりみなあらた也とて多く食するもありうらやましけふは不快にて一人も不逢積なれと無余義夕かた迄逢もの引もきらす○治部右衛門新右衛門等昨日之跡を案事して來る幸三郎も來る

○廿八日 晴 廿六日にて見習濟廿七日にて御老中方の申上平服に成初詰番之積なるに一日引たれば表向引になりたりよりてよほと快押てならは出勤も出来るなれと兩三日加養之積にて引込御届を進達せり○おのふこのほと暑氣甚しき故にわか中^ちりはせぬやとてしまを遣すいろくと東海道中山道を下たるはなしなとする也大江中務か妻の姉のかた目なる老女のはなしをして笑ふ也万金丹を御藥に奉るらむなといひて人々絶倒せ

しよしなとかたるなみた落ることもありき追^おかたるへし○わか不快を聞て追々人々來る大越又は忠四郎等も來る大越はひる後來る幸三郎ととも刀を拭ふそはにていろくのはなしをするをみるに實にきのとく也其上に今日は暑中所々歩行たれはいよく耳遠也とてこまる故にくみたての水を以われみつかから半手桶計薬くわむにて頭をあらひ遣したるに少々耳近くなりたり然ルに近頃書物をよみていろくの論をする也近頃は鶏もなほさりにてあくひのみをなして時をつくることなしいかゝなといふかことし耳のきこえぬはこまりたること也都筑なとてさそこまるへしと歎息する也され共氣力は少も不替酒なと給られたりかゝることをみてもおさとかまど^ど居にあらぬいかにあはれみ思ふ也

○廿九日 くもり 昨夜出火寺のはやかね聞たれと火消やしきの静なれは其まゝにふしぬならにては大騒なるへし○ならを去り江戸へ來りてこまること第一に飯也なかく引わりめしをくふよりもくるしされ共中上

米也といふ也俊藏等甚敷迷惑するとして一同はなす也庭鼻を突合すかことくおもふ也さて風ふけは足のうらざら／＼として土にてつくりたることくなる也其上に錢至而高く七十諸色高くしていかむともすへき様なし難有土地なから家來共之上かた慕ふも尤也とおもふ也肴は今ほらひものあれと今日過はなすより食するものなかるへし其上に藤田并河野御番留主に押込入たること事實にて所々盜賊のさま驚入也このほとはみな旅つかれ不止故に表にて不寐番をする也雨戸など一枚ことのしまりにてけしからぬこと也ならにて足ふみのはしふしたることときころのこと一夜もなし○此ほと合羽やの世話にて十六七はかりなるやとひ女をせり指をはらして下りたりこの女はタツか従弟女也といふ也少々似たる所あるかことし上かたへも行といふ也ゲン日々はたらくよし也されと飯の時折々出るはかり臺所にて中をとひ歩行躰也めしたきに別段ヤトヒ雇女せり越前のも也と也夫へなら人かヒタルフテナランサカイハヨメシクヒタシなどい

ふとて女共めつらしかりまねをする也日ことに四度ツ、めしをたくといふこと也女共之内にてシマヒなどするものくに壹人なるも大笑也ひやめしのなきにこまるなとめつらしきこと也左衛門尉不快も既に快氣に近しされ共遠國奉行御用なければみやけものかた附其外のために來月三日を登城するつもり也蚊はならよりはよほと少しさして患とならす○母上御心は少も替らせられす古にかはられしこと相みえすくにを御相手にてみやけもの、御世話等なさる、也御氣根のよきこと別段也

○七月朔日 晴 おのふもわれを案事シマて屢シマを差越し御下の御飯其外なとくる○市三郎細川は馬の弟子入いたし今朝を參る○今日なら表よりたよりあり日記來るおさとのうた不相替おもしろし氣分もよろしかるへきかなと母上と御物語いたす○いまた御役替不被仰付已前之事也遠國のことみなこの如し既に九日を過せり○朝より夜中まで客來る其混雜いふ

へからすけふ貞五郎など来りたれと其邊の人は一わたり口をきゝたるは
かり也例の小笠原来りて僕迄御膳難有と云て歸るさま以前のことし
○二日 晴 昨夜ノロシあかりたり太郎二階へ上ることをゆるさす故
に昇りみたかりてひるよりわれをせむること甚しされ共客來に付夜に入
らはつれ行へしといひき夜に入兒輩寐る時となりて太郎わかそはへ着坐
御デ、さま私はいまたねませぬと屢いひてわか顔をみる也され共なかな
か其ことなとにかゝり居られすよりて市三郎を添て二階へやりたり五時過
○ならにて石燈籠を春日へ奉納といふことまことかいかゝ○此ほと朝夕
ほとゝきすやかましきかことし山ほとゝきすならて都ほとゝきすなるへ
し

大和ひとまことゝはせし初あきもなほ打はへてほとゝきすなく
豊藤かもとへ壽乗か鮎の小つか遣すとていさゝか其人の今のさまを賀す
こゝろにて以前烏帽子など奪行たることおもひ出て夫等之はし書して

老ぬれと君のめくみのよしの川のはれる鮎をわけまゐらす
と手昏の末へ記したり○不快こゝろよしよりて明日より登 城之積同列
へ申遣したり

○三日 晴 四時登 城○中暑全快いたし今日登 城候旨山城守殿は
御届として出ル○今日中野に參る兼而後家方面謁之義申に付よりて也中
野はわか七ツ八ツの時々常に參りたる家なれば後家其ことを申出泣也大
坂のことを聞に庭番と云ものありて勤番するよしなと承りさてく窮屈
のこととおもへり○伊能へ行先生七十五才也と衰大にみゆる○小笠原
日々來る○今日蜷川能登守へ參る同人殊之外之喜也古佛古器等みするふ
る神社のうしろ玉かきのうちは白河院の御世に古物をうつめし所也とい
ふ能登守わか參りたるをよろこひて宅へ歸りみればいろくものくれた
りわか江戸役ならぬをかなしみてなみた落すさまいとかなしいかなれば
かくわれを思ひくるゝかとおもふ計也

○四日 晴 所々廻勤之上登 城初詰番いたす○母上日々の御世話例之通也御氣力至るよろし御忘れは多しと仰らるれと左もみ奉らす候此ほと衣類其外之ことみな敬事くに引受也諸遣ひものなと同人に取計する也われいふくになと人間にならば新右衛門は親にまさること遙也元來は目通ゆるさぬ積なれと新右衛門妻の云こと又ことほりにて無余義ゆるしたり此こと兩御親君へも御聞にいれられ候様とおもふもおさとよりもしはしいひたることなれと決してゆるささりしか新右衛門妻の云こといといとあはれ也其こと長く面談之上に詳にとくへし○昨夜夢ウハバミと争て組しかれしとみて夢さめたるに市三郎ねほけてわか腹の上へ大なるあしをあげ置たるもおかしさもおかしはらも立故力を極て足を打たるに驚さめて悴まで御目見にてわひことをいふ絶倒也

○五日 晴 たつの従弟カツハヤの世話の女指をはらしたるとて不來其かはりに吉田金助世話之娘來る十六七才はかり也いつ方の歟用人の娘也

以前の女々はたらく躰也けふも亦のろし上る

○六日 晴 一昨日井上へ行たるに同人は留守にて同人の妻出ているいろはなしの上にて今般太郎を大坂へ可被召連と之義は余人はしらす新右衛門妻におゐては殊之外歎息也其わけは太郎を母上の愛し玉ふこと別段にていかに怒玉ふときにても太郎さへにあればおさまる也其上御氣の保養藥十ふくにあたるへしされは太郎を差置るゝは母上の御爲也といふ也これも一理也されとおさとか出立前にいふは太郎は嫡孫もおさとみつから養へしと何卒可連參といひたり是も一理也いつれも尤に付村田阿州翁に及相談候處おさとに同意也といひし也

○七月七日 雨 例之通登 城いたす 御城の混雜夥し常三郎大にきもをつふせり○新右衛門幸三郎來る小笠原太左衛門も來る夕かたより新家も來る平岡圓四郎其外來る夜四時頃客來相濟かゝること日々のことし○けふは一町を廻り新家にも行新家酒のみ居たる所へ行たり所々廻勤故われは

不吞差急候。茶一ツ給歸れり。○新家へ久々にて行たるに、家のさま大にかはれり。壁立具などみな新にて、金すなご彩色畫の二枚折を立庭は軒下をみなたゝき土になして、長サ五尺計厚壹尺はかりのねふかはの沓ぬきを置夫より同じ石を庭へ置ならへありて、石燈籠二もとあり、節句故にみな／＼キレイに着替居たりはなし。中御ヒクニはいまた着替前の躰にてあられたり。六年ふりにて逢たれと、少も衰たるけしきなくいとみづ／＼し。新家には小さふらひ供さふらひ下女二人あり。御ヒクニの方は別也常のくらしのさまけしきはみみゆ。○うなき肴すしなともらひて、新右衛門幸三郎鍔作などへも爲給候。みなこのほとこのよろこひ也。君の御めくみによるものにて、露人にははれぬ。到來もの半てんもなし有かたきこと也。役人は人にははれぬ。到來もの有て天は身をも家をも亡ほす也。可恐こと也。新右衛門などは此ほとこのくらし莫太のことにて、所々到來もの至る多し。新右衛門夫を至る苦勞にして、少のものにても心さはりは返却するといふ也。少々安心せり。

○八日 雨 例刻登 城○去ル六日藤左衛門妻出産せり。小兒至る女弱し。昨日なと舌こはりて乳を吞こと不能故に、醫より外醫にもみせよといふよし也。○野田を朝良數はち來る。其内を太郎もらひて、井上のおばへ書狀を附てやる也。書狀をはわれにみせたり。あさかほ一はち獻上奉り候とかきて、以て上は目録の通はなして書たり。其わけいひきかせたるに直して、スグに書來り。あさかほにのしを附てもち出たるさまなどさなからに、彼か母の幼年なる時茶をもちてわか前へ出たるに、其まゝ也。上かたのおばゝさまへも書狀を近あけよと母上の仰られて、御めてたく存上候とかけと仰られたるに、男ならば恐悦奉存候とかきたしなといふ也。

○九日 くもり 宅調兩三日已前妙壽來るひかきのうは、よりも甚しき躰にて耳もきこえず。われをみてたゝなきに聲をあけてなくのみ也。みやけとして目録を遣したるに不足なるへし衣類の質をうけくれよ。今日そなかきわかれるへしなといふ金子遣したるに、懷中を袋を出してつゝむ躰なと

氣力少もかはらすのち聞は五月にも貳分貳朱井上よりもらひ行たると也
されは泣事にわれ欺たる也

○十日 夕かたより雨 田口加賀守其外來る夕かた加賀守と對話中玄關
に參り繼上下之まゝ酔臥いたし候もの有之乙骨彦四郎と申候もの之由い
かゝ可致哉と用人共いふ故其彦四郎は能書にて詩文共に當今聖堂に罷出
候もの之中に聞へたる男也大酒のことわれ聞き必わか歎として來り其
途中にて大醉に成たるなるへしゆり起しわれに面謁之事ならば酔墨をみ
せよといへとて昏を差出たるに唐昏并扇面へ龍蛇の雲を起し雨を得て昇
天するかこときものを書たり客歸りて面謁したるに上下もとり無刀也詩
文を論するに舌も不廻やかて雨強けれとてかこをかりて歸りたり本所四
ツ目に居る人也幼年の時より大才子の聞へありきわれ以前面謁之時初見
に先生は六朝の人の風ありといひき今も其くせやまぬとみえたり此人之
詩文學文をわれにくれたらば荒井筑後守位にはなるへきに可惜こと也

○十一日 晴 きのふ幾之進被見候御殿之娘并畑山之今度之悦に手搯
皿二筥を被吳候同人やゝカナツンホといふへき躰なれと氣力は不替刀之
はなしなと頻也大聲にて例の五文の油揚のはなしなとあり耳遠故に大聲
殊に甚し追々に直カツ江川太郎左衛門小笠原太郎左衛門落合ふヤッコ豆
腐酒差出すいろ／＼はなしのうちには太郎左衛門いふ左衛門尉さまと御隠
居様御同道也やと母上御答にいや也とて段々仰られたる故にわれ脇を母
の上かたへ行かぬには困ると申たるに太郎左衛門いふ若母上の上方へ御
出をおもはゝ日蓮を信仰せよ日々十卷の經をよむならば母上上方へ御同
道可被成といふわれいふ母の參ることならば十卷の經をよむへき勿論也
といひしにさらは母上上方へいらせらるへしといひしに法のためならば
上方はおろかいつくへも行へしと忽御決心にて此上は市三郎御くに縁組
取極候はゝ即刻上方に可參と被仰候彌夫に相成あわれ大悦せり其替り母
上御發足當日日蓮を誘らす經を十卷ツ、よむへしと決心せり

○十二日 曇り 母上昨夜より少々御中暑の躰也昨夜は何も不被召上候今朝少々御膳被召上候乍去御つかれみゆる也これはこの頃よりの御つかれ出たるなるへし御世話は不相替よりて御邦に申付て今日は何事も母上へ御聞にいれすわれにいふへしと申たりこの女少々心静になりてよる／＼われと母上のあンマをする也われはもとよりことほり也小遣ひ帳其外遣ひもの等々義夫々いたす小侍太郎等々かみさかやきをする也

○十三日 晴 昨夕方ならを状とく七月朔日までの日記来るならに日ことの雷雨大におとろく其上ホラ抜ありと聞く世によくいふことなれと貝のホラにや山の洞ホにや其詳なることをしらす山つなみ山潮なともいふよしは兼而聞つかなるわけにて水の出るといふことは是又しらぬ也

○おさとのうたとり／＼に感吟也折節小笠原太左衛門来るよみ聞せしに大に驚て土左ひだり日記に源氏物語の文意を加へたるかことしといひきあまりのホメ様なるへければカ、自慢にて十分一に買へし此ほと朝五時前を夜

四時迄客來其内に小笠原など定客にてうたも詩も出來不申候○廿五日の素麵の取計大によろし○貞助の不快いかにや同人福來即死といふ三世相などのことなき様にいたし度候○松魚のうたはよし一向松魚はなし日記通也○酒のみへ甘きものゝこと諸事に通へし尤なること也○父上母上より御歡の御書被下難有候父上の御書は御勇さましく別難有候母上の大坂御難澁もこれ又御尤に御座候○おさと市三郎を案事候由御尤に候道中にてはこしにわらちを附たるさまなとすさましく有なから一向にあるけす我遠足の狂言と名附たるに至るされと歸りては日ことに勢ひよろしく候今日も新右衛門馬に乗來り同人と一同馬にのり新右衛門方へ行たり○母上の御不快少々のこと也恒菴あんし不申候由也今日御針をなされ候宜候ゑ夕かたより御起出なと有之候○桑原の隠居來る法躰にて大に衰たりしはらく逢はずとて先泪にて久しはなしをなし居たりわか少も不變に大に驚たり○ならの石燈籠はいかになりしやはなしはかりか○土地の

もの共よくいたす躰おもひの外のこと也夫に付はなしありわかならへ行
ころ來もせぬ人々之内不來してはいかゝおもふものまで子までつれて奥
へ來り母人へいろ／＼へつらひいふも不少耻しらぬ面々いと／＼多し夫
に母上との御はなしさまたけらるゝはつらしされ共勢に従ひ勢なきに敵
となるはいにしへよりのこと故又わか勢を失ひし時敵となられぬ様に大
切に取あつかふ也されとはちしらぬ小人共也○おきつ宿下り之義申來る
母上の御事分ル迄は面會不致と申遣たり

○七月十四日 晴 江戸は日々の風にてみなこまる也夜のすゝしきは當
年はかりかきてもしのきよし○江戸蘭醫被行故にきくすりやのみせにて
ヒルをかめにいれてうる也いつかたもみな同じ其外單衣のくろき木綿な
からちりめむのときをきる也大嶋かとおもへは小サク小編かとおもへ
は大編なるをみなこのめり○なら人を二人外へ出したるに江戸繪圖をか
ひ大道なかへ開きて兩人相談して歩行也町の子供はヤシなりとおもひて

蟻のことく集と也往來の人に世話やきありて靈巖嶋のミワ方迄みちを教
へ半途までつれ行たりとめつらしきこと也とて人々笑ふなら人日々イワ
シを買ふやすきに驚よし也○淺野中書來る久々にていろ／＼の物語くれ
かた迄にてめしなと出すこゝろ置なき事也同人いろくろくさかやきこと
／＼くにはけたり大にとし老たり○ほとゝきすなほしはなく也

○十五日 晴 きのふは上野 御靈屋に拜禮として罷出其歸り懸所々佛
參いたす多寶院に參る寺のさま以前と大に變れりはか所しれすよりてよ
く聞は隣の寺也かゝること江戸中絶故に所々にてする也○上野 御靈屋
に參常三郎二天門よりうちの石御燈籠の夥しさ御立派なるをみて肝を潰
せり 勅額御門の内々さまを遙にうかゝひ奉りてからかね御燈籠の夥に
また肝をつふし御水屋其外の御けしきをうかゝひ所謂聖人の門牆をみた
るものゝことし御くちもとなから驚ることなし 文恭院様にはしめ參
詣そこきりかとおもひたるに 有徳院様の 御靈屋少もかはらす殊に御

修復出来たてにて石御燈籠金 御紋等ギラ／＼しきに肝きえて眼をみはり頻に首めくらすはかり也かゝる 御靈屋増上寺にも紅葉山にも上野にも猶いくらも有といひきかせしにアツといひて驚歎せり○昨日は佐藤捨藏來る八十才也といふかはりたるけしきなし○茂兵衛後家來るしはらく物語したるにおさと方よほとわかみゆる五十一才也といふ也わか眼のあやまりかと密に市三郎を呼て臺所にてめしくふさまをみせしにおさとより三ツ四ツ若しといふ也あまりの不審さに俊藏を呼て聞によほとおさとより若しとて市三郎より甚しくいふ也いろ男などあるものは別段なることゝみえたりされと亭主もちより甚しきわけなし亭主は意みせ御出入之類いろ男はふりうり新みせの類にて又別段故歟或はいろ男われより二十も若しと聞は老木にわか木を植添て實にわかやきたるか其詳ことはしれかたし

○十六日 晴 今度抱たる士に太郎汝は何に抱られたるやと問ひしに大

坂へ参りとのさまになりますと答たり太郎不審して夫となく俊藏に彼は何になるやと問ひしに中小性也と答けるよし太郎其時されはよ其位のつら構のやつ也とわれもおもひきといひしよしみな／＼大に笑ひし也○太郎はよほときまゝ也夫故給物など夫是きらひ多し嫌ひなりといへは母上余の品を被下也わきを來るもの其外共に太郎は神佛の次也母上の御さたに太郎は大坂へやる積なれば人は何ともいへわかおもふまゝ十分にかはひかる也叱るへからすとの御意故捨置也敬次郎は大に異もおもふまゝにならぬことはかけへ行て泣居る也太郎は諸事ゆるやか也敬次郎はこまか也兒戲のケンなどを打をみるに敬々方かゝることにはよほと才ありて太郎は叶はぬ也

○十七日 晴 上野 御宮へ参拜きのふは貞五郎來る夕かたまで書物はなしをなして居新右衛門來るとも／＼にはなし新右衛門へは酒貞五郎へは其さかなにてめしを振舞候貞五郎以前にかはりたる躰なし書物も不

相替よむさま也相應之わかきもの也○十二日には諸向年毎等之御番入あり百人はかり也。石川良左衛門忰も被召出たるなるへし御沙汰書にみえたり荒井甚之丞忰は十一才也といふ是さへに出たり○十五日には治部左衛門實父の年回に付名代として市三郎を遣す例の無理とめをされて歸ること不能迎を遣して夜九半時に漸歸り來るこまりたるヤツラ也

○七月十八日 晴 此ほとこと更にあつし九十度位なるへし○村田阿波守嫡孫鐘三郎御小性組へ御番入いたすしかるに阿波守其歡にてつかれたる所時候にあたりたりと聞て見舞に參るよほとムクミみゆる也四五日のことなれといたくつかれたりとみえてこの度はとても出勤難成など云也見舞に參り暫はなしたり歸宅後見舞として少々青丹よしをわかちて玉子添遣したり

○十九日 晴 惣とし寄十七日にいろ／＼の届物差出すか、や助藏昨日着せり昨日ころ惣吉忰其外之人々ならへ歸着なるへしかたみに江戸とな

らのことを聞なるへし母上日ことに今いくかにて出立になるとて今よりはや御かそへ也そのたひにわれかくの如し大越の御隠居は不意なかるへしと仰らるゝ也○いかなる人にや有らむわか方々來るといひて外へ行其上酒のみて遊女を打擲せしなど聞ゆる也いやなること歎息せり○三嶋所左衛門と相談之旨もありて來る廿五日新家に寄合之積也

○廿日 晴 新家よほといそかしきか着已來既に三十日に及ふ一度出かけに來る其後は夕かた一度來る酒など差出され共客來にて新家とはなしすることならず其後きたらす新家は御兩親様のことなど御平日之様子等詳に承るへき爲屢來りて其御様子を尋一ツは御健を喜ひ一ツは御としを被召たるをかなしみ御平日を伺なるへき筈也わか機嫌聞に來るにはあらぬ也しかるに右之通也夫にておもへは遠國中書狀を以御機嫌をも不伺筈也留役はわかつとめし頃とちかひ格別にいそかしきとみえたり日ことにかか前を必二度ツ、は通る也夫に來らぬて今のいそかしきをおもひはか

る也○敬次郎ひかむを防ぐにて粥三はいの外給物なし故にひもしかり朝夕人のもの食ふをみてはなく也かくしるし置たるに今朝鏡作來る一わたり時候のはなし等いたし暫あり其はなしのうち川名八藏不束増長いたしいろくのことあるに付親圓藏無余義突殺し其旨申立になる無子細すみたり人々圓藏か正直故かくたしかなることも出來たりとて感心せり八藏は鏡作別懇にいたし候ものにあはなしなといたしたるもの也

○廿一日 晴 御老中御人少且大暑に付式日御出座なし右に付誓詞も延に相成る○昨夜大雷雨四時を八時に至る麴町市ヶ谷其外にも落候由其外共都合九ヶ所といふ也江戸のかみなりいかなればかく落ることにや御城内の梅林或は八重洲かし山下御門などへも落たりといふ都合なかく九ヶ所よりは多かるへし○長崎奉行今日出立飯田町を通る故に二階へ上りみなくみる母上は俄に二階より御下也母上はなせと問奉るに左衛門尉か九月はあの躰かとみるもいや故に俄におりたりとの母上の思召さてもお

もはぬこと也

○廿二日 くもり きのふは暑九十三度に及ふといふ夜もねられす團扇を持通し也これにては米下らくなるへしけふも又あつし○根本善左衛門來るおしけのはなしなとするおしけ貧なるよし可憐こと也衣類などよほと少なくなりしといふ也○誠一郎父來る今般の賀を述る母上御世話有て御酒等被下候夫に付おもおさと歸らすしてこの度は大越の御老母いといと本意なかるへしなと仰らるゝ母上日としておさとのこと仰られぬことなし○昨夜土屋大膳亮來る夜四ツ頃まではなすこの頃四ツまで客のあらぬことなし下女共の難義おもひやる也下女のうち太郎のうはよく雷の起ることをしる日ことに二階へ夕かた上りけふは雷なしありといふ也おけいまた同じ江戸の雷かく落ては人々きらひなるも尤なること也○當夏松魚少しきのふみしまを二本來るみなふるし

○七月廿三日 くもり 大にすゝし不相替客來多し

○廿四日 くもり 大にすゝし○例之通登 城廿日之雷町奉行所へ届出候分計九ヶ所といふ右之趣を以おもへは二十ヶ所以上江戸中に落しなるへし○十七日夜駒場野御たて場御成之節 上之被爲 成候小の高きところにて中丸といふ也の大松一本地中ぬめりこみ二間はかりなる大なる穴あき其わきに別に二三間はかりなる所土を大にもちあけしと也よりて見物出候由

○廿五日 くもり 村田阿波守腫氣不宜樂信院へ轉藥いたし候由吐氣さしこみなとあるといふ何分六ヶ敷かるへし

○廿六日 くもり おのふ所よりいろ／＼と對面之事申來るよりて御留守居へ懸合之上にて親類書にとり拵なくは對面すへしと申遣りたり夫にこまりたるか丈助方へいろ／＼と申遣して新右衛門を頼さま／＼にいふ也されとも母上の御事たしかならずしては逢かたしと申切遣したり○錢作わか方へ來るよしにて兩三度夜八ツ時過に歸りたるよし其節俄に御用出來たるなるへし來らさりし也留役はわかつとめしころよりは大にいそ

かしきとみゆ

○廿七日 晴夕かた雷 けふはあまり人不來とおもひたるにひるころより段々落合夜に入て夏かけ來り彼是にて行水をも遣ふことならず四ツ時頃までかゝりたり中納言俄にいとまを願ふ故に願之通申付る右に付亦は段々夏かけを申聞たるよしあれと聞かすよりて願之通申付る夏かけへ無面目逢こともならずして置手かみにて日光へ行とていつ方へ行たりやしらす必ならへ行たるなるへし可憐心得違也

○廿八日 晴 月次御禮有之例之通登 城佐々木循助奈良奉行被仰付之同人はわか目出したる人にて其上此人ならばならよく治へしと大によるこふ也

○廿九日 晴 佐々木循助の師匠番いたす同人御徒御抱入より二十四年也といふ也同人のけふの供立等近所を見物として來るもの夥と也左もあるへし目さましき事共也母上は循助のことは少も仰られず松月尼のさそ

遠國のわかれをかなしむへしとのことのみ也

○晦日 晴 昨日大越幾之進来る耳ますく遠し何事も近所合壁へなりひくかことき聲にていふこと也幾之進も又しかりはなし以前五六段廻りくとなりたりおさとにみせたらはさそ氣をもむへしといひくらせりされ共刀すきはやます目キ、は少々よく成たり氣分はかはらぬとみえたり耳少々は近くなれとくみ立の水にてわれとおくに打寄て頭へ冷水を多くかけやりたり其時はいさゝか近くなるかことし病氣養生のため剃髪したしといふいづれとも相談いたしおさとの了簡に随ひ可然旨申答たり折節如生すゝきの大魚をもらひたりウシヲにつくりさしみなとにいたし差出候○佐々木循助来るいろくのはなしいたす松月尼のこゝろ果して母人と同し廿一才の悴十四のよめに付妻を可殘置なといふ故によるしからしと答へき

新家へ御決心
参りし御心
之よし詳に
被仰下り人
安んじたり
物語る

○八月朔日 晴 八朔として登 城例年之通也○廿九日夕かたなら表を出立前之書状来る○母上よりの御状難有拜見仕候委細は母より御受申上候義と別にこゝにしるさす宜申上奉る○父上母上大坂御難義に思召候は御尤と奉存候され共 上よりの義いたし方無之候かゝるときは信心を被遊候御經を御よみ御心を靜に御じれ被成候事不被在候様と奉存候義に御座候御經をも左衛門尉ためなとゝは決御無用鍔作無事に参り候様と御いのり可被成候じれ候様のこと万々一被爲在候得は法華經に至るソムキ候事に付大坂はいやに思召候とも鍔作をふひんと思召候御信心被遊御經の力を御かり被遊候様只夫のみ申居候○おさとへ今之返事○太郎を差置候義に付段々の了簡尤に有之右之趣井上にも書状のまゝ可遣候母上の御そはにたまゝ罷在候事に付少しも長く罷在孝養いたし候へとの事まことに御尤也此地居合可申と之事一わたりは然りされ共朝よりよるまでの客にて母上わかにはなしするひま少と之御歎息ありおさと日記之内におく

に宜なりて夜の明たるこゝちすといふことあり實にしかり此節之躰あし
きことさしあたりみえす諸買ひもの小遣ひ帳のべくゝりなとみな引受也
わかねる時は來りて按摩をなし朝夕のことみな取計着類之出入等之類不
及申これみな新右衛門妻のしん切より出ること也序におさとよりふみに
しるし申遣たし幾之進のこと彼是決おおもふへからすわか方へ來れはお
さとへ骨折の挨拶こゝろにて諸事なす也これも一ツの楽しみ也され共都
筑或は佐々木などへ行ことはこゝろあるへしおさとよりこゝろ附遣すへ
し其内都筑は格別なれと佐々木などは行かすともよし當人は愛子の貞五
郎か爲に權門こゝろ也可憐事也幾之進は隱居のこと故佛參と楽しみに刀
をみて遊ふことよし勤向等のことは必貞五郎にまかせ切にいたし少も世
話をやくへからす却あよからぬ也○このほと客來ありて可記ものあれと
記すことならずこの日記は今日も終日の客來なるへしと明六時に起て椽
かはにてしるす也蚊ならの十分一位故さしてこまらぬ也

○二日 晴 晦日くれかた七月廿一日附之狀來る○おさと書狀之内御隱
宅女之事召抱可參旨委細承知也右は此節所々申遣し穿鑿專也され共相
應のものなし其内當月は出かはりするものある故に必あるへし今十七才
はかりなる女壹人重助の世話にて來り居る也これをつれ行は子細なしさ
れ共風俗丈ひきくいろ黒して身のとり廻し田舎相撲のことし太郎などノ
ロマ御前と呼故余は夫にて御察しあるへし金子遣ひ拂等之心得詳に承知
也刀壹本新右衛門に遣し其あとは直勝か打たる不用のものに切るゝも
の有たれはもらひ置たり三兩はかりにてすむへし脇差は所々申遣し置た
れとも一本も不來來りてもわかこゝろに叶ふものなし歎息せり逗留中手
に入こと覺束なし○太郎のおさとのおふみ來るはしめより末まで手本の
ことくにしるしたるものなれはみなよくよめてわかりたりよろこひて自
らまきて箱に入たり大事に納置と申付たり一日に二三度出してみて又納
置たり○日記之内惣吉悴等かよし原へ晝行たるよしいかゝあるへき無覺

束され共道中にあなま魚を不食あさめしにつく香の物をかみにつゝみ夫を菜にて一せんめしを買事をすますくらゐに付盡みて遊女のにしき忍にても買しなるへし或人云其夜よし原の女郎にいかなる故にやうなされしものありと也いかあるへき無覺束こと也○おさと折々の持病され共早速に快御兩親様御健之由醫師申上候由恐悦の御事也○此ほと江戸の人々の様子をみるに親のなすことみな其子或は孫にむくひ来る也彌吉などの死したるといふもわかあまりに昇進せしむくも也よりておもふわか人を叱れは無利なることなれば夫たけはいつかたにてかわか子孫必無理に叱らるゝ也其子孫へむくひ来りて血筋之もの段々難義すること物をかひてかけ取のくるより甚し人を叱るは少々の事也身の分限を知らぬものみなしかり可恐つゝしむへしよりて此ほとこと更につゝしむ也母上の御沙汰にいかることあれはよむ法華經みな火エンとなりて身をやきくるしむと出家の言はわれもつゝしむ也汝も可慎と仰られたり此ほと太郎らをあはれ

みおもふによりて人々の行末をためしみるに其血縁のものにむくい来ることおそろしき事いろ／＼おもひ當る故に別れこゝろする也

○三日 晴 八朔には新右衛門方酒肴もち出しにて馳走あり人々ととりわけて遣す新右衛門などいたくつゝしむ躰なれと奉行其外を正しき道のもらひものありてゆたか也八朔には大坂にて父上母上おさといかにやあるらむなとおもひ奉る也其こゝろのさまならにて江戸の母上新右衛門其外をおもふに同じ旅と違ひ登城をもなしいろ／＼の人々に逢ひ勿論上の御機嫌宜御ありさまをも奉伺なれとさりながら夜なと秋の空のすみわたるをみて同じ月同じ星を今みるやいかにとおもふこゝろはならにありしと露かはらぬ也

○四日 晴 おさと日記の内大越の御老母のこと有老人の了簡御別段なること也され共おさとのこゝろやすかれとの御心もあるなるへし夫は母上の御さまにておもひしる也夫をいかにといふに佐々木循助御徒御給人

より廿六年めに諸大夫芙蓉の間の奉行になりて江戸中の上下目を驚すことにて待受其外のにきやか夥しきことなりよるもさはるも佐々木とてうらやみおもふ也夫に引替て母上は松月尼はあはれ也とて其ことのみを仰らるゝ也果して松月尼母上の御察しに露もたかはぬ也人のこゝろ同じきことかくの如ししかるにわれよかれ人はともあれとて身のほとしらぬこととをなし人を難義さするもの天道の御ゆるしなき尤也とおもふ也死して地獄へ行ことなど佛の教遠にあらぬ也人は目出度時行末をはかり人をあはれみ不敬をすましき事也此ほと夫をおもひ朝より着替にて面謁を乞ものには身の高下をいはすつゝしみて對話する也さすればあの人は逢ことかすき也とて用もなき人面謁のこと申こみてさらでもなきことをいふ也され共夫を少も不厭つゝしみ敬ひて逢かわか身の修行也○この日記みな心學めきたりよりて大笑をしるす去年よりの雷にて雷公つよく太鼓をたゝき太鼓破たり故に彈左衛門方へ雷公あつらへに行たるにトクイのタン

ナとおもひて例々通タハコ盆のかはり火うちを出たるにイヤよしと断にていなひかりにてタハコをすい附なから天下無双の厚き皮を以太鼓を申付られたり彈左衛門方にも屏兒水牛名譽の皮にて太鼓をはりて出したるに雷公一ト打打てはみな破る也彈左衛門困し果て急度工夫をなして雷公へ申出たるは御あらくとても出来不申然ルに此ほと承るに彈左衛門配下に八代目團十郎といふものあり大に被行る也其もの學問すきにて儒者を招き學問する也され共さすかに行かねたるに大造々謝禮をする故にある儒忍ひて夜行クといふこと也儒たるものゝあるましき事也この儒必鏡面皮のかきり厚こと甚しかるへし右々皮を以太鼓をはらは決而破さるへしされ共今彈左衛門の手に及ひかたし何卒雷公行てかれか面の皮をムキて賜るへしといひし也雷公よろこひて行つもりになりしと儒者聞て日々に桑原くといひて居るといふ也其後聞は夫は至而のくされ儒者也いかによき鏡にてもクサレては用にたゝすまして儒者のくされたるをやと

て雷公更に取上なかりしと也さすか雷公の了簡は別段也といふこと也わ
れ夫をきゝて江戸の儒はまたも士氣ありてかゝることをあしくいふ也外
のところにてはさむらひ少故に専百姓町人相手故にかゝることといひては
儒者アコかひる也江戸はありかたき事也これにて八代目のハヤルことお
もふへしこの頃不快なるに御殿醫の名人を百金にて内々まねきたるなど
いふ也恒菴も目の療治に行たるに大造にもてなすと也恒菴はかはらもの
ゝ謝禮也施しにすると也謝禮を断たるよしをわれにかたりき

○八月五日 晴 八朔登 城之節藝州之嫡子をみる大からのわか衆也い
ろくろくにきひ顔にて健らしき人也よく當時之藝州に似たり眼中之様子
等父上と同じ位の人材なるへし○母上昨日を御中暑也よりて母上の御へ
やゝ引越居少々の御事也無間も御快かあるへし○今日珍敷客なしと申居
たるに夕かたより幸三郎次部右衛門野田源太夫土屋大膳亮來るいつれも
酒并めし等差出夜四時頃までかゝる其混雜おもふへし今日朝より材木町

の源來る同人九月には出産いたすに付參りかね可申とていとまこひ也う
たの姉も來る母上御逢被遣源うた姉より菓子をくるうた健にて出精之由
等詳に後の源よりはなしきけ候由

○六日 晴 昨日飛脚屋を廿七日出之書狀おさと并家來之狀八月朔日差
立之飛脚持參のおさと書狀用人共書狀おさと日記來る○廿六日無滞大坂
御役宅に引移相濟御二所様御機嫌克おさとも快其外一同無事に相濟候由
民藏順作別心配いたし取計候由貞助も先ッ快候由大慶也○日記之内魚
のうた不相替おもしろし○按摩かつふれたる眼より泪おとしたるよし聞
ておそろしげなるわか眼よりもなみた落る廿五日けろくの速にこゝろ
よかりしは天幸と云へし鹿よりさきのうたの返し

玉章をくりかへしみて小男鹿にまさりてわれもねをそなくなる
ならにわかれのこゝろ切なるさまいとよくもしたる筆のよくも
のいふかことし勝南院か泪辨慶か泣ことくなるへしわかれを送る人々夥

市三郎おき
と難有か
御なにか
涙を三郎か
也市三郎か
かお三郎か
を思ふにさ
おさふにさ
日の深一切
の夫もツ
れと病の一
る上へしな
母御意也

しく近くためしもあるぬよし難有こと也これも 君の御恩もおさとか峠
を歩行せしよしにて安心せりやまゐも例のけろくのみなるへし生駒根
に今つへたてゝのうた万葉にも同じ意の名歌ありしと覺ゆ千年のむかし
も同じさまなるへし御役宅庭せまきよしはけふ與力共より來る圖をひら
きみてしりぬ御目付のはなしにてならの風流にかはり浪花の俗地なるこ
とはかねてきぬならの庭のはなもみちの慰なと一生涯のかたり草なる
へし佐々木循助實母などは江戸に居つもりなりしかならの風流なる古跡
の多きを聞御役所のことなど承て循助に隨ひてならへ行つもりに成しと
もおさとか何くれとなら惜む尤なること也この味のおもしろさはなか
くまくろのさしみいわしのすいりなどの味のみ論する腸にてはわかり
かたし

○七日 晴 きのふは浪花の返事しるさむとせしに四時頃より新右衛門
三番町之馬場へ行たるとて來るとりあへすおさとの日記なとくりかへし



よむ新右衛門いふ御姉さまの文土佐日記のことし女中にかゝる日記など
當今容易にあるへからすと賞歎せりひるめしに酒差出すわれは一合也新
右衛門は三合也新右衛門われに字をかけといふ故に筆取て大字をしるし
たり新右衛門も書たり母上今日は御快御ともあかりて新右衛門とわか
ものかくさまねなからに御覽つゝ御咄しありて其内に御樂寐となり又御
起上り御物語などありかゝることならにて屢夢みしといひしに母上も新
右衛門も亦同じといふ○三日には新家へ行三嶋所左衛門も來る同人立合
にて父上より御渡之書付一同へみする鏡作へも詳に申聞する禮后鷺香之
兩隱居にも詳に相談いたす右に付夫々立合にて取締了簡申聞る新家の宅
へ其あさもらひたるさかな遣したるに其外さしみなととりて大に馳走あ
り新家はあまり酒のますこれは三嶋より禁酒のことすゝめし故なるへし
四日に新家禮として來る鷺香院をも禮のふみ來りものなとくれたりわれ
も三嶋も一わたりこゝろ落附たり

○八月八日 くもり少々冷氣也 例之通登 城此節脇差を買候積所々尋歩行日々數本來るなれ共一本もなしされ共なら六年中一覽いたし候程之ものを二日はかりに見たり江戸の刀多き田舎の刀少き格別之こと也なら人にみせたき事也○きのふ佐々木循助がうなきのをりつめを貫太郎敬次郎にあてたらは給さすへしといふ太郎は五たひ六たひいひて漸當たり敬次郎は二度にてあてたりコマを太郎は廻すことならず敬次郎はよく廻す也都あかくの如しされ共太郎はゆたかにて相應になるへし敬次郎は太郎よりのちにおとるへし

○九日 晴 大にあつし○昨日は大越より志之重之内貞五郎持參しはし對話中夏かけ來る四ツ時まで閑話右故貞五郎話中に歸る○俊藏大越へ行たるにならの事を川路にて聞に十に七八はよく聞かねたりよりてけふは喧嘩のことくなる聲を耳に口よせていひきかせよといはれたり其通になして少々わかりたりとわか方の咄も喧嘩のことくなるに又其上の聲とみ

えたり大越の婦人不快之由出產にはあらしと人々いふ

○十日 晴 大越老人わか江戸着の躰をみむとて着の日密にいつ方迄歎行てみられしといふこと此ほとわかる家内之人々驚たるといふ也此老人奇なることいまにかはらすとみえたり○みわ兒をつれて來る四五日は奥へとまる○昨夜治部右衛門來る四ツ過になる母上より御沙汰にて歸る

○十一日 晴 七ツ半時出宅にて評定所へ罷出誓詞無滞相濟和泉守殿御見届也大目付堀伊賀罷出る○歸かけ佐々木は行松月に面謁同人大にとしよりたり七十三也といふならへ行とすゝめたり○新右衛門日本はしのかしへ人をやり松魚をかひてもたせ來るともに酒給て字など書たり

○十二日 晴 一昨日小笠原と忠四郎同道にて來る吉川榮左衛門甥病死跡十四歳之女有あるかたへ市三郎遣す積相談あらく行届候二百石^{知行}持金百兩也○おくに之縁談岡村備後守同家同人悴某かたへ相談是も可^{知行}行届哉之様子され共先ツ此節風聞糺中也藤左衛門來る同人と席書いた

す

○十三日 晴 新家世話にて御隠宅之女きまる十八歳也といふ洗たく物
なとよくするよし也下女にはちとをしきもの也といふいさゝかおもあれ
とかあいらしき女のよしみな〜いふ我は留守中故みさりし也○刀やよ
り日々刀もち来るいつれも氣にいらすこの躰にてはまた刀なきなるへし
○刀や忠右衛門七十才也と云来るこれはわかいにしへ彼か家へも行或時は酒なとくみ
たるもの也此度は此もの計用向申付るけふも來りいと〜喜ひていろ
〜と物語す過日曾我楠等の題にて人々うたよみたるをみせたるにわれ
も讀たりとてみせたり

曾我兄弟

十あまり八とせの夢をうち碎くその名は富士の山ほとゝきす
わか宿は江戸の大路の市中に時のかねつくあたり也けり

述懐

さひくちてとぐかひもなき山刀もとよりにふき老か身なれば
とありかれかたにさくに驚ければ宣雅翁のうたをいとおもしろくおもひ
てとはし書して

市の中に獨かほりてちりの世のちりにもそますさけるはなかな
としるして外にうたよみたる書て返禮したり○佐久間修理この頃書をか
くと聞てもらひにやりたるに密書のすみ書の山水來る絶妙目を驚せりこ
の人實に凡人ならぬ事也人一生の藝を一二年にてする也うらやましきこ
と也文筆のことはなか〜万人なとより上にすぐれたるものなるへし九
年にて蘭學は江戸にて指折と成三年にて銃炮の師となり弟子の百五十人
もあるなといかなる自由なることにや書はよほとの上手也○兩三日已來
みわ兒をつれ來りて手傳をする也

○十四日 晴 奥に田口五郎左衛門來る不相替之才氣驚入三男をわか小
侍に遣ひ吳候様相たのむ五郎左衛門四十才也といふされ共氣分はいにし

へと少も不替困たること也○治部右衛門世話之縁談みくじあしゝとて母上より御断被成候ところみくしにとんしやくなしとてがつてんせず田舎の風なるへし漸意味を示してすみたり○さく夜月至るよろしならのさをおもひ出なにはのことなどおもひやりたり幸三郎來りて四ツ過まではなし居たり母上より御沙汰幸三郎汝か長尻何事そや粟もりの一ツものみ夜氣を凌ぎ歸るへしとの御意也其躰市三郎を御叱りコタツの御沙汰に少もかはらすみなく大に笑ふ也今朝やり木刀のすこき等例之通也此ほと至るすこやか也

○十五日 くもり 月並御禮有之候例之通登 城○母上宗柏寺へ御出也この頃は願満にも御出也片みち廿六丁余ある所也此ほとみちごみ立て雪踏はいやとの御意にてあしたをめして御杖也御丈夫也とてあまり之御事也あんまはりのことしとて大におくになと笑ふ故に御下駄をとりよせむたるにあしたの齒としを経て短くなりたる也大に驚て以後はかゝるもの

被召候事御無用と申上たり少々の雨はこれにてもよろしなと御意大笑いたす

○十六日 くもり きのふは夜月よろし例之通月見なれと蛤吸物團子計也しかるに人のもとより肴くれたれは其肴を新家井上内藤へも遣し余を羨附にして給る母上とわれと酒をのむめつらしく二合にいたる月見七十文はかりにてすみたるも大笑也され共いにしへは塩かつほ一きれにて寺社方調役中も月見をせしにくらふれは近頃は大に奢侈といふへし月をよくみるにはあまり給物ありてはあしゝ酒一二合にかきるへし

○十七日 微雨 きのふ夕かたより俄にさむしみな裕わた入也例之通上野 御宮へ参拜いたす御別當に大越の縁僧なりしなるへし出居ておさとは出府するかいかになと問ひたり御別當にはよき勝手となりしなるへし○諸向の達并に親類書其外等俊藏順右衛門に調させたるに少も出來不申よみ合もの五くたりも落字する或は先格を間違或は調違等夥少も

目はなされ不申さても茂兵衛をなつかしくおもふ也これ同人の香典を遣し或は永代月牌料を附遣したるわけ也かくもやくにたぬことか一人用人をつれ来れるを後悔してしるす

○十八日 雨 おくに縁談之義母上御題目講御ともたちの老母火消與力世話にて知行二百石身上よろし屋敷など立派也といふ事御厩谷の小普請馬場新左衛門といふ人六十兄の養子に去年なりし人也夫は相談あらく行届可申哉之躰いまた治定いたし不申候先方至る節儉家にて當主并養父御奉公あかりの伯母并母ある所也伯母は廊下傳にて別宅之由小普請なれと取締宜持參二十兩支度望なし只々儉約にいたし度旨を專に申聞る出立前引移いたし候而は家來共多入用懸に付十一月に引移いたし度旨申聞る夫にて大に安心せり其余をしてしるへし是ならば相談いたし而も安心なるへきかおくにを見せ可申と之義申談候處不及其事と之事なれ共安心之ためみせ候積也夫は彼方之姉さまみるよし也○太郎よく新右衛門とね

るよしなれ共われとはねすよりてけふケンを打勝たらはわれとねよわれまけたらば菓子をやるへしと之約束也しかるに太郎大にまけて當惑して明日までの日のへとなれり○太郎之さむらひ千次といふもの貞實にて何事も出来ること大藏と同じ病身もやゝ似たり

○八月十九日 雨 さむしいとま乞かたく乳母さとへ行太郎いろくといひて泊るへからすと申付たりしかるにもしやといろくといふ也太郎いろく世話をしてみやけなと爲持やる也今もなほちゝを夜はのむといふこと也さもあるへし乳母人々へ太郎をたのむけしき子のことし夕かた乳母歸る太郎の悦び知へしよるわれ戯に乳母は留守のつもりにてわれとねよといへは太郎笑ひて太郎はおりませぬくといひてトボケながら床へ入たり

○廿日 くもり 少々暖也きつこと逢かたき旨再應申遣したる所昨日虫損
□丈助來返事の延引恐入れる旨を申述其上にて表使よりの書狀をこした

り其書面之意親類書は引替不相成候され共母上万一のこと有らむには急度受合候る表向忌服受候義無差支夫は男子の御規定のことくにはあらず受合也との書面也以前の親類書焼失いたし候由乍申引替不相成と事不審之至乍去忌服受候義表向出来候上は母上を祖母とせぬにもあらぬ事なれば面會いたし可遣旨申遣たり

○廿一日 くもり きのふ大越來る刀のはなしはよく聞ゆる也外に少々入組たるはなしは筆談也刀のはなしの聞ゆるも不思議也酒を二合に不足給られて大に酔ていろくのはなし六半時頃歸られたりよき機嫌也○ある人のかたにて娘に淨瑠璃を習はせ其地ひきに十六なるを置其師匠は女にて大名にてめかけいたし候ものにて坐もち也とて屢よひて止宿なとさせしよし然ルに其ことおかしく聞へて尻出て即日下女にいとまをやりしものありと人のいひしをききまことにや其人は随分手かたき聞への人もなといふ人のかたるをよそことに聞て名もきかさりき○新家一昨夜來

りしはしはなして歸るこのほと御用すきにや夜遅く歸ること大に減たりと人はいふ也

○廿二日 雨 在宿きのふは新右衛門方々參る大に馳走になりたりひる九ツ半時過位より夜四ツ半時過位迄に酒一合五勺はかりものみたるへし江戸へ來り別酒を減したる故也少もよき機嫌と人のいふ躰になりしこと一度もなし松魚なし鯛のさしみ其外也アヒルの油煮など出たりいとうまし來るもの横山鐘三郎養祖父の隠居并鐘三郎内藤幸三郎也我とゝもに行もの市三郎并太郎くに太郎のうは也太郎は實に新右衛門の兒の如しくに太郎はとまりたり○太平記よみ出る村上彦四郎討死の所を好みたり義經記をもよみたり富樫之介か關所の所をこのみたりいつれも涙を落せり畢る婦女子のおもしろきものをとて寶曆二年正月十一日夜大坂のカフキ役者嵐ひな助といふもの舅の仇相撲取岩石鬼右衛門といふものを相撲共相集たる中へ飛こみて鬼右衛門を殺したることをよみたり○新右衛門宅

御記録もの
を聞なから
酒なるとは
へからすよ
りて義經記
の太平記を
のみたり

この隠居の筆を
願ふに御筆を
ひふなと
ひせて字をか
とて凡そこ
とへし

今は奉行所より之賜はり物其外たのみ等の事多ければおさとなどのみたる新右衛門か宅にはあらず兄弟かくあるといふはいかなる天運にやと冥利のほとおそろしくおもふ也新右衛門は始終我にはみつから給仕して親のことなしたり横山の隠居は川村鶴翁の類の今二三段世智かしこく下手より出て且武人藝ことに多き人也鶴翁など無二の友にて基など打歩行あるとき鶴翁を投倒したるに同人息絶ければ小便を口へシコミたるに漸に息出たるなどはなしある人也衣類其外立派なること別段にてたはこ入をしめサンコ珠大そうなるもの也よほとこの工面よし也タハコ入に二十兩余の品ありといふ其余しるへしされ共其たはこ入は時ありてもち來ることならぬこともあるよし也きのふはみす歸宅九ツ時也

○廿三日 くもり雨 佐々木循助嫡子婚禮也さとは小長谷某也石河土佐守いとこ女なるへし○大熊善太郎豊藤五十助井上新右衛門平岡圓四郎等追々來る大熊善太郎は夜四時過迄閑話也○大越の母上御入也御供にみわ

參る忠四郎娘來る着服等いかにもうつくしキリヤウ別段也健之丞のいろの至る白きにて躍子シタテ也利口なる躰眼をおとろかせり五十の翁八才之娘を評するはいかゝなれと少々年齢不似合に付あしからし世にいふ男スキのすると云娘となるへし當時わかいたみさるの美人也順右衛門戲に大坂へつれ行かむといひたるにいたくおそれあのオジサンと忠四郎とはいつれか男よきと人々いひしにヲツカサンの美人と同じく忠四郎の色男天下にならふものなし父上母上の御そはをはなるゝことは片時もいや也といひよし其利口其余押おしるへし何もかも知りて如才なく老人大人みなこの小兒に欺れ居るなるへしとおもはるゝ也

○廿四日 くもり きのふ大越の母上御同歸との事故に夫はいかに夫にては日記に記すへき様もなしまげて御泊とて御とめ申たりこのこと兼申遣たること也よりて昨夜は御止宿也夜に入母上其外寐ころひてみなくならはなしおさとの弱かこづくにて健なるよしなと御物語申上たり菓子うなきなと給

はり畠山氏の嫡子も參るけふは御歸との事也御反物代五百疋奉るこれはあまりの被下物にて恐入たれ也ば脱カ○御用なければ御老母は念珠を御もちおさとの日記にのみ御かゝり切にて御覽也尤其以前おくに一遍はよみたる後也夜はみわも呼出してともにいろく話也われに用ひよとてふた物に入たる蒸菓子をも被下たり

○廿五日 晴 再暑也○安中城主いたくらいよ守逢度よし申込に付御城にて面謁いろくのはなしあり同人おさとのうた及ひ手跡のみことなることなど申す岡本花亭老人を承たるよし也いよ守を使者を以甘雨亭藏書をくれ候廿四冊ありおもしろきもの也白石ものことによし○堀田攝津守へうたのことに付石摺墨等謝として遣す同人を鮮鯛來る○昨日は劍術遣ひ團野源之進并前田夏かけ翁被來候おち合に付同坐はなし一向におち合ひ不申候夏かけはひさしくあとへのこりたり○けふ來るもの小笠原平岡其外數人也夕かた大越來るはなし中に山田朝右衛門隱居松翁來る同人に

は菓子并目ろく二百疋遣す大越へは堀田よりもらひたる鯛ことに新しよりにてさしみにいたし振舞其上今日まさむねといふ酒一樽を得たり口きり也とてふるまひたり多くはのます歸らむとするとき大坂の六日限とくよみきかせむといへと飛脚來たりといへと一向にきこえず立歸らむとする故にわれかけ出して肩をもちて引來りて書狀をみせたるに笑ひて坐したり大越の書狀をもわたす日記とおさとの書狀等はみなわれよむ半はきこえつる也折々笑ふ不審なることあるへければ以前より日記共にかし遣したり同人五ツ時頃まで居たりおさとの書狀をよみておさとはわかともおもはず紫式部にして松浦さよひめのみさほほあるものは一天四海にわかいもと一人なるへしといはぬはかりのはなしにて醉中大悅せりわれはカ、自慢なれと大越かいふほとにはおもはず夫を一段は不及かたかと疑ふ也いかゝあるへきはないろちふ松浦さよひめ位かとおもふ也さ

れ共夫よりはよかるへきか大越鯛のうしほを給いさゝか醉躰にていろいろと大聲にていふ女共等みなくく笑ふ也

○廿六日 雨 おさとの書状江戸よりの書状をまちたるよし十五日にとゝきたるよしもあるへし母上の御こゝろもめ可申と事尤也十月さし入に出立を市中并與力共も待よしいかゝあるへき待へきいはれなし行たらはアキル、なるへし○御隠宅の女新家世話にて極候もの今日引移十八歳也といふ大から也中スリなどあり坂本源藏といふイトコはなしやとわれ尋たるに人々笑ふ○甲州よしさとよりの書状一覽候御隠宅御二かたさまのこととき世にまれなる御高運の御かたもあるに只の養子をなし其養子の爲に甲州へやられ御難義なさるゝよしあはれなること也よしさとこの躰などは御兩親さま不便に思召して御不用のものなどは彼方へ被遣御めくみ有て然るへし人をめくまぬものは必其血筋のものにたゞりあり可恐ことのかきり也われは一錢も酒食等ムタなることに遣ふはキラヒなれとそ

れを恐るゝ故に少々つゝのことをする也凡世の中に平日給物等に奢りたるものに貧人をめくめるものなきこと也故に其子孫みな難義する也よしさとへも定而母上等よりも御めくみ遣さるゝなるへければわれも御手傳可申其内へ御加へ候る金子三百疋も遣され下さるへしよしさとこの書状にては二百疋はかりのことゝみゆる也其外の意もあれと三百疋にてこと足へし又申すこともあらは勘へし新家へ申來るよしは更にきかす尾崎より二度はかりも無心申たると鏡作かたりきわか方を遣し度候得共いにしへより今にいたるまで一度も文通となし故に母上を被遣ものに御差加願ふ也此次のたよりに被遣可被下候○大越のこと前に記せりよしさとこのことゝ御兩親さま并新家之今の躰等引くらへみるに天地の相違也御兩親さま新家などは世にまれなる御運也

○廿七日 晴あつし おさとの日記○たかよしのうたなるほと不分也されとなつかしとていろくくと申越あはれ也セのうたおもしろしあなあは

れのうたおさならしくしていとく／＼よろしふるさとものうたおもしろしいこま根の山のはのうたいさゝか心得かたきうちか或はわか解得ぬか又は五中將の余流なるへし○長崎奉行の家來のはなし江戸にてもおさおさ風聞するよし大笑のこと也世の浮沈の有さまみなかくのとし青くなりしは民藏等別あるへし貞助にかきるへからす○砂糖至る下直のはつ也高きよしは必姦あるへし買に行ものかうりてか○かりの玉つさのうた殊によりしく候と伺候○高橋の短刀よろし大越など一覽して筑前ものなるへしといふ左の西蓮などなるへし無銘にて六七寸のもの故三方もすへし

いにしへを忍ふもかなしふかゝりし庭の訓の露のくさくさ
このうたをよみて大越もわれも涙を落たり實に感吟也○月をみる亭あるよし御申越のことく拾ひもの也○母上の御不快速に御快恐悦也され共醫師の躰阿世家也はけしき症は無覺束○江戸の日記を待よし母上其外大坂

の日記を御まちある又同し其内大越の一條大越へおもはすもよみ聞ケきのとくにおもふ也されと事實也松月のこと先便に云かことし○太郎のこ
と御喜びのよし此ほと日々大學を教ふるに日々三行を五へんにては必よく覺ゆる也且ものよむことスキなるかたちにて何くれとよむ也家來の姓名等大かたはよむ也○阿波の不快よくなりかゝり又わろし日々に同篇と云也○月見にめつらしく人きたらす其外のこと前に記す通也○春日の神主を鶴來るよしうたになるへき趣向といふへし○いものされうたみな笑はぬものなし

○廿八日 雨 廿六日には土屋大膳亮方へ参るともに來るもの佐々木循助都筑金三郎井上新右衛門也随分うまきものあり八時より夜五ツ時退散也○きのふは幾之進來るおさとの日記をくりかへしよむよしにて歌は上達せりとゑはなし也酒を出したるに多くは吞不申候おさとよりしりを出したることはなきや此節まさ宗といふ酒を得たり刀すきにはよかる

へし一合にかきり其上は御無用と申たるによるこひて給たり○土屋の母へは別段手みやけに五百疋遣したり

○廿九日 晴 市三郎同道に幸三郎鴻の臺行徳の邊へ參る市三郎此ほとは大に健也上野 御靈屋に參拜○殘暑に付九月も夏衣類之旨被仰出之

○十月朔日 晴又雨 月次御禮有之登 城○おのふ宿下りいたす右之入用

差出吳可申と之事也然ルに同人事養女に遣し候義は元來不承知之義其上母上の御事に付親類書不束いたし置逢遣し候にて十分也しかるに其入用まてわれ皆可出遣わけ少もなしされ共此ほと極貧窮之由に付金五兩可遣旨申遣候元來しま參候申聞候入用廿兩相懸候由申之其内に市川其外へ之土産も有之然而已ならずわれ奉行職也とて供立等對箱之つもり也御次之もの對箱は元來ならぬ事也よりて供立其外も殊之外に爲減候家來共へ之みやけ等みなことほりたり人々よりて不相成と申たるを不聞入遣し

おのふ身に
不束はなく
余人のため
に難義する
也可憐也
れゆるとも
さすわ

たる市川といふ御したもあれはそこへ行ていか様ともすへし實家を可構わけ少もなし五兩遣したるは莫太之義と可心得旨申遣候かくとがもなきおのふに苦勞をさせるはいやなれと無理にわか手元をはなれ母上の御こと親類書に省くなと旁以不埒之かきりに付嚴敷する也おのふにとかなしこさかしき女ともよりてわか心に背様に仕かけたることは無是非事也おのふ身上引受極貧に質なと置よし也○明日はおのふ宿下り之積之處昨夜癢氣俄に取つめ以之外之躰され共御醫師等にてひらき附よし也急に使差出す退出玄關を御殿之返事はいかにといふ大に快明日は宿下り之積親族共呼置可申旨申來る大に安心也畜生あまの因果おのふに報ひ候いろいろのこと有可歎

○二日 くもり又雨 御城にていろくのはなしの序に淺野中書菱川もろのふか書たる春書をもち傳たると聞て人々借たり村田翁もかせといふ故にかしたるに宅へもち歸ひそかに二階へ上り内御用之書物のことくな

る躰にてみたりと云人々其頃わらひしよし昔禪家の老僧にわかき女抱附たるに寒山の枯木顔色なしと申て走り去しよし其ことを老婆聞て存外僞をいふやつ也とて追ひ出したりと也このはなしのうらにて村田翁の清直の一つのうちともいふへきかいか翁は至而かたき男にて八十四才也聖人の八才以上七十以下男女席を同じくせすといふ教をけにもとおもふ也
○三日 晴 いとさむし○きのふはおのふ宿下せりおのふ不相替穩にて才氣あり可惜わか子にあらず○おのふ宿下りとして新右衛門夫婦幸三郎夫婦鏡作は不快也とて不來新家の隠居妻并此ほと泊に來り居おつる來る母上殊に御よろこひ也與助勝藏料理也肴なしといふこと也しか所々大名よりもらひたる肴にて事足候講師三人來る義士傳或は御記録等々よみ切も
のあり新右衛門おのふへの時計一ツやるおのふことの外喜び也其外の人々より菓子來るおのふいろくのはなしする同人此節一人に而身の上するよししかるにへや親の借金夥其上御奉公出の借金もあり極貧のよし

也人々歸り夜八時頃までうちよりて物語す

○四日 晴 おのふ來りいろくの料理向客對等みな不殘おくに引受也相應に取廻す也客來なきとき市三郎おのふおくになと打寄母上御上坐にていろくとはなしする母上はおさとの今般のまとるにもるゝ事をいろくと仰らるゝ也みなうちよりみれば彌吉の失しことなどおもひ出てひそかに涙を落せりおしけは小兒不快にて不來昨夜のはなしによりてけにも母上のわかれを御をしみ御尤也としみくおもふ也新家のおつる里に逗留は同人少々不快其上婿よほと不快にて留飲或はかむ症等にてよほとやせたりとて旁其上のさと歸也外に子細なしおつるは少々の事に而薬も不飲ともよし位の事也御兩親様御心配に不及候太郎は昨夜も新右衛門夫婦に附きりにてあとを追ひ新右衛門にいろくといふ新右衛門夫婦涙くみてつれ行んといふわれもみるに不忍やらむといひしかうは承引なし太郎を叱て泣居たる太郎を抱て乳をひねらせなから寐かし附たりこれらの

こといろく〜と記せむにはこのほとこのさま記すにいとまなしされ共かゝることはつまり人間世にあるうちの天然の所作事也とおもひて大に發明してこゝろやすし

○五日 曇 所々廻勤昨日御能拜見被仰付候御禮也○きのふはくにのふ寺参いたす○一昨夜は夜ふくるまで子供と母上うちよりいろく〜と物語して其序にのふ書をかけりわれことく〜くに讃を成したり書を催促して即吟也朝顔のかた

朝顔もかくうつし書に千世を経てさかりひさしき花とこそみれ

富士と松原あるかた

富士の根をうつす千さとの水かゝみくまなくみゆる田子のうらなみ竹のかた

くれ竹の千よをかかねて君のためおのかみさを〜つくさむとおもふかくしるしたる所へ俊藏罷出いろく〜申談いたす其内書出来たりとて出

すなてし子のかた也よしといひさまに

うつくしきいろをみせたるなてし子はわか子のかける書にそ有けるとするすみなく〜笑ふ母上の御樂しみいふへからすされと今より御わかれをおもひて樂しみ中にひそかに涙をおとす歡樂極りて哀情多しと古人のいふをけにもとおもふ也干ものにとくり一ツ出してわれ二ツのみたる残をしま井太郎のうは給たり子ともはくりを給させたりひるまは大越貞五郎來る文を論し詩を評して夕かたまで居るめしを出しわれは一合のみて字をかけり

○六日 晴 おくに縁談之事われ昔入魂なりし高山又藏悴と縁組之義申來篠山攝津守并大工清兵衛世話也高二百石に而身上もよし申分なしされともむこ十九才といふ五ツ違ひあまりの事也よりて其旨色々申たれと強而之のそみにて是非くれとの事也よりて昨日先方之舅姥をよひてみせたりむこはわか方へ登 城前に來るをとなしき人也才子にはあらず○のふ

くに佛參の歸り谷中の植木屋に小休したり用人其外共に上下十三人はかり也この植木屋のとなり名代のそはやにて料理をもよくすと也器物其外共美々たる事之由さしみ羨香等を出して二百疋也そはは上下たらふく給たりと也はなれさしきにて外人不來風流なる所之由ならの辨當かりよりは至亦重寶也

○七日 晴 伊賀守殿に參る大坂表之義いろく相伺候○おくに縁談之義篠山攝津守より再應談有之候間彌相談いたす積及挨拶候事○今夕おきつ市川に參る同人十二日に歸候由に有之候おくに縁談はさ、山嫡子表向之媒人に相成候旨攝津守申聞候○今夕大坂より書狀來る

○八日 くもり 御佛參に付登 城○御兩親様之御書狀難有拜見先以倍御機嫌克恐悦之至御坐候南都御引拂之節は彼是と御疍積も御起被遊候處大坂へ御引移御住居も定り御安心被遊候御疍積も治り候と之御事さてく恐悦之至御坐候おさと其外より何等之義も不申越候間さして之御

かく母上の
御事なし
し置候處
右衛門來
とくみて
とめ申其
とに付市

疍積には有之間敷候處かく御沙汰有之候は平日之御慎御別段之故御心も被爲附候御事に可有之候江戸へ御歸りに不相成候故御疍積之御起も御尤に御座候得共乍去是は上の御事其上少も願候御被仰付候には無之候間無余義次第に御座候御疍積御起候得は下々殊之外なる難義に相成大なる御不隱徳と相成候間夫たけは其子孫へ必むくひ來候義に御座候處かくまてに御心被爲附候は恐悦之至とことさらに感心申上候義に御座候新家事も御教之趣相守候由に先ッ此ほとはよろしき躰に御座候爲續度ものにも御座候され共酒をのみ候は必やふれ可申と奉存候私なと酒癖は無之候得共たれも知候通一テキものみ不申候義久々に御座候間何卒私歸府迄は禁酒之義被仰付度ものに御座候母上より之御狀御不快既に御快然と之御事恐悦之至御座候御手當第一之御事と奉存候御酒は多くは不被召上候様に奉存候○おさとより之書狀○太郎大坂へ參候義宜ケ間敷と之義に付母上の御爲を存候孝心之存寄逐一尤之論に候然ル處此ほとおくにも縁談極

三郎も九分通極候義に付大に御安心にておくには新右衛門市三郎は幸
なと申上るに
ろと申上るに
たの御上り
こき御け
あまの御事
也此の事
しより難
候は定

市三郎も九分通極候義に付大に御安心にておくには新右衛門市三郎は幸
三郎に御まかせ今般御出立之積御了簡相定り申候例之御氣分故大に御決
心にて御自身と專御したくありおくになと御笑ひ申上候位之御さわきに
付更に御子細は無之候間もはや御案事は無之候○佐々木へ澤庵ぬかみそ
可遣旨承知不自由之品は書付参り不申候間不相分候○大こし縁談之事少
も存意無之候何之差支も無之候に付忠四郎申談取計可申候此事幸ひ忠四
郎來る其事次に詳也

御かみ重
御こまり被
成候はハソ
カ伊賀守夫
婦若林等夫
例もあれは

○九日 くもり 重陽之御祝義として登城○おさと日記本多と女共相
違之次第御尤也され共奥之事故いつれとも勝手たるへしかたはつしとは
いかなることかまくらをはつす女は以前も□ひ候ことありし也ふみはつ
して身上わるくならさる様にいたすへししかしカツクリカヘシくしまさ
に准し候不束なるいやしけなる躰など上下決あるまじき事故夫はおさ
とより急度世話すへし○なてしこ鹿のことに付うたおもしろしなにはの

母上御てい
髪あらは御
風流なるへ
きかいかへ

俗地なる事は人々いふ事也土方八十郎御目付代として参る事に付御申越
之趣御尤也○春日野の火のうたは前のうたよりよきかとし○わかれの
うきうたまことに實情也夫に付はなしあり一昨日市三郎稽古より歸り母
上に御行逢申上遙に御まち申上候而御同道申上坂みち等は御こしを押な
といたし殊にこゝろをつくしたるよし也且市三郎母上の御出立をかなし
みていろくんと申上る故にけさも母上市三郎の顔をつくくと御覽なか
らこれにもくはなきやつとの御意也市三郎御受にそれならば江戸に御
のこりと申上たるにいや也おれは一おもひに左衛門と一所に行と之御事
也市三郎の顔にくからすみえしは此一事なるへし○おさとの御つくりを
なしたるさまを大越の母上御覽ありておさとのうつくしき京人形のこと
しと仰られたるよし承りしかおさとの顔うつくしく候とも京人形のこと
しとはいさゝか過賞のことしいつくも親は有かたき事也○中條良藏之
卓之こと其外共具に承知追而何を遣し可申候○河内のうた御感心之由此

男宅へは以前しはく參候もの也風流なる刀や也此ほとも頻にうたをもち來る也○昨日も兩三日以前も忠四郎來るこれは大越縁段并忠四郎身分等之事也縁談之義はもとより我等存寄なし我は忠四郎の申出をまち居たる也身分之義は忠四郎は此ほと御取箇之改方には一人のきゝ物也御代官に人撰の風聞あれと夫らよりは今一段宜仕かたあるへしと之事にてなと世話いたすかと聞ゆる也貞五郎事は此節留役之事いまためくみ不申追ふはと奉行もはなす也此ほと二人當分助にはもるゝなるへし

○九月十日 雨 桂城恒庵何之いちとか申候針醫の療用いたし遣したる所發明清眼に成歸俗いたし然ル處其もの藝州のものにて此度母對面に行故道中は我醫師に成つれくれ候様と之事也今日あんま并針等をさせこゝろみたるによほと上手にてあんまは幸悅大津なとよりは一段よし針は別段にすぐれたり右にて本町之表店に居るといふ左もあるへし此ものはなしに九才の時サカマツケにて眼つふれ廿七歳にて明あきはしめて女のう

つくしきかわかりたりと也はしめは上野其外へ行てよろこひしと也されと盲人の時と違ひくらやみに甚こまり且覺は甚敷わろくなりしといふ也今もめしを給るさまなと全に座頭のことし眼の下の皮をはさみとりしといふなれと少もあとみえす恒庵以前は遙に上手になりしとみゆる也内弟子三四人あり本町石町邊にて一二を争ふはやり醫也といふ也風邪の時は紫紋ちりめむのかい巻をきて調合場に出居といふ也○重陽之殘暑けしからず候みな單ものにて汗出る也五月中旬位のことし人々大に驚これ八月晦日八月中の節に成る故なるへし

○十一日 くもり 十日には新右衛門方うなきふる舞ありて參る節句には幸三郎來る例のはなしにて四過まで居るわか兄弟の子供も末は他人のことくなりやと常にあやしむ也○母上少々御風邪にて御ねころひなからいろく御はなし也われと市三郎と替るくアンマをなし奉る○曉めさめて書物をよみ居たるに母上廁へ御出被成はや汝は起たりやと御尋

ありてほとなく御出わか床の中へ御ねころひにて頻に御はなし也暫あり
てときをきけは七ツ也や、ねふくなりてこまりければ母上の御そはへ打
臥御はなしをなしなからいつしかと寝たり目さめてまた御物語いたすめ
さましを給り候へと申せしむかしおもひ出候

○十二日 雨 十日に新右衛門方へ行に兼右太郎をもつれ來れと事な
れと雨ふりたれば少々風邪旁やめよといひけるに必行へしといふわれい
ふ相かこにてつれ行たけれとデ、はデ、くさしとて一度もともに寐す新
右衛門方へ行ては新右衛門とねるといへは内々太郎より相カコにて行は
斷也といひしと戯にいひたるに太郎殊々外のこまりにて御デ、さま夫は
うそ也とてわれに抱附てさわく也やうく乳母のいふによりてカコにの
せて行けり井上へ行やいなや奥へ行ておますにとり附新右衛門にとり附
て大嬉ひ也此前おますわか方へ來り歸るときおますにとり附井上へ行か
むとせしを乳母かやらさりけるにおます歸りてもころかゝり也しによ

くも來りたりとて愛すること甚し歸りに臨みていろくいひて泊る故に
汝は新右衛門の孫なれば大坂へはつれ行かすといへは大にこまりてそれ
はその時也とていろくといふも大笑也母上は御不快にて御出なし○恒
庵いふ一昨夜本郷丹後守錠御番のもの奥女部やへ切込女五人を切倒し其
身も自殺したり恒庵行たれと女五人なから死果て中々療治ならすして歸
りしと云也

○十三日 晴 けふ早ひるにておきつ 御城の上る○市三郎養子相談破
談に成おくに相談は相決來る廿日結納と成○市三郎養子相談に千三百石
并千石之方有之候旨申來る人はいろくなるもの也○新家御用多故にと
けく長座なとせしことなし小笠原十度の内新家は二度位來るこの頃
又曉六時頃に歸りしことありといふ近頃の留役御用多のことわかつとめ
たるときと大にことなり心配なるもの也新家も曉なとに歸る御用はなき
ほとこの役にいたし度候此上御用多ならば必からたにあたるへしとそはに

ておもふ也當人はさほともおもはぬか也されと早出之御用日など度々不參之由に付近頃はよはくなりしかいかに
○十四日 くもり おきつといろくとはなしをなしみるに同人はへや親其外之諸借金を引受て夫にひかるゝ故に人の半身上にてくらす躰也近頃は自分まかなひなるにいかにもくるしき躰也あつけものなとすといふ當人此上行先のことなど大に案していろくといふさまに可憐こと多く感すること多しわか子なからわか世話やくことならず此節は無理に人の養女となれるを後悔當惑すれといたしかたなしみなおきつ一人の身にあつまり難義となれりこれ可憐事也○上の御事を難有奉存女なから忠義のこゝろありていろくとおもふさま可感事也 上は十三歳の時より御そはに罷出たることなれば今に小兒のことく思召て被下物などおさなしきものを被下よし也御戲にはコンくとして被 召よし也御戲なから御手つから被下候おもチャのこときもの一ツをわれに福分したり

○十五日 晴 十三日は晴又くもりて天氣たしかならず夜五時前後は晴たりひる後より新右衛門來りて松魚持參にて酒など給くれ後まで遊居たり日くれて新家來るしはらく居て六半時に歸る○ひる後に前田夏かけ來る同人にはなむけのうたのかはりに唐番半切に十二月故十二月のうたを乞是は屏風一双にするつもり也段々出立近寄てことの外に騒敷なりたりけふは六半時登 城にて御白書院にて 御目見御役所之御暇被下入念候へと之 御意也御次におゐて拜領物被仰付候旨御老中方被仰達芙蓉之間におゐて金五枚時服貳御羽織被下之近親其外兩敬之人々來る○篠山攝津守産穢男子出生いたす七十近く成産穢也とて殊之外之自負也自負も可也自負せさるも可也○昨日はおくにしたくの事に大丸買物其外之義に付おます晝後來り六半時歸宅弁前後のかんさしにて十二兩衣類にて十二兩かゝる惣入用百兩にてあけ候積俊藏殊之外世話する也俊藏諸買物之義に付此度之骨折不一方候其旨そめ參候はゝおさとより得と挨拶あるへ

し中々容易之事にあらず候○おますに筆筒町のそはを爲給候此節麴町に
同様之ものありされ共筆筒町のかたよし以前を細くして湯をかければキ
レやすき躰や、山岡のそはに近し

○十六日 晴 昨今神田祭不相替にきやか也なら人共右におとろく可惜
宅御用多にて残らすみせかねたり○昨日大坂より之書状とく大越并松
村等へ夫々参り居たること故に直に遣し候○母上四五日以来御持病氣に
て御平臥也御風のきみに御かん症のましる也人はみないはふといふ御暇
の拜領物など別よからぬ也此節少も不被爲替つもりなれとさても子の
身分にてはわかれを御をしみの御様子みえて内々にて涙落る也御尤の御
事也これは其ところをしるものならてははなしならず一日も長く御そは
に居たき也醫師はかつらき也坂上といふ上手へもかけたれと同案也今春
の御症にて至り御輕しといふ也○きのふの朝五時之御用召に付七時頃
起てくらきに湯を遣ひたるに太郎敬次郎ともに起出てもにバ、ア、

と呼なり湯とのにて

母上に居たりはし多し田備佐のれか浅野と外は下殿中つりも殿下殿
は母上に居たりはし多し田備佐のれか浅野と外は下殿中つりも殿下殿
は母上に居たりはし多し田備佐のれか浅野と外は下殿中つりも殿下殿

からすさへまた鳴かぬ間にとく起てハ、ア、となく呼子鳥

などおもひつゝけつゝ来りみれば母上の御前うしろに太郎敬次郎這入居
て太郎は御祭のまねにて御夜具を足にてさし上る敬次郎は夜具の外へ出
たりとて大に怒りニヒサンの三太郎といふなと大かしました也され共母
上には御喜ひの躰也きのふも豊太郎と太郎にて敬次郎をイジメたるに敬
次郎ニケながら君子は危に近よらすといひて遠くへ行其上にて大聲にて
悪口せしよし玄關之ものなとみなく大笑のよし也母上へ太郎なとなれ
奉るさまなとそはにてみるはなかくに涙也

○十七日 晴 御宮へ参拜例之通也○新家のおつるいまた新家に逗留也
先方のことを露いはす病氣とのみなれと實は無余義わけもあるか也禮后
院内々聞たれと只病氣といふよしされ共先方も親類故山本よりわかり來
るさまにては大意先方よからぬ躰もおつるは見あけたる利口もの也感心

せりこの一事にても新家よくつゝしまねはならぬ也○おさとの書状佐々木の書面昨日遣し候御尤也買物之義夫々へ申付候書添の本多へ返禮申越候通古梅園の墨と肴にてよろしかるへし着坂の上にてはあまり遅し着坂は十月十八日なるへし○おさと書状之内市三郎縁談之事前の通也いまたきまらすされ共追ふ多分はしめの忠四郎世話の方に定まるへし是は御目付の岸孫太夫等之了簡也○幾之進忠四郎之事おさと了簡尤と承候○客來のことあまり多くて日々食事いたすものなど多ければなか／＼になれて客の二人三人の日は手もち不沙汰にてさひしきかことき日もたまにはあり大笑也この度は別段なれば酒を出し菓子を出したゝは返さぬ様にする也

○十八日 くもり おさと書状書添之内大越之事何も別段にはいたし不申候御丁寧に御申越之義と存候○日記之内健之丞之長屋近きよし定而太郎敬次郎と日々のけんくわなるへしと今よりおもふ也○廿日の月までも

みしやと之事一向に月はみるひまなし二階へあかりたること田口加賀來候日大熊善太郎來候日など今日までに兩三度に不過十五夜に庭を少々歩行せりひるは客夜は母上との御物語にて月は南都の事と物語たるはかり也喜三郎のはなしさもあるへし女共ならを思ひていろ／＼はなしすと尤也九月四日の初鴈江戸にては兩三日^{十日頃か}已前に聞たりされとも十日に新右衛門方之馳走にかもを給たりわか耳遅かりしか古さとをしきりにうたはよし外二首もきこえたり○いこまねのうたを評したるにみつからはよきつもりによしたれもおのれのうたをわからすとおもふものなしうたの議論日記中にあるも又よしわれみてもあやしくならぬはよきうたなるへし大坂の砂糖高直のよしさて／＼おとろき入申候砂糖など大坂こそはもとなるへけれしかるに直高にてならん高きよしは解せぬこと也江戸もこの頃は高くなりよし也過日飯嶋の世話にて長崎調進の下砂糖を多く買たり至るよろし夫等は三夕也尤御拂もの故なるへし大坂の砂糖全奉行

所々直段なるへし御代官にたのみ一箱も問屋にて買候方徳なるへし大坂には毛虫など多よし夫は聞およびたるシコウホウとかエンコウホウとかいふものなるへし江戸にてはシコウホウはなし毛虫にエンコウホウといふはありて是は男もいやかり嫌ふよしある人のいひしをきゝたることありまことにやおほつかなきこと也○眞田の嫡子十五日に御城にて知ル人に成十六七也とよきと廻し也感心せり細川越中の嫡子是も丸く角はりたること顔の兒にて才子らしくみゆ父に似す例のおさとのはなしある女に似たるなるへし今日不時御禮有定元服なるへしもし大判のくはりあらは刀壹本買ふへくとおもふ也いまたしれす候○けさいろくのはなしに太郎のいはひに御殿の伯母より紗綾の時服來り敬次郎の時は羅紗の巾着來ると母上の仰らるゝを敬次郎御そはに聞居ながらへん巾着などはオラハ御免タトいひなから一寸舌を出したり○ある御簀本朝食の時元家來切こみたるにそはに脇差なく持たるはしを投付ながら逃るゝところ

を爲手負られたり其家來は井戸にて此ほと吟味に成たりされはしはしも脇差は手はなされぬこと油斷すへからすと物かたるうちにいつの間にか太郎拔あしゝて來りツツといひてわか肩へ飛附たるにわか大に驚たるも大笑也此節孫共のいたつら等先かくの如し

○九月十九日 晴 太郎事大坂へ參候はゝ母上の御なくさめ草有之間敷との事にて新右衛門發意にてわれももとより同意其こと申上勿論おさとを申越しける旨をも申上て漸御承知太郎は江戸へのこる積となれりされ共きのふもいろくゝと仰られ一度は再度はと醫の御沙汰なりしかわれいふ母上の御慰に相成よしは新右衛門の申條われも同意也大義におゐて太郎を召連行こと不相成候間御決心のかた可然旨申上○かこ其外共再び拂物にいたす積申付たりしかるに今朝未明母上とわれと床のなかなからいろくゝと御物語申上居たるうちに早太郎起出たるを母上めされ候ゝ御フトコロに入られ汝は大坂へ行か江戸に居るかと御尋ありしに江戸に居て

母上の御そはもよけれと大坂へ行たしといふなせかくいふと仰らるれば先荷へもて遊ひものゝ大鼓或は獅々などやりたれば既にこと極たり今更はといふ故夫等々ものはみな江戸にて可買遣新しくなりてよからむと仰られたるにそれはいや也といふわれ脇を太郎は江戸にのこすつもり也よりてもて遊ひものは可買遣残りて母上を慰め奉れといひたるに母上の御蒲團へ顔をあて泣入て聲をも不立シクといふ也其さま實におもひ入たる躰に付彰常とわかれの時かれか心のさまを顯に太郎かなすかとおもふはかりにてわれ何分見るに不堪厠へ行て密になみたを拭ひ歸りみるにこゝにいたりて母上再ひ御こゝろ迷ひ汝は左衛門へ附やる也ナ泣そと御落涙なからに仰られ乳母は其躰をみて益なきことにこの御兒様を御なかせなさる虫か出ますこゝにいらせらるゝナ此婆ゝかめしものきせ奉るへしといひて太郎を引起しこれも泣かぬはかりのさま也其序にくどくといふを聞はこの頃を太郎段々と家來共へ申付小なる植木鉢の類其外共み

な荷造りさせたと也よりてわれいふかくも幼なからにこゝろある上は却る太郎を召連行かたし實に母上の御なくさめとなるへし孫を召つるゝこと大義に於てならずと申切たり決心彌堅く取極たりされ共こゝにいたりて太郎のこと母上再ひ大に御うこきにて大坂へ被遣旨を仰出たりわれ御受を申上ず御斷を申たりされ共此躰にてはいか様なるかしらすさても定まらぬ事也ひる後幸三郎來る右々趣を申聞たるにそはに太郎聞居て何ともいはすうつむきて涙をこほし居たり其躰をみて幸三郎も亦潜然たり母上ますく御當惑われも大に困れり

○十九日 くもり 淺野へ立ふる舞にて參るいろくんと馳走ありけふは珍書藉珍書畫古物等を多くみたり○一昨日を昨日まで幸三郎方は敬次郎爲暇乞參いろくんのものをもらひ來る敬次郎幸三郎方へ行は幸三郎をヲトツサンと云勿論おそてをヲツカサンと云て乳をひねるいたるよしわか前にては幸三郎をオチサンといひ或は内藤サンなど云にいたる幼年より

性ははやいろく也され共此時よりして教れは十に六ツまでは大に變ずること養子に養父の風あるかことくよほと違ひはする也○一昨日幾之進來る五ツ前まではなし歸りたりよめのこと存寄無之今一段貞五郎身分定あもらひ可申旨をも云存寄無之いつれともおさと了簡次第之旨同人に申遣したるよしを答ふ貞五郎の御役兩三年は間あるへきかことしあまり延はいたさすやいかに貞五郎おとなしき躰よきわかきもの也このところいかゝなるものにや○出懸新家來る

○廿日 風雨 一昨日はひる前より小笠原并直たね來り夕かた迄はなし居たり直たねは自作の刀數本もち來る同人傳書を作り其下書を以加筆なしくれよといふ故に昨曉よみ見たるに意はよし奥州ことはにてイエ或は出出來等の違ひなとのかなあるか也され共豪傑の意大にみゆよりて其意を大になしてあしきは削りて數十ヶ所直したり夕かたより大熊善太郎來り五過まで居る六半時頃を根本善左衛門來り四ツ前まで居るいつれも料

理を出す○昨日はおしけ歸れり是は兩三日前より來り居たる也同人の貧なるはなしいとあはれ也歸るとき母上へも申上候而金三百疋遣すこの度の出府は存寄ありて來る人ことに必菓子酒を出す也百日の間一日一兩ツ、とおもへはよし堂上客不空樽中酒不盡といふ古人のことを今のわか身に逢も難有事ならずや平日かくなしては間違也一句の詩一言のうたをも不詠書物も夜曉に目さむるとき起出てよむのみ朝より夜迄母上と御はなしのみをたのしみとする也月見前後は日々客三四人に減たるに御暇被下たるより客又夥なりたり三度ツ、めしをたく也ツンホの雇女よくはたらく也乳母二人并おくにチウを飛歩行也この躰故女共朝早く起てからすのなきはしむるころに乳母共椽頬をふく也○今日おくに結納來る

○廿一日 快晴 朝母上の御寢所に行みるに太郎と敬次郎前後に御とのなかへはあり居てヲハアサンわか方の御向といへは又ひとりもしかいふよりて母上左右へ御くひを御廻しなさる也手前か方はムカセヌとい

ひて御かたのところよりチヒサなる手を出して互にせり合ひ或は御ミ、御コフを引はる其さわき云へからすしかるを母上殊々外御喜也これにては決して太郎をつれ行かれぬ也

○廿二日 曇 十九日に淺野へ行たるに奥へ通したり奥にては老女之取計也奥口といふかことき所にて老女刀を受取て刀かけへかけたり着坐茶たはこ盆出るやかて小ひろふたをわか脇へもち來れりと也しもこれは懷中ものを出しおきためなるへししはしはなし中奥方被出かひとり也老女差添一通りはなしなとして居る淺野と二人ひなのことくに並ひ老女は次に侍坐也やかて次にそは女ひろふたをもち來りて平服して居るわれ一向氣かつかす暫ありて中書御肩衣をといふ故にその爲なるへしとこゝろ附て次にて白衣に成主人も同斷奥方は紫いろの衣類に着替緋の中かたのけたしなと着て出たり奥かたの躰至ちうちバジミにてヤボならす全に中書と一對のひなのことしキリヤウはよほとよし鏡作の先妻に似て四五段も立

あかりたるなるへしいつくへ出して立派なる奥さま實に淺野にまけすおとらすの女徳ある躰也無間も銀の茶盆に堆黒の茶代ヲ土ひん茶わん三ツのせたるをこしもともち出りて差置行たり奥かたみつかから茶をくみてわれへくれたりいろくくと入組たる身の上はなしなとある故に奥かたは或は一寸來り又は暫不來奥方附の女なるへし入側奥かたの來れるかたには別に二人ツ、侍坐して居る也若とも奥かた出ると無間も知ル人に成五ツはかりなるへし一時はかり過て吸物出る其時は奥かたもへも出る女中四五人出てとりはやすされ共至ち物靜にて奥かたへ向ひ時をり竊に物云ひ奥かたはことくくに淺野問ひ淺野の一々に答ふるさま穩にしてよく和しことくくに禮ありさても諸事かくありたしと其躰にひそかに感服せり所謂和にして不流とは淺野のさまなるへし酒を主人きらひなれと給らるゝ丈ほとよく給る躰奥かたは一滴も不飲又みたりに強ゆるなといふ馬鹿けたるいやしけなること更になく尤よし馬鹿強なとせずよく酒をほと

よくすゝむ客もこゝろよしやかて書畫宋本など實に日本にての珍物出るかな澤文庫の印ある書或は一部にて百金に近きものなるへし宋本の漢書など生れてはしめてみたり畫は不覺書には文徵明黃道周のかけものなどありきいづれも百金以上の品なるへし其内天海僧正と外に一ふく明人の書并林則徐の書この人は今のからにてイキなどありきしかるに右之四ふくは同じもの二ふくあるかことくおもひ驚てみるに二ふくツ、ありあやしみて問ふに一ふくはみな奥かたか慰にうつしたるに幸によく似たれば戯にわれにみせたる也といふ也こゝにいたりてこれはくといひて大に驚き且怪みて再ひみるに決而似せとはみえす驚歎いふへからすこれはかくうつす法ありと云也引うつしのことくなしたるもの也奇々怪々其絶妙いふへからぬ事也夫等のことにて夜四ツ時過に歸れり其時右之書は本書とうつしともに借用して歸り新右衛門其外の人々にみせたるにみなケシトントテ新右衛門などはわれは已後手習は一字もせし女にかゝる人ありとはと

いひて發憤する迄に感したり今度抱の用人ハシメといふものは書をよくし淺野の用人之世話にて抱たるものなれば尋みしに書をよくしうたすきにてたにさくのみことなるはみもしきゝもせしかかくからさまの書をよくするははしめての事也といひきはなし中書物を夫よこれよくとみたる故に混雜したるを奥かたみなみわけてかた附ル故にかなり書目位はみわくること自由なるか或はかなりに詩作位はするを隠し居るかわれ奥さま御學文はいかにと問ひしに一字もよみしことなしと答たれとかくし居るなるへしわれあまりのこと故諺にいふ鬼の女房に鬼神かなるとはこのかたの御夫婦なるへしといひき世にめつらしき人もあるもの也としは二十四五位なるへし

○廿三日 風 廿日に例刻登 城いたし居候へと之事若年寄より達に付出る御老中御登 城後無間も 御前被召候このめし出しといふこと今度にて既に八度に及ぶ故に御席之御様子をも辨居れば例之所に出たるに

これへ來れと云 御意に付一段すゝみて 御意等奉伺候處又こゝへはいり候へと云 御意に付いとく 無勿躰は奉存候得共 御意之事故又一段すゝみたり古人のいふ天威顔をさらさる咫尺なるものにて御側近しといふも大かたなりやいかにもかしこきのかきり也夫にて暫之間 御意相伺尙又申上旨なともありき其時わかことき輕き身分之ものかく 上様へ御側近きのかきりまで罷出へきとは實にはからぬこと也 上の御不ためなること露おもはず身を忘れ御奉公をすへしと難有おもひたり今まで 御前へ被召たることも多かけれとかく御そはへ進みたることはなし人もあるましとおもふ也難有御事也其御席之御様子のみは母上へ竊に御物語申上たるに頻に御なみたを御落しわか子かゝるへしとはいかなる難有御事なりや汝か遠國へ行をいやに思ふは勿躰なしとて殊に御喜び也かく近被召候事近頃之御様子之由或人はいひき

○廿四日 晴 廿日におくにへ結納参りたる日はあやにくに風雨にて幾

之進などは不來新右衛門夫婦よめ幸三郎并坂本くま次郎野田源太夫等のみ來○太郎事是非大坂へ行へしと云事いか様にしても不止よりて新右衛門夫婦より強ゐいろく 申聞たれと只泣にシクく と泣のみ新右衛門夫婦は殊に親みふかくとまりに行てはたかれねるといふ位故いろく と叱りもして迄いひたれときかすますく 泣也あまりの事其上母上みるに御忍ひかねにて彌われに添て上かたへ可被遣と云御決心四月には何事を置ても太郎に逢に行へしと云御意夫にて先治りたりされ共もとより小兒のいふことなればとるに不足母上の思召を段々伺みたるにかれ小兒なからもいふことかくの如ししかるにわれもし江戸にて大病ならむにはよみちの障となるへし夫よりも汝に今引渡すかた安心せりとの御事也しからはとおもへと乍去母上のこといかにも御案事申上ルに付今一段相談之つもり也

○廿五日 くもり 廿一日には水野越前守殿位牌所英烈院と云脇坂中務大

輔殿大久保加賀守殿之墓所の參詣いたす英烈院殿は代々之例にて下總國某の寺へ葬送の事故に江戸に墓なし靈位のみなれといにしへのおもひ出て其人の御おもかけ髣髴たることくにておほえす頻に落涙せりおしき御人也英烈の二字は相當せし人也この人よからぬ人に被欺玉はすよき人を用ひ玉は、今も尙さかりなるへきにと残念にもおもふ也夫を眞田信州に面謁いたす同所にて料理など出閑話數刻にて夜五時頃歸りたり手つから麻の差袴をくれたり歸宅せしに直胤參り居る傳書之相談也○廿日にはおさとよりの書狀日記ともにとく御兩親様御機嫌克おさとも無事之由目出度候夏かけうたの事則日記を以たのみ遣し候われも先日餞別に十月のうたをたのみ置たり牡丹もちのうた大わらひ也其余はさしてのことなし○循助にまち受の香の物可然候早々其手當あるへく候○八重嶋へは着之節さらし其外遣し彼方へは立派なる時服を喜びに差越候間挨拶に白羽二重遣し候よりて別には不遣つもあり也

○廿六日 くもり 廿三日には退出を根もとへ參ることにては一寸はしをとり候はかり也新右衛門方にて立ふる舞あり參る鐘三郎妻と知ル人になり成よき女也鐘三郎之祖父も來るよほと通家也たはこ入に廿兩以上之品あり同じ着類を着たることをみたることなく妾を置といふにて其余をしるへし河村の隠居之二三立上りたる也武藝に出來さる藝なしと云眼さし凡ならぬ人也若き時甲州に被遣たるかときたり鐘三郎養父も必來る積なりしか御番くり替りこれを御小納戸にてはカハ替被仰付といふ也不來この隠居わかことを御ゼンといふ也今は新右衛門宅の庭などよしいなりよほと立派にて矢數の奉納など人々ありけふは新右衛門藤左衛門鐘三郎の弓術をみる新右衛門は繼上下に木綿の紋附藤左衛門は御召シマちりめむの着類にて新敷こん足袋鐘三郎は御召御紋之黒羽二重にかめのそきのあさきむくを着たり新右衛門はス足鐘三郎は白足袋也其さま新右衛門は藩中のごとく藤左衛門は役者のごとく鐘三郎は御小性のごとし

みなよく中ル也十本にて新右衛門二本藤左衛門一本鐘三郎は皆中也○酒中はなし家二人來るみふり聲色などいたしなからはなすみな女とも大によろこふ也土屋大膳も今日は來る四時前歸宅せり太郎もとまりおくには歸宅せり

○廿七日 晴 ある人の此節の行跡をみるにいかゝあるらむ同役のかたに御用向のより合也とて夜八時に歸りたるよししかるに宅より酒を船宿へ廻したるよしこの人常に最上の酒を樽さけにて一わたりの料理やなどの酒は不吞故に侍に申付て酒を爲廻たるかと聞ゆ此節から歎息せりわれ在府中かくの如し往々はいかゝあるへきかゝることある故にわか方へは來りて長坐をなしてとけくとはなしをなしたること百日中一度もありしか無覺束新右衛門方へはあまりの無沙汰にて同人よりいかにやとて尋たることなと有といふ也表向は立派にて着類等われなどは更に不及候

○九月廿八日 晴 廿四日に村田阿州へ參たるに同人大にこゝろよし中奥

ともいふへき所に出迎たり夫々居間へ通していろくくと物語歸らむとせしに是非めし給候へと事也老人殊に病中之人のいふことなれば無余義しはしはなし居たり無程うなきを多くやかせてふるまひたり椎の木といふうなきやの魚故ことによしさらにもりしを田かくふるまふことくあつきと屢引替てくはせたり大に大食せり歸らむとせしに家來のもしたくといふされとも家來の辨當は跡部甲斐守方の兼廻し置たる故に其こといひしにさらは近きわたり也とりよせよとの事にてしはし又はなしなしたり阿州大にこゝろよし其志少も不衰官年九十六なれと全は八十五也われ病氣故に今の御足高のまゝ御鍵奉行を可願遣旨申ものもあれといや也夫は既に八十年來けかれたるとおもふことをせすしかるに老て家來に扶られなから登城などいたし或は閑地にて御足高を貧るなど世にあれといとく可耻事也故に今しはし養ひても家來に扶られて出るほどならば直に御役御免願ひて隠居する也けからはしき心にて上のろくを貧ることいか

にもいや也とおもひ切ていふさま實に別段也病氣も快けれと息きれする故いまた登城せすと云也○廿二日には蜷川能州へ行たるに老人殊々外なる悦也これも八十五也鳩の杖を人のくれたるとて夫をつきて庭へ出所々みする庭に四季さきのさくら盛にひらき居たり菊をかくつくることは植木やにても得ならずといふ高さ六七尺もあるへし大なる枝あること百も其余もあるへし叢生するものゝことしされと根は一本にて親指より大也枯葉など少もみえず實に驚たり庭に亭ありこゝには佛書を見臺にのせ左右其外にマカ玉忌甕の類或は奇石なことくくにならへありこの人の樂は終身これ也居間もこの亭もかけ物は觀音經也めつらしき佛像ことに多しこの人は健なれと小便近くなりてこまるといふ也登城其外共に勝手次第と被仰付たれば五千石の御隠居さま也わか行たるを甚敷よろこひにていろくならのはなし諸佛又はバケ物之ことなど例々通いふ也いとまを乞たるに御歸りを期すること老人いとかたしなといひて別れを惜

み鳩の杖を突なから玄關迄出る故に式臺の上り下り六ヶ敷とおもひて強而差止て玄關上にて挨拶して歸ぬ夫々所々廻り歸りみれば其以前に自書にてわか行向ひたるよろこひをいひ鮎なとくれたりもらひたる茶など遣すこの人わか浪花へ行ををしむにや三日に一度位は使來る庭前の柿山莊のいも或はけいとうの花などいふ類也出立をいはひて道に縁ありやはな向に帶をくれたり岡本近江守わか歸るを待しよしなれと八十四にて去年捐館其れを憐みおもふ老人は當時村田にこの蜷川也其上この人はいにしへより親敷にはあらず番頭のころと風懇意になりし也顔もみすしてわれを憐む人諸侯にては松浦溪山柳原遠江守也水府の潜龍閣公などは屢めされけるを失禮までに御斷申たるに度々難有御沙汰共あらせられこのたひも御冑カフなと給はりたりいかなること脱にやかく人におもはるゝもあれは親かるへき筈の人のわれをよくも又多し○久須美佐渡守へ參る同人は子に扶られなから庭に出居たりしはしゝて歸り來りいろくとはなしす

る也これも息きれするといふ也八十一才なるへし氣分はたしかなれと漸庭を歩行する也三千石高にて御筵奉行也

○九月廿九日 晴 廿五日にはさくら侯より兼約にて同人之中屋敷へ参るひる飯よりとの事故四頃より参るこれは同人の屋敷近頃八丁堀へ出来して十九日には同列之内松平肥後守松平讃岐守を御招廿二日には堀田攝津守を御招ありてけふはわれと佐々木循助を御招ありし也且これは御饒別として宴玉はりし也我も循助もちと家からも高も前の人々には叶はさるかことし循助は御用有之八時頃に参る城より也御所々に見星附人など附置たるを我知らず出かけに所々廻動して芝の方を参りたれば家來の少々混雜せしも又可笑彼宅へ参るや否直に候被出候われを客坐にての取扱いかに斷候亦も例之ことく承知なし無余義其意にまかすしはらくありて菓子出る白かねの鉢に夥つみあけたるもめさまし菓子盆はグリ塗也めつらしきもの也やかてひる飯出るこれは本膳にて備中殿接伴を取扱也ひる

後快晴にていと過暖也これより庭に出て釣をせむとの御事也わか着替あらむことを備中殿被申候よりてわれいふ得てわれらか着類は半そてなどいふものにてかゝる所にて下着を扱は甚敷こまりのもの也され共といひながら次に着替たるに白はさすかつきもあたらす家來狭箱よりいらさる着替を出したるに果して黄キ胴の半そてなどの衣類ありしも又大笑也こゝにて下着をぬきたるにはや候はこもむの衣類羽織に替させられて出られたり夫を候に随ひて所々庭を歩行す潮入にて泉水つき山はなれの亭等所々にあり築出したる釣所ありそこにてつりす釣は御上手なるへしなと候笑ながら申されたり果してつれす近習の人々コカヒをはりへさしくるゝなとちと氣のとく也漸にタホハセ一ツをつりたりその時循助も來りてつるにコレモ又同じ候と循助われには至るキレイなるこしかけいつる夫にこしをかけなからつれとさらにつれす果てはつりいとを引かけなとす人々笑ふ也夫を馬場ある亭にて小休いたす探幽の武藏野の富士のかけ物

かけあり至るよしそこにてうす茶出るサトフ粟も其外數品の銘酒出る菓子盆手塩さらなとみなギヤマン金イツカケ也しはらくいろく〜とウマキものなと給半分はヲトケましりのはなしなと候いたされたりヤア左衛門そこはならにて古佛を得神代の矢の根と〜もに目貫にいたされたるかあれはふるきもの也西大寺のイフといふ古銅の紫色別段也よし野の奥に一本足の奇獸ありなとわかいふへきことをならへ立てのはなし也われ大に驚くしかるにまだはなし有ソコの御かけにていたく難義したること有其うらみをかたるへし夫までに今一ツ粟もりのみ候へなと被申われ不審のかきりにていかなることならむといさ〜か恐たれと元來公のことに常に心をつくすことなれば氣遣はなけれといさ〜か案し思ふ也循助ソバより其御うらみ伺たしなといひなから頭をか〜へて笑ふこれは廿二日に侯福山執政へ逢を申込參られたるに候は溜つめ格なれば小書院へ通られ其次へ御奏者番の伊東播磨鳥居丹波とわれと居ていろく〜のならば

なししたるをフスマこしに候のきかれたる也しかるに福山執政のわれに逢はる〜によりて前の二人は斷なりきそれわれはしらす前の二人之内伊東出られたるに直に退去にてわれ出たりしかるにいろく〜と御用向其外之内話ありてわれ門外へ出たるにやかて登城を御太鼓なりき故に備中殿は一時はかり待られけれと氣のとくなからと申ことにて逢は斷になりて廿七日に可參と事なるよし也これにて御老中の重きも御用向を御老中と別段にさる〜もしるへしその事を候の申されたる也循助いふ知りては左衛門かために候のムタ足をサセらる〜様にはなりかたししかるに右をわけにて候にムタ足させしといふも尤よし奇といふへしなといひて笑ふ其内又亭を替て前の池も馬場も不見亭へ候案内ありそこにて菓子其外出るやかて家來出て前の二ヶ所にて出たるものを重つめにいたしたるをもち出してけふの御みやけなれとはやく宅へ廻すよし申聞たりけふは候のおもひ附にて昔寺社のことつとめたる家來をつれられたればみな

こゝろやすき也そこにて畫師或書家など出る實に山海の美味夥出たれと
覺へて歸りしものは松魚と鯛のつくりわけのさしみかもとねきと麥との
茶わむもりうづらやきこれらは大坂の御兩親にあけたらはいかに御よろ
こひなるへしなとおもひし也其余のことはみな知らすいつも侯の優待特
禮にて酔をつくす故にこゝろして大酔せぬ様に用心して歸りて^{四半}も家
來共之用向其外共きゝたるなれと乍去常の一合にては中々不濟よほと
みたり候左衛門それにては死ぬ氣遣ひなしなと被申たりこれは朔日に候
に 御城にて懸御目候節酒を近頃大に減して一合はかりの外はノメズと
申たるに候はこの酒料にてさまでに減する様にては無間も死すへしなと
申されたることあれば也歸りには中々口にカコダイの上にかカコをの
せられて家來共並居これよりといふ故辭退に辭退をつくせとも申付也と
てきかす故にそこよりカコに乗て歸りたり候の丁寧にさるゝこと常にか
くのことしけふのさまもおもふへしされ共これもみな 上の御めくみに

てかくの如く也ユメ失禮あるへからぬ事也

○晦日 文恭院様 御靈前^に爲御暇乞參詣○去ル廿六日に大坂より之書
狀來る御兩親様倍御機嫌克恐悦之義おさとも五十日目にてのげろゝ丈
夫之趣相分る日記にも詳なることうたなと多し可笑ことの返事なとまで
おもしろく記したり○水野大監物居城焼失之由承候間關善左衛門を以其
様子尋として菓子かはり墨など遣し候處昨日返書來る其趣にては當六月
廿四日臺所^を出火いかなる故歟屋根へ早く火廻り候^を焼防^をいたし方無
之主従手をつかね候^を只あれよゝといふのみにて諸道具類は不及申舊
記其外迄無殘所焼失せしとの事也さてゝ天譴可恐^をかきり也蟻川のは
なしにては雷火也といふ也まことにや書狀には雷火とはなしされ共似た
る事也○新家此節座敷をつくろひ茶坐敷并しらへ所等をこしらへる暇乞
として參り大工之來り居たるに大に驚申候ひそかに歎息せりよりてかく
しるして遣す新家榮之助殿御在世之節之通御家法相守御位牌にはつかし

からさる様可相守事

此ことをわするゝことのなかりせは行末なく榮行らむ

右は嘉永四年九月大坂に立出立之前鏡作心得として記し候壁へなりと御張出し可被下候午九月左衛門尉禮后院様鷺香院様鏡作殿かくしるしたり○市三郎にも幸三郎宛に壹通○おくにも段々としるし大意は夫を恐るゝこと主人のことくにし姑によくつかふること親よりも大切にし男子と相對して口をきくへからず参り候は、高山家の下女のこゝろへなるへし苦勞にくろうくをつくさゝれば、上の對し親へ對し候不束之罪亡へかからざるよしをしるしたり○いろくの詰ものをなし母上御守り其外の御世話あり御佛前にていろくのことなされ居らせられたるに太郎参りて何卒彰常の位牌をもち行たしと願ふ其ことを聞もし見もしたるも涙を流さゝるものなし八才の兒なからよき心得也この志をよくそたてならはよき士となるへしされ共母上御いやかりにて乳母もいやかりてわれにとふ

故に過去帳有其義に不及旨を申たりおもはぬことにて旅の情の外に大に鵬をきらるゝこときおもひをなせり○父廟へ御暇乞として 御靈屋に参る

○十月朔日 在宿廿九日の夜に高山隼之助來るこれはわれ出立するによりてとくと目通したきとの事也つくくともみるに鼻筋通りいろしろくよきわかもの也才氣もありて利口なる男也よき男故にさてく當惑する也われはしめより斷におよひけるか強弱といひて否の沙汰いはぬうちに姑來りてみむことを乞ひ其外いろくの手續ありて斷るに斷かぬる次第にいたれり今に至りていかむともすへき様なしとわかにてよき男はとしふけてあしき男に遙におとれりされ共隼之助いかにもジミにて御小性のことき人なれはいさゝかこゝにとりとこあり選ひてかゝるところへ与風したることより取組もあやしむへき事也隼之助に御右筆を願ひ候へと教

遣したりおくに十四五より十七八までならは上もなき縁組もおくにカン
氣大に治り別人のことしと母上の御沙汰故少々はよけれといかにも案事
らるゝ也○昨日水野大監物の様子聞に遣したる返事來る是は大監物七月
十四日に山かたへ着廿四日曉居城三之丸の住居是は本丸同前にいたし置
候由臺所へ出火いかなる故にや忽に屋根へ火移候故主従いかせむとお
もふまに不殘燒失せしにて諸道具は不及申舊記諸書物迄不殘燒失せしと
之事也○蟻川能登守はなしにては雷火也といふ也いかにや矢部駿州之忌
日七月廿四日也同日なるも不思議といふへし世上にては廿二日正忌日に
て鳥居一件必廿二日也といふに廿四日なるも怪といふへし○出立前に井
上内藤根本野田へ爲暇乞太郎敬次郎を遣すいつ方にも一兩夜ツ、居る人
々いろ／＼のものをくるゝ御のふ方にては是非共暇乞として上り吳候様
と申越故遣す一夜止宿ウハ共をも附遣し候歸りてみればいろ／＼のもの
をくれ御年寄表遣ひ頭其外より御もチャ等くれたり夥事也嶋澤といふ御

右筆頭は殊に太郎を愛して八丈縞一反くれたり尤兩人のとてくれたり右
之人の今日は今日うなき其外を謝として遣す御年寄之つめ所にて菓子などを
くれて姉ヶ小路より早く歸りて御小納戸に御なり候へなといひしよし太
郎かたる此女無如才人とみゆ御とき坊主案内にて所々拜見いたすいと
しこき御所をも上りて拜見せしよし例之敬次郎故兄サンコンナところへ
上りて叱られはスマシヤといふと太郎答にあの坊サンか案内する故來し
也わるくは坊サンかシバラル、なるへしといふみな女の女中大に笑ひしよ
し敬次郎は御障子を開川路敬次郎也とてリキミたるをみな笑ひたるよし
也神さまの御揚弓のさまなと拜見せしか也おのふことの外の難有かりに
て内々書狀をこしたりそはあらましなれと太郎等かはなしとウハ等か傳
聞を以記す必間違あるへし○明日出立いたす積なるに母上の御不快も既
に御こゝろよく四五日以前より御とこ上りきのふ御さかやきのこと御沙
汰ありけれと御とめ申置たるといふ位のこと也天氣の都合もよかるへし

とおもはる○この度はいとま乞として来る人々も何もかもならの三増倍なるへし一昨日も芙蓉の間の人々其外追々来りて藤川彌次郎右衛門来りたるに逢ことならず中川飛驒守は少々談之品ありて来りたるに忽に出火はしめよりうちませにて麴町三丁目といふこと夫登城といふことにて客もかけ出すわけなるに存外赤坂也きそれにて客のへりたるも大笑也可憐は小笠原太左衛門也日ことに來れ共閑話することならず七十の老翁涙くみて居る也河内忠右衛門などわか次へ来りて強而目通を願ふこれ又同じけふは夜通しなるへし曉より起て髪結てさわく也太郎人情ある兒なれと八才故也敬次郎と道中のまねして遊ひ居る也あしたよりはシタニくも也とて大にさわく也

校訂者曰 原本ニ拾月二日以下ノ記事ヲ欠ク按スルニ散逸シタルモノナラン

房總海岸巡見日誌

(嘉永六年)

○六月廿二日 晴 本多越中守殿海岸見分に付差添差遣され候に付六半時出立に而品川の参る着服野羽織いか袴也御殿山御見分夫を御同道に而海岸御覽有之候晝九ツ時より所々相廻りいか計歎くるしからむとおもひたるにさほとはなし人は氣によるものなるへしされ共汗如泉○天文方を望遠鏡來る重くして用ひかたし直に相歸す○此度は百姓之難義ならざる様にと越中守殿之外は杖拂さらになし

○廿三日 晴 羽田大筒場へ参り夫を羽田辨天の参同所より船にて寄洲見分いたし燈明臺へ上り再び羽田へ歸六郷をわたり池田新田海岸へ参るくさいきれ甚敷沙如火也あつさいふへからす池田新田太郎左衛門といふ

豪家へ小休いたす越中守殿御家來迄左衛門尉家來一同御勘定方御右筆方御目付其外不殘小休いたすいづれも二間三間宛立派なる坐敷をかしたり樽次蜂藏の大盃其外水鳥記等所藏也いにしいよりの豪家とみえたり水鳥は水は鳥は酉にて酒の記なるへし水鳥記は成嶋司直也

○廿四日 晴 拂曉に川崎宿出立いたしかな川程ヶ谷を経て程ヶ谷中程より左へ曲りてホンモク村にいたる漁業專にてよき村也八王子山十二天のはなといふ所等を見分江戸近邊にて第一のけしきなるへし常ならば詩歌の料ともなるへきを只々岸の様子海の淺深大筒々ことのみ也可歎昨日迄江戸出立の朝より少々腹痛也しか今日は全によろし八王子山には今に細川陣營有いかにも龜末の極也越中守殿殊々外御感心也我申上るは亂世ならずとも武の忘るへからさること如此かゝる昇平にこのまうけある驚へしと申たり今日は本牧村千藏寺に止宿湯殿なし庭に石敷たる所にて行水也越中守殿御旅宿には湯殿有新に造たるもの也とて御同人民力を

此寺にありて
水たらしむ
借らるるに
書たる字を
たりてかき
めたりとよ

勞すへからず兼而の達しの定と相違せりとて以之外之御沙汰也難有事也

○廿五日 晴 本牧のはな出立いたし候而杉田といふ梅花の名所に而小休いたし夫々金澤へ参り海へつくり出しに仕たる千世もといふ旅店に止宿江戸の人金澤を上もなきことにいふなれと極狭小にてとるにたらざる所也大和其外之名所に相合候而は箱庭のことし

○廿六日 晴 うら賀近に相成山水殊々外によろしく海しらぬものなとめつらしかること甚し

○廿七日 晴 猿島といふ海上十八丁はかりの島へ渡海いたし御臺場見分之上發砲等々様子一覽いたしうら賀に参る同所殊々外よろしき場所に江戸の如し此節少もかこには乗不申候而歩行也からたの健のみにあらず修行の爲也少も暑を恐るゝことなし

○廿八日 晴 六半時早め之出宅に松平誠九家來共之發砲一覽いたすう

ら賀與力同心之西洋流之砲術一覽船打迄もよく出来申候晨風丸と申ハツ
テイラ風の船にホンヘンの早うちよき手際也○戸川中書脚氣不宜其上
吐血也この人難得人物に付左衛門尉殊之他に心配いたす兩三日之様子に
る歸府なるへし

校訂者曰 本多忠徳一行ノ歸府シタルハ七月十六日ナルモ台本ニハ六月廿九日以下ノ
記事ヲ欠ケリ或ハ散逸シタル歟

長崎日記

○嘉永五^{六カ}丑年十月廿九日 晴 四ツ時自紋ふくさ横麻上下にて登 城御
老若へ御暇乞申上る○御前に被 召候る筒井肥前守左衛門尉荒尾土佐守
古賀金一郎一同へ御懇之御沙汰共難有御事也○御用部屋に御呼出に御
老中一同を今般之御用に付品々被仰含之品有之候若年寄の御部屋にも罷
出候これ別段之御用故なるへし御用多に付御暇廻勤御用捨也夕暮に歸宅
也親族其外暇乞として来る所々を自筆之書狀添候る餞別来る溜詰其外美
蓉之間之御役人方は自筆にて返事遣し候なら人より被頼候額字御用多
に不認不申候間認遣し候醫師より指物をたのみたれは臨戦活人としるし
遣し候○水戸先中納言殿より筒井肥前并自分之分共藤田東湖を以御薬被

下候其御つゝみかみに朱を以御自書にて乍龜製道中備に遣し候
我國の千島のはてはえそしらぬさりとてよそに君はとらすな
川路との水隠と被遊たり筒井之方も同じ御認ふりにて
ことわりや七十に余る齡もてよを長崎に君はたゝなむ
と有右之御返しを

はてしらぬ君のめくみよえそしらぬ千嶋のかすはよみつくすとも
誰余所にとらすへきやは我國の千嶋と君か教仰きて

としるし奉り候或御人より白かれ作之太刀御貸
被成候荒井甚之丞を以御下也

○晦日 晴 左衛門尉五ッ時筒井肥前守四ッ時荒尾土佐守八ッ時之出宅
也板橋宿にて小休いたす親屬朋友其外大勢來る一通り挨拶いたし直に出
立也馬之師坐光寺金次郎前田夏かけ等も參り出入町人共大勢送りとして
來る蕨宿にて晝休いたし大宮に止宿いたす御勘定奉行は殊之外なる御威
光也よりて供之面々ゆすり等いたし候は不相成候間近邊見廻り之八州
を申出る

廻りへ申付候も無遠慮召捕候様申付候道中過貫目なき様嚴敷申付たれば
貫目改所にあかけ改たるに五人五分之減也宿方之もの共嚴重なりとて禮
を申出る

○朔日(十一月) 晴 大にさむし往來の打水氷たり四十度位なるへし例之通歩行
也熊谷土手を一建場のりたる計其余は不殘歩行也

○二日 晴 四十四度のさむさ也道にそゝきたる水は氷たり○今日は熊
谷を出て本庄宿にいたり夫よりくらかのに止宿也○安井九十九親のかた
へ立入濟て安中の領分通行屋敷立入も叶ひたれば今日親へ逢たき旨にて
參る悦て涙を流して行たりこの躰ならばかれ取締るへし○本庄宿は去々
年太郎と同道にて晝休したる時雪隠に鎖おろし有を太郎見て牢かと問た
り其頃におもへは今は物々敷成たりけふも亦右之本陣に而太郎事をおも
ひ出たり八州廻り追々出て案内いたす百姓共百姓らかいかなる貴人かと

おもふ八州廻り土下坐して奴僕如なるに大に驚くけしき也御勘定奉行の旅行は御威光遠國奉行なと、は夥相違也

寒衾難睡欲三更遙報盲僧叫賣聲。心頭陸續千般事。渾是攘夷憤嘆情。

○三日 晴 松井田宿近くなりて時雨のけしき也妙義山のけしき尤よろし碓氷の御關所前の建場にて一昨年太郎慶次郎か神田祭の出し又は牛の真ねしていさゝかも旅こゝろなかりこと脱カと申出たり思カ○安井九十九は願之上板くら家の親のもとへ爲機嫌聞昨夜より参たり元來九十九は子細有て安中領は往來ならず其上父御關所の番頭なれはいかむともなすへき様なしよりて板くらいよへ直談いたし其外羽倉外記より申旨も有之三屋敷領分共勝手次第立入被差免たるによりて昨夜より親之方へ参たる也再生のことく也とて親子手に手をとりはし一時はかり泣たりとの事也九十九親も今夕参りたり父は中村平藏と申たり立派なる男也

○四日 晴 坂本より碓氷峠を越て望月宿にいたり止宿途中日くれかゝ

りたれば如飛歩行したるに案内之手代坂みちにて息切れて途中にへたはりたり道中師より駕籠に不乗日々歩行もしやかこ遅く候は、陸尺引替可申哉之旨伺出るも大笑也右之通健なるも平日夜ル々馬場へ出甲冑歩行する故也新右衛門など學ときは老而不衰と申古人之教御修行あるへしこの六月已來氣根からたも四五段宜相成申候不思議也○碓氷峠には白鹿居候而八州廻り渡邊園十郎は見受候事有之候由同人申聞候間心附ケ候得共見受不申候碓氷峠よりは雪有之候得共少々に御座候さむさは四十一度にて溝まで白晝も氷はり居申候

山風に紅匂ふ浪たちて朝日かゝやく峯の白雪

すゝみ行みちはかく也きのふみし高根の雪をふもとちにして

坂本のさとにあふきし一村のしくれはみねの雪にそ有ける

しかの山梅さくらちるころこゆるかとまたはつかなる信濃路の雪

埋火のものとさむさにくらふれはなかゝやすき雪の山ふみ

○五日 六時望月を出立長くほにて晝休いたすこの邊より段々さむく和田にいたりては三十二度のさむさにて山へ登るほと大吹雪と成峠へ行まての辛苦大かたならず笠の紐みな氷たりされ共山へ登る故汗出るはかり也太郎并市三郎啓次郎などよく聞候へ當年六月より七月へかけ海岸のくらしみ其あつさいふへからす十一月より十二月へかけ寒中旅行さむさまたいふへからすされと暑はあつさの稽古寒はさむさの稽古とおもへは暑寒共にかこに乗るは宿入位のこと也かく修行する祖父父をもちながら其身は十分之修行せずよき所へ養子にやりもらひたく或は五百石を寝ながら取之類よく心得されははちあたりて一生涯人の上に立ことはならぬ也わか子孫たるものわれへ孝行は斷也 公儀に御奉公の爲修行して文武の達人となるへし

○六日 拂曉の出立也塩尻峠より諏訪の湖を見おろしたる晴雪のけしき別段也洗馬よりくもりて追々微雪と成本山迄行たるに木曾に入たるしる

しみえて一望みな積雪也其けしき奇々妙々中々筆にとり詞に述べきにあらず只御用中故此山水に酒なきをうらみとす今日も多分は歩行也此節健なること別段也晝飯五椀余を給て密に

飯鉢の掃除に來たか信濃ものいやまたござる江戸の御奉行

右之通おもひつゝ候而獨にて笑申候

○七日 晴 鳥居峠雪二尺計もあるへし曉七ツ半時出立にてそこを過て福嶋の御關所寐さめのさとかけはしの舊跡うら嶋の古跡等を見て須原宿に止宿也今日十一里はかり之御關所乘輿其外惣歩行也晝飯夥給候而寢さめにて蕎麥一重箱一さら中山の建場にてわらひもち十須原にて夜食三盃也はらのへること夥故也道中師より足を遅くいたし吳且かこに多のりくれ不申候而は棒頭之家業立兼候由願出候大笑也今日のけしき木曾中第一の絶景はつかにのこる紅葉の碧の淵に臨める千態万狀の岩ほ雪にて玉をみかきたるかことき中間までもみな賞歎せぬはなし

あつふすまかけても寒きおもひよりなか／＼やすき雪の山路
松の火をふりてらし行山路のみねよりしらむ雪の曙

○八日 曇 曉七半時出立にて妻籠にて中飯いたし七ツ半時中津川宿へ
止宿也○道中師共達申に付晝前三里晝後三里歩行其余は乘輿也○中津
川の宿と云は木曾山御用之節十一日止宿いたし其後も三日止宿いたした
るところ也右之譯を以本陣より魚一籠出す名護屋より三十里はかり取よ
せたるものなるへし目錄其外遣す高きさかな也其上麻上下をも遣し候此
邊肴などは有ましとおもひたるに忍ひなと如生江戸にては見たること脱アルカ
大サ也○此度の雇頭取締別段に付惣中の金三百疋雇頭の百疋遣し候處右
之禮としてうなきをくれたり是亦目を驚せり家來へもくれたれば組頭其
外の分チ遣し候

○九日 終日雨 七ツ半時中津川宿出立いたし大きくてにて中食いたし六
時前みたけに止宿也○五十度之寒氣也暮○けふは終日輿中にて退屈かき

りなし久々にて詩を作たれとまとまらす追あつくり改候積先しるし置

去山纒十里驚看換乾坤雪意知何處細雨似迎春

渺茫如望海雲霧暗山間驚颺巧揮筆奇峯現半顔

棧道雪堆三百里巫山巫峽寫來真笑言兼盡勝區妙何缺一樽軟脚春餘旅中禁酒故云

道繞深潭還繞嶺新看步々怪天工休言泉石多清興余是官途奇險中木曾道中

竹輿三尺室覆窓油幕中簡書娛僅在山水興全空泥脚辛艱僕桐爐困睡翁

路遙四千里幾度遇斯窮旅中遇雨

辱恩三大尹難報一衰翁關係寰區外定謨方寸中誰言虜情猾我頼國威雄丹

心拂囊底願盡箇微忠偶成

淨々赤身一片筵禪衣脫去不知寒喫烟常臭龍王草採假曾登厠將壇集散如

雲名稱實カナフ怒嬉在醉酒ツナス爲餐トハオヒ家宏五十三次驛笑看行路世人難雲助かく申た

れと詩にならす

折節十三峠にかゝりければ

數のみにみるへきけしきなかりけりわかからうたに似たる山みち
とみつから悪口を申たり

かこのうちをふみよむ窓にけふはしてうたからうたにうき忘れけり
うきといふうき世の中にうきたひのうきかなかにも雨そうかりき
うまやちにきつやとみればはるけてみわたしかすむ野路の松原
虜艦航來款瓊浦星晨踏破雪堆岑休嗤日々尋鞋杖暗學陶翁百甕心

○十日 くもり夕雨 七時半時みたけ出立鶴沼にて晝休いたし加納へ止
宿○加納の本陣は太郎か去々年休に敬次郎と申争婆々に教られたる立
派なる本陣なり笠松の御代官容躰聞として出る

いふき根の雪吹おろす夕かせに衣手さむしかゝみのゝ原

かゝみのにいさこと問はむうつし置し昔のすかたありやなしやと

怪々知何物非翁必少年叱人々不恐々々亦依然杖拂

○十一日 晴 昨夜大坂より長崎の魯西亞船退帆いたし候旨爲心得申參

るいかにも不審され共届之趣難捨置四時過より寄合いたし候旨筒井荒尾
方の急便にて申遣す不取敢明日出立延引之旨相觸るゝ八時急御用狀江戸
より來る同事に付伊勢守殿より長崎に可參旨之御差圖申來る御尤なる御趣
意さもあるへし御差圖可承以前より左こそとおもひ合せ候○七時筒井肥前
守來る同人七十六にて健にはなしの約なるに氣力もおもはれて一同驚きぬ
喜のもしをまとかに玉の浦めつらしき春を迎ませ君
文字 喜のもしをまとかに玉の浦めつらしき春を迎ませ君
長崎のこと也 喜の雪をふみわけて歩行してみたるに氷りてすへり歩行なりかねたるな
と申たり雪中の歩行あまり也とて笑ぬうたは歳暮に可遣顔をみなから胸
にかかひたるをしるす

○十二日 くもり 晝八半時頃までに御目付方一同到着いたす右に付左
衛門尉宅に一同寄合いたす江戸表御差圖之趣一同御尤に敬伏候而長崎に
出立いたす積即刻左衛門尉は加納を出立河渡へ止宿也○けふ承候
品川の突出いやな客を待陰陽石へ正三位有功

天の川ふたつの星の地におちて又雨と成雲と成らむ

二首共おもしろく承候御慰にしろし候

○十三日 晴折々しくれ 河渡を六時前に出立いたし候垂井にて晝休
八半時過柏原へ止宿此さとの前今須との境所謂ねものかたりの里也

○十四日 晴 柏原より高みやに晝休武佐に止宿也

○十一月十五日 夕かたより雨 草津より大津にいたり止宿○草津宿に
なら長吏共罷出候をはしめにて瀬多のはしの邊にて花井隆助并喜三郎等
参りたり折節予も歩行してければ行逢たり喜三郎其外道路に平服して泣
々に御機嫌よう／＼といふ故に予も亦あはれに成たり寶藏院の後見満田
權平盲人春悦事土佐都其外は一旦大津にまち居たりしか予加納に逗留の
よしを聞て引取たりとて所々より遺ひ物を隆助取次候差出候土佐都
はわか遣し候金子にて官衣を着する様になりたり右をみせたしとてもち
來たるに滞留也と聞て力おとして奈良へ歸りたる也所司代并淺野中書

にゐは待居られたるに上京せぬとて所司代よりは三木新藏御使にて菓子
うなき等被下仰下さる旨も有新藏は御先代中務大輔殿之頃より機密に
預りたる相談をもなしたるもの故其ことおもひ出て先ツ胸塞りて御恩を
申出たる事也其外御代官或は横田源七之類まで追々來り其混雜いふへか
らす笹屋太郎兵衛若狭や八兵衛等來るいつれもへ金子其外夫々相應之挨
拶いたすなら人はみな頻に泣故に家來順作等までみなあはれかり色々は
なしの内尤かなしきは貞助次男也わか此節大坂に参り候由及承自分之殿
さま御出也とて日々待廻らぬ舌にていろ／＼と申候由聞もの涙さかさぬ
はなしと也

○十六日 晴又くもり 曉に大津を出てふしみにて晝休いたしひらかた
へ止宿也○同所の狭川常三郎和田榮助岩村榮三郎來りて菓子なとくれ佐
々木か馬にて出火之節罷出候由はなし等承候○御城代より上田角右衛
門御使に敷皮其外被下之尼崎又右衛門などよりも給物くれたり此節目

ろく存外に出申候しかし菓子うなき鮓等給物にありあまり候いかなる福分にや大坂町奉行の御勘定奉行に成再ひ大坂の参たるものなしとてとりくの評判也とそけふもふし宿なと之取扱大坂なら之奉行之節とは別段也與力共機嫌聞に出町代之如きもの麻上下に先立いたし其外十手をさし一刀なるもの二人先立火之用心を呼歩行也ひらかたへ着いたし候處御城代より御直書被下品々拜戴物いたす殊之外に御待被成たるに廻り不申と之義也上田角右衛門は及老年今世の面談無覺束かたみとおもひくれ候へとて加州勝國最上之出來之脇差をくれたり返禮に當惑せり甲冑製作方之義度々申付たるならの穢多伊兵衛は代人を以革製の着込一ツくれたり同人は徒具足五領中間具足十領申付遣候かゝることにて昨日より着候と湯もめしも容易にはなりかね候

○十七日 晴 十一月十一日附之御用狀昨夜四ツ時到來也もちの木坂上屋敷家作共差上候而小石川御門前新見豊前守屋敷家作共被下候旨芙蓉之

間におゐて名代河内守の和泉守殿仰を傳られ候旨申來難有御事也扱又先代新見伊賀守近藤遠江守之屋敷拜領之節之事なとおもひ出候而歎息且は新見は懇意之人に付別而氣之毒也別段之繕金等差遣不申候而は不相成哉と委細は新右衛門方申遣候積せめて万分一之罪ほろほしなるへきかさてく歎息もおさと日記新右衛門之書狀相届夫々承知おさとの日記乍例書かくかことし右之内母上之御不快よほと御よろしきは何より之御事也則御直書被下御健之御様子安心せりさて引移に付而は新右衛門其外民藏俊藏等之骨折おさと之心配等察入申候よく養ひ候而不快少にいたし何卒母上之御世話頼入候

○十一月十八日 晴 昨日は牧方牧カよりもり口の出大坂京橋口より東御役所下天神橋通りより尼ヶ崎の參神崎に而晝休西宮に止宿也西宮よき所也二千石に足らぬ村也家數四千軒有と云酒を江戸へ出すこと十万四千九百樽也其内よき酒を第一ウツ猿わかと云其次正宗也いつれ之家にても勝手に銘

をいふ故に正宗といふ酒に直段數品有平均二十樽十六七兩之もの也と云也けふ西宮より兵庫に至る此所大坂のことし船の入津大坂よりも多と云繁昌目を驚せり西宮より茨住吉岩屋村之内地内といふ所にて小休いたし兵庫にいたる以上五里兵庫より羽箒一谷垂海の小休以上四里にて大藏谷に止宿播州也羽箒より一ノ谷之間敦盛の墓有須磨浦にはいにしへのなこりにて家々にてすたれをかくる也けふのみち生田森生田社其外舞子濱等いつれもよきけしき也大藏谷といふは則あかしの浦也京都などより來りて見たらばめつらしかるへけれと舞子の濱の松林之外はいつ方にも有けしき也乍去としを経て山と水とにあきぬれと猶めつらしき須磨あかしかな

小林金左衛門元養子當時川上金五郎之手代桑名佳十郎附添播磨境迄來る○源氏又は松風村雨の舊蹟有後來は里見八犬傳の舊蹟も有なるへし○けふ兵庫にて大坂與力共鯛とハモをくれたりみな生キ居たり須磨浦にてタコを大なる桶に入有みな達者に生たりいろひきかへることくさてく

ブキビなるもの也

○十九日 曉雨午後より快晴 今度の旅行も天氣都合殊によろし明石を拂曉に出て加古川をわたり直に晝休則加古川村也よき本陣也大坂を越候ゑは本陣みな居間十疊也次其外も廣し建場にも本陣のとき所有夫より姫路にいたり止宿姫路の天守臺は遠く二里外豆崎といふ建場也より雲にそひえてみゆ城下よろし三十万石以上之物成ならては持れぬなるへし見物之老若夥し家老番頭奏者番といふもの路上に平服てせり其外町年寄惣年寄などいふもの諸役人多くいづる家老出れば下乗して挨拶也かく手重なる取扱は御勘定奉行故なるへし

○廿日 曉に姫路を出て三里はかり歩行したるに片嶋といふ所の前より雨と成たり同所にて晝休いたす片嶋と云は脇坂淡路守領分也火消役騎馬にてかためたる位に付至て丁寧也所々城下みな火消の固同し領主より料理出ねり羊羹一箱を贈られたり今度の旅行は長崎奉行受用いたし候例有之候分は伺濟

にて受用いたす右に付キウヒ其外羊羹等差支なし折々酒をくる、所有上
下禁酒例を通なれば(箕)筭(阮甫)作玄圃又は雇頭本陣之類へ遣す也三石といふ所に
止宿いたす山家也

イソへは忌
瓶にて祭器
也今土中
出るものこ
れ也

○廿一日 晴折々時雨此節五十五六 曉三石を出立して片上にて晝休いたす
三里はかりの入海を庭のことくなしたるところにて風そこより歩行していんへ村
景ことよろし箱根の湖水に似て今一段よかるへし
にいたる所謂備前焼をつくる所也手搯十人前三拾二文より六十四文位な
るも有といふ也そこよりかすと村といふ所を経て堤上を行たるに芝原廣
くつる多く群居たりそこに入江のこときもの有小なる湖水かといふも有
われいふけふは吉井川を渡とき、つ吉井川には昔熊澤了介奇絶の堰をつ
くりて水を引數万石の新開を造り後世迄水旱の患なしと聞もし其堰の上
にはあらずや地勢さこそとはからるれと申たり頓て七八丁はかり行たる
に果して大なる堰を見たり堰を石にて五丁はかりの長さにつくり水を引
分て余りを落したる工夫別段也土人に問に不及必これ也とて手を拍て感

したり又太郎より案内之庄家に問ふに了介の工夫に出しといふことまこ
とに然りされ共其頃水理のことに長したる津田左源太といふ郡方之もの
有それか普請備前一國中に往々存せり凡人の及へきにあらずこれも左源
太かつくりたるかと土人は申也といひぬ左源太のことしる人なきは了介
の名高きに壓倒せられしなるへしそこより四里はかり行て岡山にいたる
松平くらの頭三十五万石の城下也城は往來よりよくみゆやくら天守等大
造なるもの也町もよろし大坂のことしそこにいたりて止宿也
○廿二日 朝晴夕かたくもり 曉に岡山を出て川邊と云所にいたり晝休
いたす晝後は七十二町壹里五十町一里に三里故五里に向といふ也より
て例之早足を出して歩行したるに花のことく雪いさゝふり出て風烈しさ
むさいふへからす早足に漸暖氣を招きたり矢懸町にいたり止宿四十七
むさ此邊暖 同所は民藏之取次に懸意なる柚へしの名物有よきみせ也調給
氣に驚候 たるに一段之風味なるかことし○けふ吉備津宮領を過るに社家組頭堀家

近江之介鍵挾箱を爲持候而路傍に平服せりこれ堀家權平か一類なるへし
 そこを過て板倉宿にいたるこゝより備中國也風俗俄に悪しくなりて飯も
 り躰之ものなとみえ宿は至る貧宿に瀆家多しこゝにいたり備前の領
 政宜をしらる元來大藩之近所に小諸侯又は御代官所を置かるゝは彈丸黒
 子の地何之用に立たさるか如くなれと用ゆることあれば神龍に一滴の水
 を與ふるかことく大に雲雨を起すことも有へきにこの風俗となりては何
 之役にも立ましと歎息せり板くら宿にては民藏の身より等出たりとのさ
 まの御書御覽可被下とて出したるをみれば古河^{賀カ}侗庵の若書也民藏を召つ
 れ候は、よろしかるへきにといろ／＼とおもひ出たり

此神部の本陣
 菅波といふは茶山か
 宅也しらすか
 してひるす
 なしたる休
 念也たり

○廿三日 晴^{時々微雪} 七ツ時矢懸町出立いたし神部に晝休いたし七
 ツ時備後國尾のみちに止宿いたす今日は五十町并七十町壹里之みち十二
 里也其内八里半步行也尾のみちの入口たうけより藝州領也田畑開け山み
 ち山畑のくろ迄立派なる石にて坂をは四間はかりの一本の棹石を以足た

まりをつくり左右に石を敷たり其立派なること目を驚せり藝州領入口よ
 り山にかきの木夥し尾道は大坂の如くにて小なるもの也山海のもの何不
 足なくみゆ今日は阿部伊勢守殿より酒一樽鯛の干物一籠を賜たり今まで
 酒は本陣へ遣し來たれと伊勢守殿を賜たる品に付左様にはならず人足を
 雇ひ尾道迄持來りて今日限家來共へ遣し自分も給申候

○廿四日 くもり 尾道を六半時出立三原にて晝休奴田本郷に止宿也○
 尾道より三原へ行みち大なる入江に十里はかり有といふ所々に島みえ
 て晝のことし唯今迄二十余國を過て山水のけしき舞子の濱すまあかしに
 ても格別にはおもはさりけるかけふのけしきは唯今迄あらさる事にて眼
 を驚せり松山多けれとも落葉一ツなし奇麗に掃除したる庭の如しこれは
 山上迄も眞土の所は畑にいたし岩山はまつ生立たれは薪不足にて落葉迄
 薪とする故なるへし梅梢院など參候をさ驚たるへし三原の城は堀入江
 にて魚をとらせす堀に鯛其外海魚夥しと申也奴田本郷は本陣といふは

藝州に在立置茶屋也大なる入かは等有之大造なるもの也藝州の山水いま
た宮嶋をみずといへ共既にわかみたるうちにては第一也田畑亦別段也こ
れにて此節國いたく困窮とは不思議千萬也三原の城はやくら大造に在石
垣の高サ十間はかりも有へし立派なること也人々みな驚たり○尾道の本
陣小川作右衛門宅に三疊の上段に六疊の次之間帳臺附の坐敷有これ豊臣
太閤殿下の朝鮮御征伐の時の御坐所也こゝに寐てもよけれと人々寐給る
人なしと云たりめつらしき坐敷也今は全々寶物となし置様子也奴田本郷
に小早川隆景の古城跡有よほとこの山にて山上に清水有よろしき地可惜左
右の山高し今は大炮を打込まるへし

○廿五日 晴 至多暖氣也
五十五度也 六半時に奴田本郷を出て溜り市といふ所にて晝
休西條四日市に止宿○昨日夕かたよりけふの道はみな山家にて地やせ民
貧也本陣といふものは領主を建置たる也故にいつ方も同じ建さまにてか
らかみかたまで同じ貧村とはいへと關東の如くにはあらず溜り市の間

建場小原村といふにては山陽茶山等之書を多くもち居てみせたり

○廿六日 晝曇雨 七時半時に西條四日市を出て海田市にいたり晝休いた
し廿日市に止宿○海田市より岩鼻にいたりこゝより廣嶋は十六丁に付銃
炮牽馬駕わき六人かち五人にいたし參る廣嶋は城下町に巾三四十間余之
川六ツ有三ツ四ツの邊町よろし長七十二町有といふ也備前岡山よりは少
しくおとりたるかとおもふ也され共にきやか也所々のもちやにまんちう
を多く出しあるにてもしるゝ也町奉行麻上下に在出る其支配向なるへし
大勢出る横町はみな木戸をべたり御成のことし目付役之もの城下町を先
キ乗いたす也定而琴井の尊梅梢院等の有ことなるへし○草津といふ所よ
り廿日市迄の間七十町余宮嶋をはしめにて七里廻り之嶋七ツ五里廻り之
嶋五ツ其外小嶋いくらも有てみちは松山を行也けしき十二分にて尾道よ
り又一段よろし人々驚かぬものとはなし藝州は尾道并城附之如くなら
むには百万石もあるへきに山村やせ村も有て六七十万石位かとおもはる

也○ころ柿を買ツたり一箱三々ツ、也皆大きくして柔也味殊によろし
新敷故なるへし

○廿七日 晴 廿日市を六時出立候。而玖波に而晝休關戸周防也に止宿○廿
日市と玖波の間五里の海岸也船にて行は四里也よりて船にいたす宮嶋の
鳥居の前を通る故に先例も有之故參詣せりはたこや千軒有といふ也夫を
以其大なることをしるへし清盛の造たる廻廊も八尺間に而百八軒有て其
頃の鏡燈籠今に有繪ま等いつれも珍し日本三景之一也といふ尤也はせ寺
を海に築出したるかこときもの也寶物をみるにいろ／＼有其内重盛等之
甲冑數々刀小サ刀數々有いつれも別段也來太郎國俊と銘有良刀有國俊と來太郎
之說有考へし中心等よろし螺鈿の小サ刀等絶妙也鹿はならの如し猿も多し
廻廊に遊び居たり遅くなるを恐れて手廻して出立したり玖波に至り九ツ
時關戸にいたり八半時也今しはらく刀劍をみてもよかるへきに残念也
○廿八日 晴 拂曉に關戸を出て半みちの廻り故に吉川監物城下岩國に

行羊腸のみち大河に添一方は高山也岩國の城は岩山を切開て造たる也追
手前にある大河錦河也それにかけてたるはし則錦帶橋也二十五間ツ、の橋
五ツ有三ツは橋くひなしひち木つくりの如くにしてもち出したるもの也
橋をかけわたしたる石かけ大造なるもの也ところ／＼なまりに而つなき
有形◇かくの如し水勢をさけたるもの也石かけを急流に穿られぬ様に根
卷大石にていたし有元來左右之山と大河とにてよきけしきなるに橋有城
有景色別段也橋板に目板かはりに銅をはりたるもの也橋下に水ある所は
五十間ばかり故に橋の下へ廻りみたるに桁をくみたしかなものを遣ひた
るさま手のかゝりたること夥しこの橋の入用はかりに而も監物か知行莫
太のことしるへし城下町殊之外よろしそこより高もりといふ所にて晝休
花岡に止宿○藝州路より村方不宜ところなどには本陣替に茶屋有御本陣
といふ所を御茶屋番と云也○毛利の領内へ參ると晝休泊共に使者にて野
菜と魚類とを二臺ツ、くるゝ也これ長崎奉行へ之例を以取計事也兼而伺

置たれは受納いたす其度々人足を買上て次々泊り休へもち行本陣へくれ遣すこと也江戸表ならば親類へ遣候もの也毛利領分三十二里之内みなかくの如きよし也此節の日々之手續左之通○目薬齒薬例之通也夫より手水を遣ふ又太郎出て母上より被下候御符御洗米を謹て推いたきて差出且水初穂を以爲給候此又太郎取計少し朝々かはらす候夫を朝めし四はかこの内には近思録をよみ宿に附ては通鑑をよむ也晝めし夜食共先ツ五はい菓子は五切位也大さい二其外例之通也歩行尙六七里以上也雨ふればかこ也日記は御城代と伊勢守殿の上候御用向之日記共に四通り也

○廿九日 晴 曉花岡を出立福川にてひる休いたし宮市に止宿○宮市の前に浮野峠といふ所有こより九州の山よくみゆいつれそといひたるに豊後也と申也○今日にて三十泊也江戸より大坂へ行二度かけ余也しかるに此上十三泊せねは長崎には行かれす旅に一同當惑せり夫に付るも母上の千辛万苦奉感候市三郎幸三郎其外左衛門尉等慎て拜察容易におもふへ

からすこの邊蘆の葉尙青くもみちも有大根を木の枝にかけて干也霜にもいたまぬとみゆあたかなるに驚たり八ッ半時過六十度也

○十二月朔日 晴 曉宮市を出て佐野峠にかゝる峯上に兩便所并こしかけ有かき根を常盤木にてつくりことの外見事也中國之大家にてはいつ方に一ニヶ所つてはあらぬ此みねよりは大海入海山川所々のみねく等みえて實に絶景也かゝるけしき初也供之中間迄大に驚て賞歎せり夫を臺道村にいたるこゝの本陣豪家にて庭に薩州手植松有と聞て來山陽之文に而覺あれは承たるに詩哥文等殊更夥みせたり紅毛人の作たる詩とか哥とかいふへきものさへに有珍敷こと也小郡にて晝休毛利家の茶屋本陣也船木にいたり止宿これ又茶屋本陣也この茶屋本陣といふものは領主普請とみえて大造なるもの也○けふは松平大膳大夫を晝休は野鯉二泊は野菜物二贈物有長州領へ参候は日松平肥前守を明日より長崎迄附ケ廻り之家來差出候

旨附廻りとは朝夕共を以粕漬之鱸海月あらしき酒一壺贈物有之候其上へ道中
師直吉より二鴨をくれたり此節日々野菜物と肴を人足を買上て持歩行こと
也家來共こゝとを申也され共みな 公儀御威光難有事也左衛門尉なとか
ゝる身分に西國旅行實に難有事也

○二日 晴 曉に船木を出て吉田と云所にてひる休いたすこゝも領主の
茶屋にて大造なる構也さなから寺のことし其一里前に石炭といふ所有石
炭出るか尋しに少々は出ると云下關にて聞は石炭は筑前より夥出長門
の北うらなといふ所よりも出るといふ至下直のもの也下關市中を通る
にかやりの臭氣甚しきかときは石炭の臭也長府といふ所に小休いた
すこゝは毛利左京亮城下に市中へ家老町奉行其外役々出ることにては
小休所に並之銚子椀も菓子吸物酒三品あはもり酒出ること又先格也家老其外役
々に逢候家老玄關白洲迄送り候夫々下關へ参り止宿即赤間ヶ關の事也人
別三万前後なるへし家數七千余有といふ也時計師刀やなと有大坂の如し

本陣殊々外立派也市中に家老其外詰居候領主より料理也家老は左衛門
尉の番頭は組頭へ挨拶として参る其外小倉より小笠原大膳大夫之迎船來
り右之使者等來る本陣取込大かたならすしかし 公義之御威光驚入たる
こと也けふは檀のうらをみる大海かとおもひたるに長州と豊前のせと也
こゝよりは九州至近くみる豊前の村々なるへし窓の入口なとよくわか
るそれによりておもへは海の中十四五町廿町内なるへし

○三日 快晴に海上殊更に穩也 五ツ時と申ことにて五半時頃下關
にて鍋嶋の迎ふねに乗るはしけ船なれと立派也十町はかり沖にわか船し
るしのはたふき流等立たる船ありて夫に乘移るこの船は二階附にてけし
からぬ立派なるもの也大船頭といふもの其外乗居候船手はみな惣髪にて
角力取の如し乗船候と太鼓をたゝき候船歌を哥ふ也西國は船手みな上
手也三里のわたしをはつか十町はかりにいたし候と又もとのはしけに乘
其以前より紫幕の船に案内として小笠原大膳大夫家來罷出居候先乘

いたす小くらの上陸いたし候と大膳大夫家老はしめにて家來共夥出る兩岸并橋の上見ン物夥しき事也肥前の迎船をみるに四方は五色緞子の幕をたれて遠くより望けしきことよろし龜甲に三ツ星の船印其外共にいとくきらくし紋所ちと上り過たるかとし可恐可慎着之上に小笠原之家老或は諸役人肥前筑前之用達長崎用達其外御代官之使ひ等夥來れり遠國奉行となりて海船には佐渡のわたり二度桑名のわたり三度或は大坂の川船等まで乗たれとけふを以第一とすへし○下の關へ行と朝日西國の山より出る也

西の國の山よりいつる朝日かけなれて赤間の人はいらむ

○十二月四日 くもり 曉七ツ半時小くから出立いたし候木屋之瀬に晝休いたし飯塚に止宿○小倉を去ルこと一里半大藏村といふ所より筑前の國也こゝに黒田美濃守家來三人出迎居壹人は領境のため壹人は附ヶ廻り也一人は美濃守義今日晝休に相成候木屋之瀬に兼る罷出居候間 公義御

機嫌も奉同度且對話いたし度と之事也承知之旨申遣ス石坂といふ所へ行たるに再使用者に美濃守参り居候得共別段御急には不及候旨申來る木屋之瀬には當月朔日より参候而待居候と之事尤遊獵を兼たると之はなし也美濃守は同人罷出居候茶屋に参り松平肥前守は旅宿へ彼方参候由は承り其手續も承り候得共御勘定奉行長崎御用として参候は近頃は初る之事故例も無之候に付長崎奉行之准例を用ひ可申大國へ對し不敬無之様いたし度旨申遣候處彼方に委細に申参右に付麻上下に着替家來はも引用人計野袴に召連候門内の黒田家之用人其外出迎いたし居候間門内の陸尺之足を片足いれ不申様にいたし下乗候御朱印は用人之首に爲懸候而召連相應挨拶候而玄關に刀持へ刀をわたし次之間へ入候處家來麻上下に夥平服いたし居候處其所に美濃守出迎に付及挨拶候而同人案内に座敷の通り床之間を後ろに着坐候處 上様益御機嫌克と申候間御機嫌宜候旨申之畢る美濃守居直候間同人之對坐之所へ刀かけ差出左衛門尉之刀かけ

左衛門尉至
多静に取
題し美事也
可惜おさと
候に爲見不申

有之候に付右之所に着坐候も少々進みなからいさ下り候も彌御勇健と
申候處彼方にても御安泰と被申候夫を椀盛菓子吸物酒肴貳種薄茶并菓子
出る大家國持と初る對話之事故菓子も給酒も十分に三獻給申候畢も直退
去いたし候積之處美濃守領分に金銅山出來右之試掘として美濃守出張之
由に金くさり等差出佐州をも相勤候由を以色々相尋候に付相應及挨拶
候西洋に青キ色に金より今一段貴キかね有之候處右も出候由など咄也
元來金山には山師多し領主かく乗込候もは無覺束事也歸らむとするに美
濃守いろく異國の事など人拂にも申漸之事に暇乞いたし候處鷹を
召連捉飼候由にも御鷹之鷹之如くにいたし近習二人にも鷹三ツかも二ツ
持出たり夫を美濃守直演達にくれたり次之間まで送られ候夫より旅宿
へ歸り立つげに着替候も如飛に急候も旅宿へ着候處高橋古助殿被參居候
間いろくと物語候處御同人烏犀圓にて宜候由にも足其外共よほと健に
も以前は若やかたり酒を出し飯振舞美濃守より貰候鷹を料理候も振舞

候處酒も飯も十分に被給候わか今般之御用其外御役之事を日田之もの共
殊之外喜ひたりとて大原八幡之神主御祈禱之札等を差出候由にも土地之
もの之喜ひ大かたならぬ事之由不思議なるもの也いろくと夜九ツ時頃
まで物語いたし候○けふみるに小倉領は二十町余もある宜城下町也筑前
領よろし乍去貧家多し山家と木屋之瀬之間村々より石炭夥出る山之如く
掘出したる所等有赤土之如き山より出る也

○五日 晴 拂曉に飯塚出立候も山家と申所に晝休田代に止宿此田代
より前一里ほとこの所筑前と肥前の境也田代は宗對馬守領分にも中老長棒
牽馬にも領分境の出る中老故下乗に不及候○今朝見立として古助殿御出
也目出度歸府かけ可懸御目旨申候も御わかれ申候○山家といふ所の太宰
府之もの共罷出居候も御札其外差出先格に寄目錄遣し候○此ほとは二尺
七寸之刀にも日々歩行故冷水峠にも

長かたなかこにもものらすとしよりのひや水峠ふみ越て候

家來一同大に笑ひ申候

致使大藩訪戟牙送迎相集馬還車。畫船風穩忽看得陸續鎮西粉壁家。
赤間關上年將暮暖足輕衾伸足眠。扁舟叫賣曉纔止吐旭鎮西螺髻嶺。

これは下の關にて也

○六日 晴 七時出立神崎と申候所に晝休八半時肥前之城下佐賀に着
○晝休後はやのときものに行逢心にかゝりたるに佐賀手前の參候處長
崎より急狀來候る三日之内に役々來り不申候は魯戎うら賀の參可申と
之事も馬鹿なる使節其手に可驚かはと存候得共長崎かく申參候上は
七ツ時魯戎渡來と之事計に申來急速出立之積佐賀を長崎へ船に參候間道并山みち有之船
之方を申談候處一番手其外船に罷出かこ無之由に付明後日までに陸本
道長崎へ參候積明曉九ツ時出立之積申觸候○松平肥前守入來玄關次之間
へ出迎左衛門尉上坐に御機嫌伺之式有之其後閑談いたす元來懇意之事
十年來面會いたし不申候事故肥前守話に可申こと胸より湧出てはなしな

らすと之事也六時過まで對話歸には必長坐と之事に相別候今日佐賀を
見たるけしきにて沃野千里之地人別五十万と申候は如何と申たるに大に
笑て四十五万有五万は拙者代に成追々ましたりと申されたり肥前守御機
嫌伺之序左衛門尉安否をも尋候に付右之挨拶として肥前守旅宿の直參之
先格也然ル處急之御用に付例も有之右は斷と之事に付是非參候由申候處
左衛門尉は玄關迄に候得共其相濟不申候内は歸城不致相待居親族并家老
は門内白洲に出迎いたす事之由に付御歸城御遅く被爲成候は恐入候間
仰に隨ひ罷出申間敷其かはり直に御歸城被下度と申候處急度其通と申候
事に付其積に供揃に相成罷歸候間玄關式臺迄送り申候乍去余り氣之毒
に付直に名代之使者を旅宿へ遣し候處いまた旅宿に罷在候と之事に付大
に驚候る追ふ機嫌聞として參候肥前守親族并家老の面談之上右之別段優
待之厚意禮申述候今日は八寸重に五重之重詰并鮮鯛酒等先格を以贈有之
其上家來末々迄料理出るいかむともすへき様なく本陣其外雇之もの共迄

遣し候江戸ならば中間之難義なるへし

○七日 晴夕雨 夜九ツ時過佐賀出立いたし候而兼而之晝休并泊り之場所
所ツキに木錢米代拂少々宛食事いたし候而二日分歩行候而大村領彼杵ツキに着
十三里余之歩行也○塚崎といふ所は肥前守茶屋ツキに温泉有よき遊山所也
華清宮のいにしへおもひ出らる此邊梅花咲たり

○八日 曉大風微雨朝より快晴夕くもり夜雨又あられふる○四半時起し
に九ツ時過彼杵出立いたし大村并矢上といふ所にて食事いたし六時
過長崎之内中嶋と申所御鋗炮方高木貞四郎明屋敷ツキに着いたすこれは同人は
今度自分罷越
候に付明拂町年寄日見峠ツキに迎たるかはしめに市中ツキ之もの共役つとむ
ひたる也
るもの共之分は不殘追々出る皆町人ツキに凡之躰佐州に似たり今夕より手
賄に成御普請役兼而左衛門尉之儉約なるを知れば申付て着之祝ひとて焼
物并吸物一ツツキに而しるしはかりの酒出候計全之一汁一菜と成○夜分支配
向并紅毛通詞森山榮之助其外來り候而夜九ツ時過までかゝる○着之節町

年寄之内三人は玄關式臺御普請役同斷支配勘定櫻井重左衛門外貳人は玄
關へ出迎いたす○高木貞四郎は十人扶持之御鋗炮方なるに屋敷三千石以
上之御役宅之如し御勘定方詰所并箕作玄甫主從左衛門尉惣供方まで住居
してまだ廣過候宅はあまり立派にはあらねと見苦といふにはあらず床か
まちタカヤサン也長崎の六ヶ敷所なること可知○昨日途中をみるに菜の
花つはきの花咲申候此節之さむさ例也と申也唐蜜柑の木所々にみゆ
羽書頻報虜船來笑臥旅床ツキ射若雷無柰官途輿論囂星奔侵曉向瓊崖

海雲如猱虜欲雨自由飛何勝天風力忽看旭日輝

○九日 雨 今日より宅へ御勘定方相越より合いたす○今曉はからすに
驚されて起申候○六半時江戸より御用狀到來いたす魯戎より之再書翰和
解も參る兼而考置候通に相成候は扱々國家之御ために心配之極なり身は
差上置度たれば心配なし

○十日 晴 大にさむし筒井肥前守方ツキに參る長崎人物をみるにかみかた

ち江戸の如し○往來に三尺は、二通りに切石を敷有之候尤よろし
○十一日 晴 より合として筒井に參る○魯戎と對話之節彼方に立居
候間曲ろくに乘日本は着坐いかゝに付白石か琉球人と對話之時椅子兀子
之類を用ひたりしこと有と覺たる故に蕃客對話之式古賀に問たるに向
にしらす延喜式によりてみれば隼人式蕃客對話之ことみえ玄蕃式にもみ
え椅子胡床へ日本の人儀式の時よりたりし證分明也唐學者之詩文の人は
今日のことには一向こまるもの也武士之學文は實用に有たき事也○筒井
肥前守方に參る此節は長崎奉行より上役之廉に日々六人かち士六人二
本道具にて出るにさし押其外日雇頭等之もの共まで附添候而立派五六万
石以上之如し○此節は大棒居合をはしめ其外例之通朝はしほを斷晝夜共
惣菜之外は少もなし勿論酒もなしかくなくては取締出來不申候○通詞骨
折候もの有之目錄に大小鋸遣し候これも御奉公の一ツ也いかにも節儉に
して御奉公に金子を出すことは少も厭ひ不申候

○十二月十二日 くもり 自分旅宿にて寄合筒井肥前守其外一同來る○
魯西亞人共役々之人々船へ參り吳候様申來○御國躰に拘候義に付難參旨
申遣す尤追ふは見物として可參旨をも申遣す再々應之通辨に船之懸
合彼是に支配向之引取候は曉に成以上は十一日之事也今四ツ半時過昨夜遣し候
御普請役御小人目付來候而使節彌明後十四日長崎奉行御役所可參旨申
聞候承知之旨申遣す十五日には肥前守初一同異國船に參吳候様申之兼而
之覺悟に付十七日可參旨申遣すこの應對前後之懸引中々筆之可及にあら
ず紅毛大通詞西吉兵衛森山榮之助と申候もの取扱榮之助別段なる差働有
之候ものに通辨殊之外達者に蘭書を譯すること手番をかくかことし
○十三日 雨 長崎西御役所月番水野筑後守方に參るこの御役所は紅毛
夷出嶋之旅館に附たる所にお目下におらむた旅宿を見わたし候高サ十間
はかりも可有之候旗竿立有之候これへ佳節其外之時旗をあけ候事也其外
は瓦屋根みえ候計外に相變候事なしこの御役所を長崎之湊よくみゆる魯

西亞船は一里はかり沖にかゝり居候遠目かね持たるもの一兩人ツ、始終
 ほはしらの上に相見候○今日町年寄共之宅前を通るに大名之如し大に驚
 ○十四日 快晴 五時より西御役所へ参るのしめ麻也参候一同行揃候
 肥前守左衛門尉は裏附之かり衣に白かね作之太刀爲持之長崎奉行大
 澤豊後守水野筑後守は大紋に糸卷の太刀爲持之儒者古賀金一郎は布衣
 御勘定組頭中村爲彌御勘定評定所留役菊地大助布衣着用はきつれも足袋を御
 御徒目付は素袍着用支配勘定是又同し尤長崎立合として参候ものは麻上下
 自分召連参候日下部勘之丞はかり素袍也四ツ半時魯戎使節小船のり候
 亦来る祝砲と号し大炮五發いたす船に殘候もの共はほはしらの繩に上り
 候亦夥し日本取締之船太鼓魯戎之太鼓類に聞ゆ段々近く相成候亦上陸い
 たし候と魯戎はチャラメラ太鼓にて高嶋流之調練之凡躰に亦上り来る劍
 附銃炮之もの帶劍にて將士之もの廿七人いづれも天鷲絨筒袖着用也使節
 は羅紗之衣類に紅之五寸巾なるもの之帛にて紋あるたすきのこときもの

をかけたりにこれ貴頭にはかたち小桶の末細なるかことき帽子に金にてか
 さりあり上へ白き毛を附たるを着したるを門を入るときとりて手に持始
 終手に持居候帶劍也永井能登守に似たる男也茶いろのかみのけ三寸はか
 りはえたりひけ又同し三十一歳也と云
 六十歳位にみゆ金之房を左右之肩に附たりふさ長し
 半えりの
所は金に石のこ
 ときものを附たり船將酒井右近に似たる男にて髪黒
 キ方銀之ふさを附其餘同し船將次官金のふさを附短し通
 弁官也次官にて金の
ふさいかなる故にや船將之次席なれ
 と通弁之故を以使節之次に立つ也將士羅紗又は天鷲
 絨の衣類也右之面々都合三十一人座敷
 へ参る夫と一時に筒井肥前守其外一同罷出候亦通詞を以夫々及挨拶候亦
 暫爲引候此節はいつ
 れも立居候夫座敷殊更に高き高麗へりの二疊臺を敷此節延喜式并
 折たく柴の趣
等参考候
 不都合に困候間先例により如此魯人は椅子三十二も
 ち来る椅子の前へは卓の
 如き臺をつくりて並へたり右之座は使節船將次官之通詞船將并頭分之將
 士以上四人椅子により此方は筒井自分計にて筒井自分より時分時也飯を
 あかり候へと申候時中村爲彌菊地大助は二疊臺なしに立居候間自分よ
 り爲彌へ差圖いたし候上三汁七菜にて酒をも爲給候給士は魯人は長崎之地役
 人筒井自分は銘々之家來

のつもりなりしか地役人共恐レ強習禮之節散々不出來に付家來は柴崎秀三郎安井魯人は箸を持つことを不能夫故に蘭館よりさじを取よせ候る食事之時わたし遣し候處御丁寧なる御事めつらしき御料理など其外筒井之高季を殊々外に稱してかゝる奇人と相對すること喜しなど申たり彼國長壽之もの少かるへきか三十一之もの六十位にみえ通弁官の後ろに居候る書留いたし候等は十三料理畢る長崎奉行其外一同着才也と云日本にては二十前後のものなるへしとみゆ料理畢る長崎奉行其外一同着坐いたし候上今般之開口いたす聊之事なれと云々有之候る通辨之もの大はたらき也漸七ツ時過に相濟候歸り之節も音樂也船にては祝ひ候哉三本の橋七夕竹のことくにいろ／＼の旗を夥附たり○給士之もの何分地役人にもは不手際と之事に組頭をたのみに付家來秀三郎九十九かし遣し候將士之内若もの共秀三郎九十九次之間將士等か居たる所に立居たるに來りて手を振りナカサキ女ヨカ／＼といひたるよし也黒田勤番之士夜分に聞に松魚／＼とうる聲もアハ／＼などいふさわき聞たるよしなと承るは風されと日本人常に加り居る也油斷すへからす

○十五日 晴 寄合に付筒井方々參る○魯戎共殊々外六ヶ敷事共申出候る船の參候は是非に押付候る手荒之事を申成し日本之境其外を可相定哉も難計けしき也寄合席へ松平美濃守別事に來候る魯戎には日々帆を干候るいつにても出らるゝけしき近頃の所置甚可怪なと物語候併役々乗込候とも美濃守等之軍兵有之候に付安心之由物語たるに西洋之船甚早し走出候るは中々大炮間に合かね候間美濃守家來之内死を潔いたし家來十九人を我らか家來之内に可召連候其外火薬を仕込候燒船壹艘を供船之内へ加へ可申候に付夫の火を附一同切込可申と之事に付其節は役々之もの共をも無貧着火をかけ可給候乍去おもふ旨も候へは後刻可及御挨拶とて歸したり美濃守は五十四万石之大名なれと殊々外に氣之よく附御用立人也同人歸候る我申出候は美濃守申分尤也され共魯戎之船を燒打候る役々之敵を即坐に打吳候は忝候得共左候るは公儀へ大國之敵を新に拵候に當り不相當也これ畢竟一人は死ぬましとする故より也抑左衛門尉此御

用被仰付候は別命は一日限之ものとおもひいか様ともいたし國家之御爲に身をいたし可申と存候間十七日にもし魯戎手荒事いたし候は、荒尾土佐守は御目付之事に付始末御覽候御老中方へ御聞に達し可被下候筒井肥前守は格別之高年に付御歸り可被下候左衛門尉一人魯西亞船に殘候御彼國之參り候は、其帝王の說候御爲を可仕と申切たりよりて中々に美濃守家來卒爾に火なとをかけ候御天下之事を傷ふこと有は如何に付右等之事は可及斷と存候よりて同家老を左衛門尉方へ呼可及斷と申たり右之論に諸人色々談判中組頭中村爲彌罷出候御返簡にも重臣貳人と被記たるは肥前守左衛門尉也右之二人を魯戎に被差押彼國之罷越候様之義有之候御國躰に拘り候間決不相成候爲彌壹人惣代として被差遣被下度とおもひ切御申出たり左衛門尉申にはそは爲彌平日に似ざる不實意也支配向を遣し候御は左衛門尉之士立可申哉いかに卒爾なることいふへからす此ことは不相成と大に争たるに肥前守申には同人は一旦御役

御免をも被仰付候御年老たる身をかく迄に被成候御事故老年旁身を捨ることは決あいとすわれ行へしと云故に肥前はならず左衛門尉行へしと云たるに儒者古賀謹一郎も諸人かくいふに一人可殘にあらす決して謹一郎行かむと申たりかくいひ争てはてなしよりて夫よりも先魯戎をこゝろみむとて書簡を遣したるに返事よし左衛門尉より通詞榮之助を内密尋たるに少も子細なし見損したらは申譯に榮之助第一に使節に飛かゝりて御先かけを仕らむと云さまおもひ込居りみゆかたゝこゝろ少々おち附候御明日美濃守家來呼出候積申遣したるに美濃守より四人の直書を越していろゝと論し明日直參左衛門尉と可申談旨申來る夫より歸宅夜九ツ時也此節九ツ半時前後より早きことなし

○十六日 晴 朝六半時松平美濃守來る直に旅中之事故居間へ案内いたし主人のしを出すいろゝと海防之論有て後昨日之家來を可貸と之事を謝し候御見込を申家來かし吳候義等は斷候御若異變有之候は、美濃守の